ISSN 2436-6757 (Online)
ISSN 2436-6765 (Print)

国立近現代建築資料館 紀要

第2号 2022（令和4年）

Bulletin of National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs

Vol. 2 2022

文化庁
国立近現代建築資料館
National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs

国立近現代建築資料館 紀要

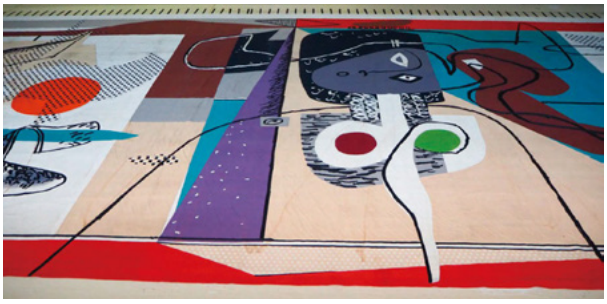
第2号 2022（令和4年）

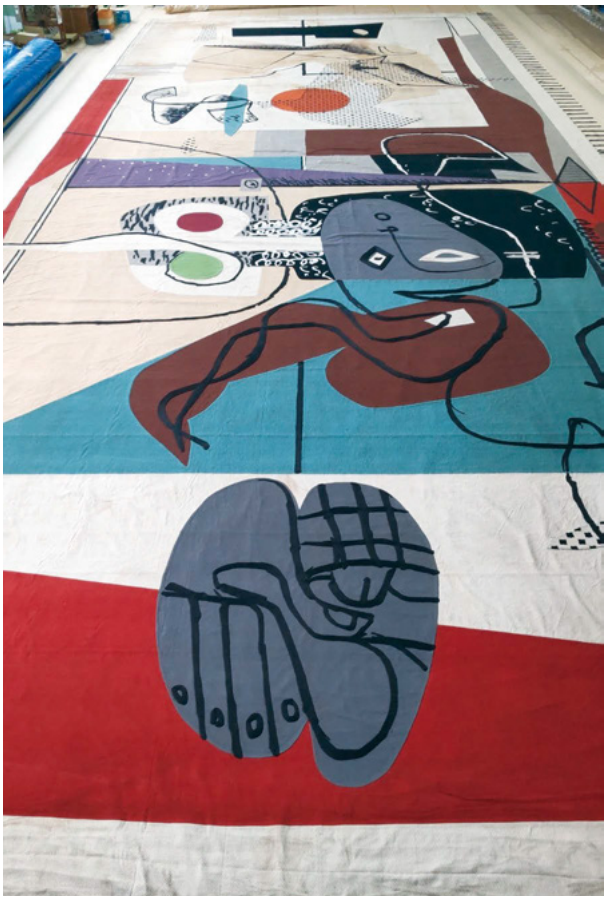
Bulletin of National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs

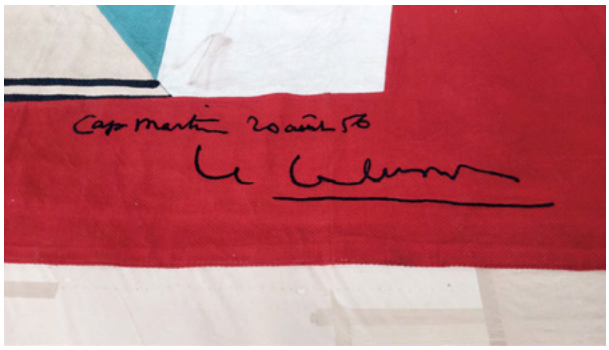
Vol. 2 2022 (Reiwa 4)

文化庁
国立近現代建築資料館
National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs

旧東急文化会館パンテオン劇場にあった緞帳







坂倉準三設計の旧東急分解会館にあった劇場パンテオンの緞帳は、坂倉がル・コルビュジエに原画を依頼して、川島織物合資会社（現株式会社川島織物セルコン）により製作された。原画到着から完成披露まで3か月弱という短期間で制作された。

ル・コルビュジエの原画に基づくタピスリは数多く制作されているが、最大の大きさを誇る。

東急文化会館取り壊しに伴い、株式会社東急電鉄から国立近現代建築資料館に寄贈された。

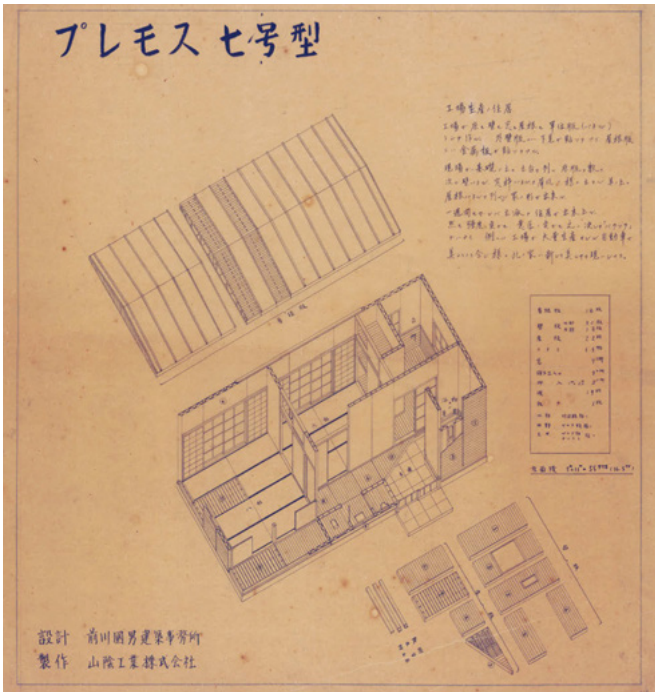
これらの写真は2021年10月に行われた点検に合わせて実施された内覧会で撮影された。

詳細は本誌掲載論文「火のないところに煙は立たず ―ル・コルビュジエの原画に基づいて制作された東急文化会館の緞帳について―」を参照。

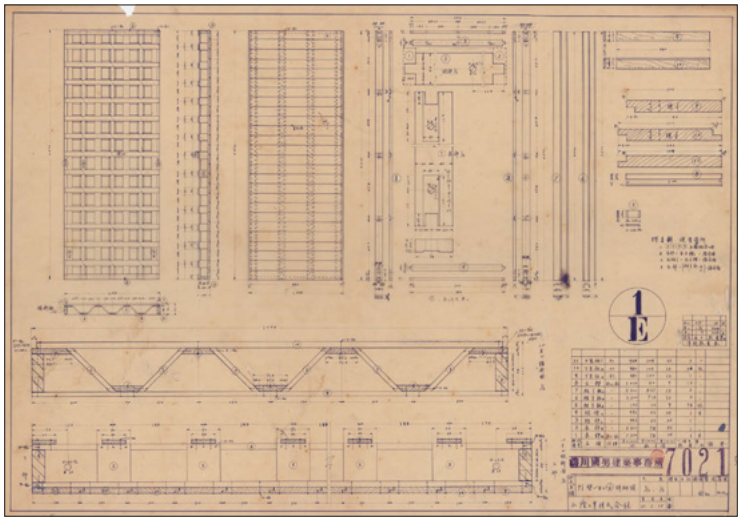
写真撮影
左上：加藤道夫
左中、左下および右下：寺内朋子

「プレモス」（設計：前川國男建築設計事務所）－戦後住宅復興の道標－

令和 3 年度収蔵品展「住まい」の構想 収蔵資料が物語る名作住宅 1940– 1975、にて展示。



この図面（作成：1946年、寸法：555 × 572mm）は、実用化に成功した戦後復興住宅「プレモス七号型」の概要を説明した貴重な一枚である。プレモスは、戦後の住宅不足を解決すべく、前川國男が取り組んだ木造パネル組み立て方式の大量生産住宅であり、プレモスという名称は、プレハブの「プレ」と共同開発者 3 者、前川、小野薫（東京大学第二工学部教授）、山陰工業の頭文字を組み合わせた造語であった。実際に5000件ほどが建てられ、戦後日本の復興住宅の道標となった。



プレモス七号型の壁工法の詳細を描いた図面（作成：1946年、寸法：787 × 560mm）。プレモスの壁は、山陰工業株式会社による戦時中に培った飛行機製造の技術を用い、安易に運べるサイズの規格であることを基本とした。七号型の壁の内部は、斜めの材を用いたハニカム工法であったが、その後の改良型では、制作に手間のかかる斜め材を減らして、横桟と縦桟を主体にした工法に変更された。それは、施工の合理化や容易さに向けての地道な技術革新であり、図面はその革新の過程を物語ってくれる。

国立近現代建築資料館 紀要

第2号　2022（令和4年）

目　次

口絵
2　NAMA's Collection

論文
7　火のないところに煙は立たず
—ル・コルビュジエの原画に基づいて制作された東急文化会館の緞帳について—
加藤道夫

22　上海華興商業銀行綜合社宅（設計：前川國男建築設計事務所）における住戸計画と空間構成
—収蔵資料の分析から得られた知見—
小林克弘

資料紹介
34　ヴァスムート氏所蔵吉田鉄郎著作関連資料整理報告
江本 弘

38　村田豊建築設計資料のうち、図面以外の資料について
飛田ちづる

44　国立近現代建築資料館が所蔵する菊竹清訓設計の日本政府建立戦没者慰霊碑の図面群について
戸田 穣、加藤直子

プロジェクト解説
50　「丹下健三 1938–1970　戦前からオリンピック・万博まで」展開催記録
—アーカイブズ展示の試み—
木下紗耶子

報告
58　建築アーカイブズのあり方
—令和3年度アーカイブズ・カレッジ短期コースに参加して—
飛田ちづる

年次報告
64　令和2年度 国立近現代建築資料館活動報告

Ⅰ．資料の調査・保管等 64／Ⅱ．展示・教育普及 66／Ⅲ．情報収集 72
Ⅳ．調査研究等 72／Ⅴ．委員会 73／Ⅵ．運営 74／Ⅶ．予算 74
Ⅷ．組織 74／Ⅸ．年譜 75

Bulletin of National Archives of Modern Architecture

vol.2 2022

Contents

Frontispieces

2 NAMA's Collection

Articles

7 No Smoke without Fire — On the Rideau of Tokyu Cultural Center Designed by Le Corbusier
KATO Michio

22 Planning of Residential Unit and Spatial Composition in Shanghai Hua Hsing Commercial Bank Dormitories designed by Mayekawa Kunio — Some Findings Obtained by Analyzing Collected Materials
KOBAYASHI Katsuhiro

Materials

34 Report of the material for Tetsuro Yoshida's German Trilogy donated by Ernst Wasmuth
EMOTO Hiroshi

38 Report of materials except of drawings among MURTA Yutaka architectural materials
TOBITA Chizuru

44 On the Drawings of the War Memorials erected by the Japanese Government, designed by KIKUTAKE Kiyonori in NAMA Archives
TODA Jo, KATO Naoko

Project Explanation

50 A Report of the exhibition, "Tange Kenzo 1938–1970, From Pre-war period to Olympic Games and World Expo": Case Study of Exhibition from the Aspect of Archives
KINOSHITA Sayako

Report

58 Role of architectural archives:
From the experience of short course in "Archives College" by National Institute of Japanese Literature
TOBITA Chizuru

Annual Report

64 Annual Activity Report of NAMA, 2021 (Reiwa 3) fiscal year

I. Activities of Materials 64 / II. Exhibitions and Education 66 / III. Information Gathering 72
IV. Research 72 / V. Committee 73 / VI. Management 74 / VII. Budget 74
VIII. Organization 74 / IX. Chronology 75

［論 文］

火のないところに煙は立たず
―ル・コルビュジエの原画に基づいて制作された東急文化会館の緞帳について―

加藤 道夫*

No Smoke without Fire
— On the Rideau of Tokyu Cultural Center Designed by Le Corbusier

KATO Michio

The aim of this paper is to situate the rideau of "Pantheon" theater in Tokyu Cultural Center [Tokyu Bunka-Kaikan] in the career of Le Corbusier as an artist. The results are the followings. 1) The seeds of ‹taureau› covers all of his painting genres: still life (object types and objects with poetic reactions), figure (female), mythology and landscapes. 2) The rideau was related to his tapestries collaborated with Pierre Baudouin through dessins. 3) It realized the peak [floraison] of his ‹taureau› series as a rideau. 4) It composed of the «taureauX» and «taureauXI». 5) There exists another rideau project of for Sakakura, based on ‹I dreamed [je vais]› series, which has not been executed as a rideau. 6) It is located almost in the center of bull-related mythology: from the rape of Europa to Adriane. 7) He picturized his final message of «Between-two [Entre-deux]» in the rideau.

キーワード：ル・コルビュジエ、坂倉準三、東急文化会館、緞帳
Le Corbusier, Sakakura Jyunzo, Tokyu Bunka-Kaikan, Rideau

1. はじめに

国立近現代建築資料館は、東急電鉄株式会社から寄贈された旧東急文化会館にあった劇場「パンテオン」の緞帳（以下「東急緞帳」と略記）を所蔵している。東急文化会館は、ル・コルビュジエのアトリエで勤務した坂倉準三の設計で、東急緞帳は坂倉がル・コルビュジエに原画を依頼して川島織物合資会社（現：株式会社川島織物セルコン）の製作で実現した。

坂倉は、『東急文化会館竣工記念パンフレット』において、ル・コルビュジエから送付された原画を添えて、東急緞帳が「闘牛第14号」であり、ル・コルビュジエの連作〈牡牛〉の14番目の作品にあたると紹介している（図1）[1]。

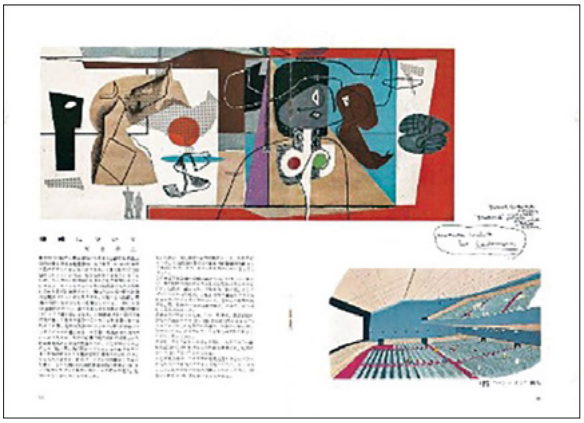


図1 『東急文化会館竣工記念パンフレット』pp. 12–13

これまでデッサンを含むル・コルビュジエの絵画作品については多くの研究がなされてきた。しかしながら、東急緞帳に関しては未詳の部分が多い。その要因は以下の2つに大別できる。

第1は、東急緞帳が日本で製作されたため、特に海外の研究者にとって、情報が限定されていることである。ル・コルビュジエでさえ完成した実物を見た経験はなく、参照可能な原資料は自身が作成して坂倉に送付した原画と「東京の劇場の緞帳：牡牛XIV作成のために添えられた注釈［Note pour accompagner la tapisserie formant rideau du Théâtre à Tokyo TAUREAU XIV］」（以下「注釈」）にほぼ限られている[2]。

第2はその逆である。東急緞帳は彼が画家として制作した多くの作品に根ざしており、直接関連する連作〈牡牛〉の系譜をたどるだけでも形成期から晩年にいたる彼の絵画作品全体をカヴァーしなければならない。そこでは、複数のテーマが断続的に反芻されるだけでなく、変異や転移を通じて相互に関連付けられ複雑なネットワークを構成している。

それを裏付けるように、連作〈牡牛〉の開始（誕生）直後の1954年に「得も言われぬ空間［espace indicible］草

*国立近現代建築資料館 主任建築資料調査官、工学博士

稿」において次のように振り返っている。「火のないところに煙は立たず。根のないところに果実はならず。種子がなければ根は生えず」(N. Jornod et al., 2005-2, p. 873)。

また、最晩年の1965年にはデッサンを通じて段階的に観察と探究を続けたと記している。

「デッサンする[dessiner]こと、それはまず見る[regarder]ことであり、観察[observer]し、発見[découvrir]することである。(中略)私はずっと前から描いている。風景、建築、ビストロのグラスと瓶、ランタンの膜、貝、石、肉屋の骨、小石、かわいい女性たち、諸動物。それらが段階的な道程[les étapes]であり、鍵[les clefs]……である」(Petit, 1968, 頁付なし)。

以上の記載を東急緞帳にあてはめると、以下のような仮説を立てることができるだろう。1)デッサンを通じた複数の種子の発見を出発点とし、2)それぞれの種子の展開(根)を通じた〈牡牛〉という果実の誕生を経由して、3)連作〈牡牛〉の一つにあたる《牡牛XIV》、すなわち東急緞帳へと至る。

本研究は、この仮説の下で、東急緞帳を彼の画家としての作品群が織りなすネットワーク上に位置づけることを目的とする。そのため、当館が保有する坂倉準三建築設計資料を参照しつつ、以下の4段階でこの仮説を検証することとした。

1)形成期から〈牡牛〉誕生までの過程における複数の種子を特定し、デッサンを通じた段階的道程と関連付ける。
2)とりわけ、〈女性〉イメージに着目し、これまで関連付けられることのなかった連作〈私は夢を見ていた〉と関連付ける。
3)彼のタピスリ制作の内に位置づける。
4)連作〈牡牛〉をその起源となる作品群と関連付け、東急緞帳を連作〈牡牛〉の展開が織りなすネットワークの内に位置づける。

本研究で参照した他の主な資料は以下のとおりである。まず、『ル・コルビュジエと彼のセーブル街35番地のアトリエ全作品集1952–1957』と *Le Corbusier lui-même*(邦訳『ル・コルビュジエ自ら語る生涯』)を参照した。いずれも彼自身による説明が記されており、「230㎡」という巨大なサイズが強調されている。

前者では、「綴織[tapisserie]」というタイトルで、《マリー・キュトリのためのタピスリ》(1935–36)、ピエール・ボドゥアンとの協働制作のタピスリ群とチャンディーガルの高等法院のために制作されたタピスリ群と合わせて東急緞帳が紹介されるほか、モデュロールが使用されたと記されている(ボジガー, 1997, p. 128)。

後者はジャン・プティがル・コルビュジエの回想をもとに死の直前に編纂した自叙伝にあたる。そこには、東急緞帳の原画制作の経緯がより詳しく説明されている(詳細後述)[3](Petite, 1970, p. 118(邦訳) p. 265)。

彼の油彩画作品と関連するデッサンについては以下を参照した。第1はナイマ・ジョルノとジャン＝ピエール・ジョルノが編纂した油彩画のカタログ・レゾネ(全2巻)である。同書は、彼の油彩画を網羅するだけでなく、関連する習作デッサンに加えて、連作〈牡牛〉の誕生について彼が記した草稿や手紙など複数の原資料を提供する。他のデッサンについては、ダニエル・ポーリーが編纂した以下の展覧会カタログ：*Le Corbusier Drawing as Process*[4]と水彩画を含むデッサン集成：*Le Corbusier catalogue raisonné des dessins TOME I* と *Le Corbusier catalogue des dessins 1917–1928 TOME II*[5]を参照した。タピスリについては、マルティーヌ・マティアスによる展覧会カタログ *Le Corbusier œuvre tissée* が彼のタピスリ制作に特化した貴重な情報を提供する[6]。

また、チャンディーガルの高等法院のタピスリ群については、*Modulor 2* でモデュロールを用いた制作方法が紹介されるほか(Le Corbusier, 1955, pp. 280–290)、『チャンディーガル　ル・コルビュジエ以後40年』に8つの小法廷(A～H)のために制作されたタピスリの原画とその完成写真を確認できる(Gordon et Kilian, 1991, 頁付なし)。また、その制作のために描かれた図面群がル・コルビュジエ財団(以下「FLC」と略記)保有の Le Corbusier Archives に収録されている。

加えて、ル・コルビュジエによる *Le poème de l'angle droit*[直角の詩]と *Entre-deux*[二つの間で]という2冊の詩画集を参照した。前者は、彼が60歳代に制作・刊行(1947–1953制作、1955刊行)した作品で、図像あるいはリトグラフと詩文によって、〈牡牛〉の誕生に関する情報を提供する(Le Corbusier, 1989)。後者は、彼が70歳代を迎えるにあたって構想された作品で、1928年に始まる画家ル・コルビュジエの活動を総括する作品である(Le Corbusier, 1964)。序文にあたるテキストプレートに加えて、ロードイド[7]による版画プレートとそのフォルダを兼ねたテキストプレートから構成され、断片的に連作〈牡牛〉に関する情報を提供する。

2. 〈牡牛〉の種子の形成

2.1. 形成期（–1917）

形成期の絵画制作について、前述のポーリーによるデッサン集成の第1巻を参照して以下のような彼の活動を確認した。

彼は、地元の工芸学校時代の教師レプラトゥニエによる指導の下、風景や動植物など自然に由来する多くの諸対象を描いた。そして、それらを幾何学的に再構成して、装飾デザインに展開させていた。工芸学校卒業後には、イタリア旅行（1907）から東方旅行（1911）にかけた旅を通じて、多くの建築や都市景観を描いた。その後、彼の絵画作品のテーマが、キュビスム風にデフォルメされた《二人の人物と海岸》（1912–1913, FLC 4086）のような人物画や《オイロペの略奪》（1912–1913, FLC 4494）などの神話画にまで広がっていった。

1917年に故郷のラ・ショー＝ド＝フォンからパリに居を移し、直後に官能的な裸婦が描いた水彩画《うずくまる女》（1917, FLC 4506）を制作した。また、パリで出会ったアメデ・オザンファンの勧めにより、静物画《花と本》（v. 1917, FLC 204）や宗教画《ピエタ－十字架からの降下》（1917, FLC 205）などの油彩画も描くようになった。

以上要約すると、形成期における彼の絵画作品のテーマは、自然に始まり、建築、神話、宗教、人物（裸婦）、静物が加わることで、当時の絵画ジャンル全体をほぼカヴァーすることが確認できた。

2.2. ピュリスム画家ジャンヌレ：種子−1の確立

パリに拠点を移した翌年、彼はオザンファンと共に『キュビスム以後』を出版し、ピュリスム（純粋主義）を提唱した。そこで彼らは科学のような普遍性を求めて絵画を機械と関連付けた。そして、絵画作品の制作を通じて絵画対象を楽器やグラスなどの機械による量産品に限定し、それらを〈オブジェ・ティプ（典型的対象）〉と名づけた。その結果、それまで容認された自然、人物（女性）、神話などに根ざした絵画対象が排除され、絵画ジャンルもほぼ静物画に限定されるに至った[8]。こうして確立したピュリスム期の静物画が〈牡牛〉誕生の種子の一つ：種子−1となった。

2.3. 画家ル・コルビュジエにおける種子の探求

2.3.1. デッサンを通じた自然：種子−2の探求

彼は、1925年あたりから石ころ、木の根、（牛の）骨、貝殻などをピレネー近郊や大西洋岸のピケなどで収集していた。それらは、機械を範とする〈オブジェ・ティプ〉に対立する自然に由来する対象である。前者が普遍的形状を有するのに対して、後者は形状の多様さを特性に持つからである。

そして、後者のデッサンを通じて、ピュリスム絵画からの脱却と後に〈詩的反応を伴うオブジェ〉と呼ばれることになる絵画対象：種子−2とそれらの油彩画への導入が準備された。

2.3.2. 〈詩的反応を伴うオブジェ〉：種子−2の確立と〈オブジェ・ティプ〉との共存

1920年代末に〈詩的反応を伴うオブジェ〉が油彩画に積極的に導入されるようになった。種子−2の確立である。並行して、ピュリスムで確立した〈オブジェ・ティプ〉の形状が歪み、〈詩的反応を伴うオブジェ〉と共存するようになった。

その変化は、絵画対象を〈オブジェ・ティプ〉に限定して普遍の形態を志向するピュリスム絵画からの逸脱につながった。これを受けて、彼は「ジャンヌレ」と署名してきた絵画作品に「ル・コルビュジエ」と署名するようになった。ピュリスム画家ジャンヌレの終焉かつ画家ル・コルビュジエの誕生である。

2.3.3. デフォルメを通じた〈女性〉イメージ：種子−3の探求と確立

彼の絵画作品における女性イメージの起源をたどるなら、ピュリスムの提唱以前に遡れる。その後、ピュリスムの確立と共に女性モチーフが絵画対象から排除された。それが彼がオザンファンと分かれた後に回帰する。1926年頃から1928年にかけてジョセフィーヌ・ベーカーを含むダンサーのデッサンが描かれた。そして、1929年には南米講演で出会ったベーカーの裸婦デッサンを描き、1930年に妻イヴォンヌと結婚してからは彼女の裸婦デッサンを描いた（Pauly (2022), pp. 299–321）。こうして反芻された裸婦デッサンが、デフォルメを通じて彼の油彩画の主要な絵画要素となった。種子−3の確立である（以下、こうして確立した女性のイメージを「〈女性〉イメージ」と表記）。以降〈女性〉イメージが油彩画の主要な絵画対象となった[9]。

3. 〈女性〉イメージの展開

3.1. 神話イメージ：種子−4との接続

次に海に浮かぶ島々のイメージと関連付けられる女性像を描いた作品群に着目したい。いずれも海中にうずくまる裸婦が描かれ、その上半身が海に浮かぶ島々に見立てられ、左上に太陽もしくはその代替としての

ゼウスが描かれて神話イメージ（種子−4）との接続を示唆している。

それらは、《海の上でうずくまる女性》（1945, FLC 189）に始まり、《眠る女性〈島々は、半分水に浸かった女性の体、船をその胸の内に受け入れる〉》（1945, FLC 410）においてタイトルにオデッセイの歌詞が埋め込まれ、明示的にオデッセイと関連付けられた。そして、ピエール・ボドゥアンとのタピスリ《オデッセイ》（1948）として結実した。その下部には上記の油彩画のタイトルに埋め込まれた歌詞が織り込まれている[10]。

3.2. 連作〈私は夢を見ていた〉との接続

関連して、海に浮かぶ島々の派生と考えられる連作〈私は夢を見ていた〉を取り上げたい。東急緞帳と密接に関連することになるからである。

ジャン・ルイ・コーエンは、同連作の出発点としてロンドンのバークレイホテルで1953年3月に描かれたデッサン（FLC 1331）を挙げている（Cohen, 2015, p. 127）。そこでは、バスタブの端が消去されて水面が広がっており、下部に「私の浴槽で＝諸島［archipel］の形成」という記載がある。ル・コルビュジエが浴槽の水面上にはみ出た自らの足を、海面に浮かぶ島々に見立てたこと、すなわち輪郭の変形を伴うことなく海に浮かぶ島々という自然景観へと転移させたことがわかる[11]。関連して、同様の図が1929年の南米講演においてリオの自然景観として描かれ、その後、微妙に姿を変えて1942年刊行の『人間の家』に掲載されたことに注意を喚起したい（Le Corbusier, 1942, p. 69）。自然景観：種子−5との接続を示唆するからである。

以上の事実は、過去に描かれたリオの自然景観が浴槽で回帰して、牡牛と島々＝女性を併置した油彩画《私は夢を見ていた（第1バージョン）》（1953年8月21日, FLC 160）として結実したことを示唆している。

付け加えるなら、コーエンは、〈私は夢を見ていた〉を主題とする習作スケッチ群について、マーガレット・ハリス＝ジェダーが知性と美貌を兼ね備えた理想の女性であり、ル・コルビュジエが「LC（牡牛）とマーガレットとの交わり」を夢想した反映であるという見方を示している（Cohen, 2015, pp. 128 & 148）。

二人が出会った当時、ル・コルビュジエはイヴォンヌ・ガリと結婚して間がなかった。対してマーガレットは離婚直後で、慰安のためにコルソーを訪れていた。彼女は彼の母の家（1925）を見つけて二人が出会った。実際に関係をもったかは問題ではない。ここで芽生えた二人の関係が、禁断の交わりを想起させることが重要である。なぜなら、牡牛と女性の交わりという神話イメージへと接続するトリガーになるからである。

すなわち連作〈私は夢を見ていた〉は、以下の神話イメージと関連づけられる。1）牡牛に化身したゼウスとオイロペの交わり、2）こうして誕生したミノス王の妻パーシパエと牡牛の交わり、3）その禁断の交わりがトリガーとなって、夢を介してハリスが招喚され、連作〈私は夢を見ていた〉で〈鳥＝女〉とル・コルビュジエの足が隣接・並置された。そして、その重要性を示唆するように『二つの間で』で反芻された。

以上をまとめると、連作〈私は夢を見ていた〉は、海に浮かぶ島々というイメージを媒介に、デッサンあるいは絵画作品を通じた以下のような連鎖の内に位置づけできるだろう。

1）海に浮かぶ島々⇒リオの景観（自然）⇒浴槽に浸かるル・コルビュジエの足（人物・男性）
2）海に浮かぶ島々⇒オデッセイにおける海に浸かる女性の体（人物・女性）
3）ル・コルビュジエとハリスの禁断の交わりの夢想
4）夢を介した〈鳥＝女〉の招喚⇒人物（男性）と人物（女性）の隣接・並置⇒連作〈私は夢を見ていた〉
5）『二つの間で』（1964）における反芻

3.3. 〈牡牛〉の種子の確立と諸イメージの展開

〈牡牛〉という果実に先行する複数の種子の確立と〈女性〉イメージの展開過程における他のイメージへの接続を要約すると以下のようになる。

1）ピュリスム以前には景観を含む自然の対象、女性、神話などが幅広く描かれていた。
2）ピュリスムで絵画対象が〈オブジェ・ティプ〉：種子−1に限定された。
3）その後、デッサンによる探求を通じて、〈詩的反応を伴うオブジェ〉：種子−2、追いかけるように〈女性〉イメージ：種子−3が確立し、画家ル・コルビュジエの誕生につながった。
4）ロンドンのホテルでの浴槽の経験が連作〈私は夢を見ていた〉制作の起点となり、神話イメージ：種子−4や自然景観：種子−5への遡行的接続を準備した。

4. ル・コルビュジエのタピスリ制作

ル・コルビュジエのタピスリ制作との出会いは、〈牡牛〉の誕生に先立つ。それは、タピスリ振興の活動家でモダニストのパトロンでもあったマリー・キュトリによる原画の提供依頼から始まった。最初のタピスリ《マ

リー・キュトリ》(1936, FLC 1) は1935年に依頼を受けて1936年に完成し、これに対応する女性と漁船を描いた油彩画《タピスリ《マリー・キュトリ》のためのカルトン》(1936, FLC 12) が描かれた。同タピスリの右上には「Le Corbusier / 36」と織り込まれ、同油彩画の左下にも「Le Corbusier / 36」と署名されており、両者が同一テーマを異なる形式で実現した作品であることを示している[12]。

その後、ピエール・ボドゥアンとの継続的な協働制作が始まった。二人の関係について、ル・コルビュジエは『全作品集第6巻』に次のように記している。「かつてオービュッソンの絵の先生だったピエール・ボドゥアン氏から、タピスリを過去の再現から引き離すために下絵 (カルトン) を描いてほしいと頼まれた。今日では、3つの織工場 (オービュッソンにあるタピスリの3つの工房) でこの振興案に従って仕事をしている」(ボジガー, 1977, p. 128)。『ル・コルビュジエ自身』によれば、1948年にピエール・ボドゥアンがル・コルビュジエにタピスリの製作原画を描くように依頼した (Petite, 1970, p. 100 (邦訳) p. 221)。これを裏付けるように1948年制作の《オデッセイ》が存在する。その後、これとは別にル・コルビュジエはチャンディーガルの高等法院のために9点のタピスリを制作した。内1点 (144㎡：12m×12m) は大法廷のために、残り8点 (54㎡：7m×7.85m) は小法廷のために制作された。東急緞帳は以上のタピスリの延長上に位置づけられる[13]。

5. 〈牡牛〉誕生への道程

5.1. 〈オブジェ・ティプ〉を描いた静物画の変異

5.1.1. 《ヴァイオリンとヴァイオリンケース (赤)》

《牡牛Ⅰ》の直前に《ヴァイオリンの変異》(1952, FLC 432) が制作された。ジョルノ等によるとその写真の裏面に《ヴァイオリンとヴァイオリンケース (赤)》のクロッキーが描かれており、《ヴァイオリンの変異》(1952, FLC 432) が《ヴァイオリンとヴァイオリンケース (赤)》(1920, FLC 303) と《積み上げられた皿のある静物あるいは〈月光〉》(1920, FLC 305) を90度回転させたデッサンの抽象的総合であり、それらが〈牡牛〉へ変異する過渡的作品であると説明されている[14]。

5.1.2. 「得も言われぬ空間」における記載

〈牡牛〉の誕生について記した「得も言われぬ空間」(1954) の草稿 (N. Jornod et al., 2005-2, p. 873) には《牡牛Ⅳ》誕生にいたる4つの絵画作品を示すクロッキーが描かれている。本研究では、図柄とその下の記載からそれらに対応する4つの油彩画を以下のように同定した。1)《アルカションの漁船、グラスと瓶》(1930, FLC 95) の下半分、2)《バルセロナの陥落》(1939, FLC 380)、3) 90度回転した《大きな溝付グラスと赤いスカーフ》(1940, FLC 226)、4)《牡牛Ⅳ》(1953, FLC 437)。

5.1.3. 《大きな溝付グラスと赤いスカーフ》への系譜における複合イメージの誕生

ル・コルビュジエは、《大きな溝付グラスと赤いスカーフ》(1940, FLC 226) の写真とそれを見て描いたクロッキーを示しつつ、90度回転した《大きな溝付グラスと赤いスカーフ》の写真をインド上空の飛行機で見て、〈牡牛〉へと変異する過程のスケッチを描いたと記し、次ページに《牡牛Ⅳ》(1953, FLC 437) を掲載した (Le Corbusier, 1960, pp. 232–233)。

そこで、彼の油彩画作品を遡って《大きな溝付グラスと赤いスカーフ》とほぼ同一の構図を持つ複数の絵画作品を調査した。その結果、以下のような油彩画の系譜を確認できた。1)《紫のサイコロとローズの瓶》(1926, FLC 330) を出発点とし、2)《テーブルクロスの上のグラスと瓶》(1929, FLC 213)：左から2本目の瓶のペンギン化 (〈瓶＝ペンギン〉の誕生)、3)《アルカションの漁船、グラスと瓶》(1930, FLC 95)[15] を経て、4)《大きな溝付グラスと赤いスカーフ》(1940, FLC 226)：前作品の下半分を反芻 (図4参照)。

ここで注目したいのは、上記の過程で誕生した〈瓶＝ペンギン〉や〈グラス＝仮面〉である。〈牡牛〉の誕生の下になった絵画の系譜の内に、〈オブジェ・ティプ〉からの変異が内包されるからである。その重要性を反芻するように、それらが最晩年に制作された『二つの間で』において、《テーブルクロス上のグラスと瓶》が版画プレートとして反芻されるだけでなく、溝付きのグラスが仮面に、瓶がペンギンへと変異したことを示唆するテキスト (詩文) が添えられるにいたった。「溝付のグラスは英雄の仮面 / 《女性－水差－瓶》の / 一団となった3匹のペンギンが / 見つめる、卵をうみながら」(Le Corbusier, 1964, pl. 5 text pl. verso)。

5.2. 〈詩的反応を伴うオブジェ〉(種子−2) の構成

ジョルノ等は、1940年にピレネー近くの保養地オゾンで描かれたデッサン《諸対象の構成：小石、牡牛、牧人など》を挙げ、連作〈牡牛〉の出発点 (種子−2) であると記している (N. Jornod et al., 2005-1, p. 307)。その根拠とされたのが「牡牛の展開を示すデッサンを伴う手稿」(年代未詳, 個人蔵) (N. Jornod et al., 2005-1, p. 306, ill. 238)

である。そこでは、左端の「小石、根、牛、ジャルド60」と記されたスケッチから、順に「牡牛Ⅰ」、「牡牛Ⅳ」、「牡牛Ⅹ」と記されたスケッチ群が並び、〈牡牛〉誕生の経緯を図示している[16]。

〈牡牛〉の誕生について、もう一つの事例が『直角の詩』に記されている。彼は、そのC. 1肉体の項で次のように記している。

「一つの幻影の構成要素が集められる。
鍵となるのは枯れた切り株と小石
二つとも拾われた　ピレネーの谷間の道で。（中略）
何度も描いたり　描きなおしたりしているうちに
小石と根っこからなる　牛が
牡牛になった」
（下線筆者、Le Corbusier, 1989, p. 75（邦訳）頁付なし）

C. 1肉体の項に添えられたリトグラフがその具体的事例を示唆している。また油彩画《牡牛Ⅺ》（1955–1956, FLC 165）の右半分にこの種の〈牡牛〉が描かれている。しかし、『直角の詩』制作以前に遡って連作〈牡牛〉の中にこの種の油彩画を特定できなかった[17]。

6. 連作〈牡牛〉の展開

6.1. 連作〈牡牛〉の分類

〈牡牛〉の連作は油彩画だけで21作品に達し（N. Jornod et al., 2005-2, p. 874）、《牡牛XIV》とされる東急緞帳と《牡牛XIV bis》とされる[18]タピスリ《奇妙な鳥と牡牛》を含めて以下の23作品にのぼる（表1）。

1）《牡牛XIV》を除く《牡牛Ⅰ》から《牡牛XVIII》。
2）4つの《牡牛Ⅰ》：同タイトルの《牡牛Ⅰ》が二つ、加えて《牡牛Ⅰ bis》と《牡牛1 ter》が存在。
3）未完の《牡牛》（v. 1964, FLC 448）。
4）二つの《牡牛XIV》：東急緞帳と《牡牛XIV bis》：タピスリ《奇妙な鳥と牡牛》。

また、ル・コルビュジエは《牡牛VIII》から《牡牛XIII》が〈牡牛〉の開花にあたると記している[19]。

したがって、《牡牛XIV》にあたる東急緞帳を理解するには連作〈牡牛〉の開花と関連づける必要がある。

6.2. 〈牡牛〉の開花への準備段階

6.2.1. 「開花」に先立つ作品群

まず、「開花」に先立つ《牡牛Ⅰ》から《牡牛VII》を分析する。それらの制作年代を見ると、以下のようになる。1）《牡牛Ⅰ》から《牡牛Ⅰter》までの4作品が1952年、2）《牡牛Ⅱ》から《牡牛Ⅳ》までの3作品が1953年、3）《牡牛Ⅴ》から《牡牛VII》の3作品は開花期の《牡牛VIII》が制作された1954年に重なっている。そこで、本稿では上記の3つのサブグループに分けて検討する。

6.2.2. 《牡牛Ⅰ》の4作品

《牡牛Ⅰ》と《牡牛Ⅰ（2）》は横長、《牡牛Ⅰ bis》と《牡牛Ⅰ ter》は縦長の構図をとる。しかし、後者の下半分を除けば、同一の構成要素の組み合わせである。その共通属性は以下のとおりである。1）上部に牡牛の角を連想させる弓型（牡牛のしるし）と耳を想起させる紡錘形、2）その下に牡牛の頭部を想起させる形、3）眼には眼球が描かれない、4）中央付近の水平線を挟んで下部に牡牛の鼻を想起させる二つの（渦状の）円。

6.2.3. 《牡牛Ⅱ》から《牡牛Ⅳ》

《牡牛Ⅱ》から《牡牛Ⅳ》は、いずれもやや縦長で《牡牛Ⅰ bis》と《牡牛Ⅰ ter》と同様の構図をとる。ただし、《牡牛Ⅱ》以降では眼球が描かれており、人物の顔により近づいているという印象を与える。

《牡牛Ⅱ》で初めて牡牛の尻尾が明示的に描かれた。また、右下に「28–53」、背面に「牡牛2。1928–53。Le Corbusier 牡牛Ⅱ」と記されており（N. Jornod et al., 2005-2, p. 884）、同作品が1928年の画家ル・コルビュジエの誕生にまで遡ることが示唆されている。

また、《牡牛Ⅲ》では「Atlas」という副題がつけられるだけでなく、「チャンディーガル」と記されてインドとの関連が示唆されている。そして、前述したように《牡牛Ⅳ》は《大きな溝付グラスと赤いスカーフ》を90度回転した写真を見て描いたクロッキーと関連付けられる（Le Corbusier, 1960, p. 232）ことから、〈牡牛〉誕生の一翼を担う作品であることがわかる。

6.2.4. 《牡牛Ⅴ》から《牡牛VII》

これらの作品も《牡牛Ⅰ bis》から《牡牛Ⅳ》までの作品と同様に縦長の構図をとる。ただし、よく観察してみると以下の特徴がみられる。1）《牡牛Ⅴ》以降で、牡牛の頭部の脇に女性の髪の毛が描かれる。2）徐々に〈牡牛〉の頭部がほぼ正面視に近づき、描かれた眼がより写実的になり、《牡牛VII》ではほぼ人間の女性の顔のように変化している。3）《牡牛VI》と《牡牛VII》では、中段右側に人間の手のひらが加わり、人物（女性）像のようにも見える。

要約するなら、《牡牛Ⅴ》から《牡牛VII》は〈牡牛〉が〈女性〉へと徐々に変異する過程を示す作品群と位置付けられる。

6.3. 〈牡牛〉の開花：《牡牛Ⅷ》から《牡牛ⅩⅢ》

1954年から1955年にかけて制作された《牡牛Ⅷ》から《牡牛Ⅹ》は縦長の構図をとる。《牡牛Ⅷ》では女性の頭が牡牛の頭に重ね合わされた[20]。また、中央下に左右に組み合わされた手が描かれ、続く《牡牛Ⅸ》と《牡牛Ⅹ》では上下の組み合わせに変化している。

以上から、これらの3作品ではほぼ同一のシルエットのうちに牡牛と女性が併置されていることが確認できた。この段階で1953年までに探求された〈牡牛〉から〈女性〉への変異を伴う両者の共存が完成したと考えてよいだろう。こうした重ね合わせによる〈牡牛〉と〈女性〉との共存は、『直角の詩』(1947–1953)のC.4肉体の詩画テキストに描かれた図像とも重なる。そこでは、女性のシルエットに牡牛の頭、角、尻尾が、あるいは牡牛のシルエットに女性の頭や手が重ね合わされていた。そして同一の画像が版画集『ユニテ』(1953)の#1でも反芻され[21]、同様の構図で《牡牛ⅩⅢ》が制作された。

残りの《牡牛Ⅺ》と《牡牛ⅩⅡ》はいずれも画面が左右に二等分され、以下のような二種の〈牡牛〉が隣接・並置されている。《牡牛ⅩⅡ》の右側の図像は、《牡牛Ⅷ》から《牡牛Ⅹ》までに確立した〈牡牛〉と〈女性〉の重ね合わせによる共存を90度回転したものである。《牡牛Ⅺ》の右側と《牡牛ⅩⅡ》の左側に描かれた図像は『直角の詩』で説明された〈詩的反応を伴うオブジェ〉の構成にもとづいている。《牡牛Ⅺ》の左側に描かれた二つの幾何学図形は先行する《頭と両手》(FLC 80, 1955)に由来する(N. Jornod et al., 2005-2, p. 916)。

次に重要なのは、《牡牛Ⅹ》に「オイロペの略奪」、《牡牛ⅩⅢ》に「ミノタウロスの誕生」と記されて連作〈牡牛〉と神話の接続が明示されることである。

補足するなら、《牡牛Ⅺ》は、左右反転した構図でタピスリ《奇妙な鳥と牡牛》として反芻されることから、

表1　連作〈牡牛〉および関連作品全リスト

	作品番号	タイトル	制作年	形式	FLC番号	サイズ(cm)	署名	記載内容(署名を除く)	構図(コンポジション)	所蔵	備考
〈牡牛〉の先がけ	—	《ヴァイオリンの変異》	1952	油彩画	432	160×130	Le Corbusier	右下に「20-52」	上部に捩れた2本のロープ、中央に牡牛の胴体、下部に対の丸(鼻)	パリ、国立現代美術館	同油彩画の写真の背面に《ヴァイオリンとヴァイオリンケース》のクロッキー
〈牡牛〉誕生とその派生	Ⅰ	《牡牛Ⅰ》	1952	油彩画	158	83×160	Le Corbusier	左側中央に「52」、右端近くに「13時半に始めて15時半に完了」	横長、上下にほぼ二等分、中央に水平線、上部に頭と角、下部に対の渦巻き	FLC	スケッチブックK43で反芻後に「《ヴァイオリンのある赤い静物》の変形」と記載
		《牡牛Ⅰ(2)》	1952	油彩画	449	82.5×160	—	—	同上	個人蔵	
		《牡牛Ⅰbis》	1952	油彩画	429	168×97	Le Corbusier	左側下部に「52」	縦長、上部に角と頭、水平線を挟んで、中央に対の丸(鼻)と胴体、下部に対の渦巻き	個人蔵	
		《牡牛Ⅰter》	1952	油彩画	430	161×87	Le Corbusier	右下に「52年4月26-7日」背面に「アンドレとマルタ・ヴォジャンスキのために、友情、1952年5月25日」	同上	個人蔵	
	ⅡからⅣ	《牡牛Ⅱ》	1953	油彩画	159	162×114	Le Corbusier	右下に「28-53」、背面に「牡牛2. 1928-53. Le Corbusier 牡牛Ⅱ」、署名の下に四角で囲んだ数字の7	やや縦長の画面。上部で横断する水平線の不在。中央下部に水平線。他は同上	FLC	
		《牡牛Ⅲ アトラス. チャンディーガル》	1953	油彩画	436	162×114	Le Corbusier	左側の下部に「53」背面に「アトラス チャンディーガル LC 1953」	やや縦長の画面を上部の水平線で分割。他は同上	ロンドン, テートギャラリ	インドとの関連を示唆
		《牡牛Ⅳ-アンデルノ》	1953	油彩画	437	162×130	Le Corbusier	左側上部に「53」	やや縦長の画面を水平線で上下に二分割、上部に上下に二つの顔を併置、水平線を挟んで、中央に対の丸(鼻)と胴体、下部に左右で組み合された手	個人(大阪銀行)	著書に《大きな溝付グラスと赤いスカーフ》1940の写真を90度回転して誕生と記載(Le Corbusier, 1960, p. 232)
(参考)		《私は夢を見ていた(第1バージョン)》	1953	油彩画	160	130×162	Le Corbusier	左下に「53年10月21日」背面に「私は夢を見ていた 53年10月21日」	横長画面を左右に二等分。左に浴槽に浸かるLCの足、右に〈鳥=女〉	FLC	デッサンで探求された《私は夢を見ていた》の油彩画『二つの間で』(1964) Pl. 10で反芻
〈牡牛〉の展開、〈女性〉との共存の探求	ⅤからⅦ	《牡牛Ⅴ》	1954	油彩画	161	195×97	Le Corbusier	左下に「54」、背面に「牡牛Ⅴ. 54年3月 Le Corbusier」	縦長の画面に水平線。下部に対の渦巻き	FLC	牡牛の頭部右に女性の髪の毛
		《牡牛Ⅵ》	1954	油彩画	176	195×97	Le Corbusier	右下に「54」背面に「牡牛Ⅵ-Le Corbusier 54」	縦長の画面、下部の対の渦巻きの右上に開かれた手	FLC	牡牛の頭部左わきに女性の髪の毛、中央右に手の挿入
		《牡牛Ⅶ》	1954	油彩画	439	195×97	Le Corbusier	左下に「パケ〔Paquets〕54」	縦長の画面に水平線。他は同上	個人蔵	同上

	作品番号	タイトル	制作年	形式	FLC番号	サイズ（cm）	署名	記載内容（署名を除く）	構図（コンポジション）	所蔵	備考
〈牡牛〉の開花、〈牡牛（男性）〉と〈女性〉の共存の確立	Ⅷから Ⅹ	《牡牛Ⅷ》	1954	油彩画	162	195×97	Le Corbusier	左下に「54年4月25日」背面に「牡牛 Ⅷ 54 Le Corbusier」	上部に二つの顔を上下に並置、水平線を挟んで、中央に対の丸（鼻）と胴体、下部に左右で組み合された手	FLC	上部の二つの頭は、ル・コルビュジエ（男性）とイヴォンヌ（女性）に対応
		《牡牛Ⅸ》	1954-1955	油彩画	163	195×97	Le Corbusier	背面に「牡牛Ⅸ 54年10月7日。55年1月 Le Corbusier」	縦長画面を上下に二等分、上部に水平線。その下に頭と鼻、下部に上下で組み合わされた手	FLC	上下に組み合わされた手
		《牡牛Ⅹ》	1955	油彩画	164	195×97	Le Corbusier	右下に「オイロペの略奪」背面に「牡牛 Ⅹ. 55. Le Corbusier」	同上	FLC	同上 《オイロペの略奪》(1912-1913)の反芻
	（参考）	《頭と手》	1955	油彩画	80	38×46	Le Corbusier	右下に「55」背面に「C.F. リトグラフ」	やや横長の画面を左右に二等分、左上に白い幾何学的頭、右下に反転した頭、左下と右上に開かれた手	FLC	直前の《手を合わせた女性と男の頭》〈55年1月，FLC 270）の展開 直後の《牡牛Ⅺ》の左半分で反復
	Ⅺから ⅩⅢ	《牡牛Ⅺ》	1955-1956	油彩画	165	130×162	Le Corbusier	右下に「55年クリスマス」「56年N（新年）牡牛Ⅺ」背面に「牡牛Ⅺ. 55年クリスマス –56年 新年. Le Corbusier」	やや横長の画面。上部に水平線、その下で画面を左右に二等分、左に2種の幾何学的頭を水平に併置、右に《詩的反応を伴うオブジェ》の構成	FLC	右は『直角の詩』に記載された〈詩的反応を伴うオブジェ〉の構成の体現 左右反転して、タピスリ《奇妙な鳥と牡牛》として反芻"
		《牡牛ⅩⅡ》	1956	油彩画	252	130×162	Le Corbusier	左側下に「牡牛12　56年2月」	やや横長の画面を左右に二等分、左に《詩的反応を伴うオブジェ》の構成と二つの開かれた手、右に90度回転した牡牛の頭と鼻	個人蔵	
		《牡牛ⅩⅢ》	1956	油彩画	167	130×162	Le Corbusier	右下に「牡牛ⅩⅢ Pentecôte 56」、その下に「ミノタウロスの誕生」背面に「牡牛ⅩⅢ. 56年5月. Le Corbusier」	上部に水平線、その下部で手を組む人物の頭？と胴体、手の下に小さな牡牛？の頭	FLC	神話「ミノタウロスの誕生」と接続
二つの緞帳案	ⅩⅣ	《東急緞帳》案《牡牛ⅩⅣ》相当	1956	デッサン	未詳	98×238	Le Corbusier	右下に「9.50×22.80のタピスリー＋隠れる部分＝9.80×23.80 “牡牛 ⅩⅣ” 東京のため. 劇場の緞帳 坂倉によるコンタクト」「ル・コルビュジエ カップマルタン 1956年8月20日」	著しく横長、左から《牡牛Ⅺ》の左半分、巻貝を想起させる幾何学図形、《牡牛Ⅹ》の上半分、上下に組わされた手	国立近現代建築資料館	ピュリスムの静物画に由来する《牡牛Ⅺ》と〈詩的感動を伴うオブジェ〉に由来する《牡牛Ⅹ》の総合
	ⅩⅣ bis	《私は夢見ていた》（劇場の緞帳計画案）	1956	デッサン（トレーシングペーパーに鉛筆）	0004	19.4×50.5	Le Corbusier	右下に「L-C 26/8/56 緞帳 OSaka (Saka)」	著しく横長、《私は夢を見ていた（第1バージョン）》に同じ	未詳	坂倉設計の《南海会館》1957の劇場の緞帳と推定
		《牡牛14bis》：《奇妙な鳥と牡牛》	1957	タピスリ	未詳	218×360	Le Corbusier	右下に「57]	横長画面を左右に二等分、左：水平線をまたいで牡牛と鳥の頭、右脇に〈小石（横顔）〉と上下に組み合わされた手、右：幾何学的頭	大成建設	連作《私は夢を見ていた》の展開 《牡牛Ⅺ》を左右反転しタピスリとして反芻
緞帳以降の連作〈牡牛〉の展開	ⅩⅤから ⅩⅧ	《牡牛ⅩⅤ》	1957	油彩画	243	162×130	Le Corbusier	左下に「56年1月28日」「牡牛ⅩⅤ」	やや縦長の画面を中央付近の水平線で上下に二分割。頂点を共有した二つのピラミッド、上部に奇妙な人物、下部に牡牛	個人蔵	『二つの間で』（1964）Pl. 13で反芻 写真の裏に「牡牛ⅩⅣというタイトルは東京の劇場の緞帳、ⅩⅣ bis はオービュッソンのタピストリ《奇妙な鳥と牡牛》に割り当て」と記載
		《牡牛ⅩⅥ》	1958	油彩画	168	162×130	Le Corbusier	中央下に「52年7月14日 牡牛ⅩⅥ」背面に「Le Corbusier. 牡牛ⅩⅥ 1958」	《牡牛Ⅶ》の反芻、右下に鳥	FLC	右下に鳥の図
		《牡牛ⅩⅦ》	1958	油彩画	440	162×130	Le Corbusier	やや縦長の画面を水平線で上下に二等分。右下に巻貝. その中に「牡牛ⅩⅦ 58年9月17日」	やや縦長の画面を上下に二等分、上部に上下反転した牡牛の頭、水平線を挟んで左下に牡牛の足、右下に巻貝	個人蔵	巻貝
		《牡牛ⅩⅧ》	1959	油彩画	441	162×130	Le Corbusier	右下に「59年9月 牡牛ⅩⅧ」その上に座った牡牛のシェマ	《牡牛ⅩⅤ》の反芻	大成建設	《牡牛ⅩⅤ》の反芻
	最終作品	《牡牛》	v. 1964	油彩画（未完）	448	53×30	—	—	縦長、《牡牛Ⅳ》に類似	FLC	未完

油彩画とタピスリをつなぐ作品でもある。

要約するなら、ル・コルビュジエにとって「牡牛の開花」とされる作品群は二つの形式（重ね合わせと隣接・並置）に基づいた〈男性〉イメージと〈女性イメージ〉の共存の確立と神話やタピスリとの接続を示している。

6.4. 「牡牛の開花」後の展開

「牡牛の開花」後に東急緞帳を挟んで油彩画《牡牛XV》（1957, FLC 243）から《牡牛XVIII》（1958, FLC 441）と未完の《牡牛》（v. 1964, FLC 448）が制作された。

ここでは、東急緞帳制作直後に制作された油彩画《牡牛XV》に着目したい。最晩年に制作された『二つの間で』（1964）でほぼ同一の作品がロードイドで反芻され、以下のように記されているからである。「ここではアジアの目覚めが表現されている。異なった土地からきたもの、脈略のない要素（後略）」（Le Corbusier, 1964, pl. XII text pl.）。ル・コルビュジエはインドの州都チャンディーガル建設のため、1951年から1963年にかけて計23回インドを訪問している。したがって「アジアの目覚め」とは、インドとの接触を通じた彼自身による「目覚め」を示していると考えられる。

以上を踏まえて「牡牛の開花」を遡及して捉えるなら、連作〈牡牛〉の制作過程で探求された〈男性〉イメージと〈女性〉イメージの共存は、ヨーロッパとアジアという二つの文化との共存と読み替えることもできるだろう。それは、自己という主体を中心に他者である自然を同化するヨーロッパ的世界観から自然と共存するアジア的世界観への転換を示唆している。だとするなら、《牡牛XV》の直前に日本（アジア）の劇場のために構想された東急緞帳も、「アジアの目覚め」を含意する作品であるといえるだろう。

7. 東急緞帳について

7.1. 東急緞帳の原画と製作

ル・コルビュジエにより《牡牛XIV》と記された東急緞帳の原画について、彼は以下のように記している。「8月20日（金銀細工師のように）デッサンから紙を切り抜き、貼り付けて、嵩上げして［rehaussés］、彩色された原画［maquette］の制作を終了した。8月21日朝、説明文を書き上げ、東京への輸送の手はずを整えた……」（Petite, 1970, p. 118（邦訳）p. 265）。

ここから東急緞帳の原画最終案は、坂倉にせかされて制作されたことがわかる。東急緞帳もまた、当時の川島織物合資会社において急ピッチで製作され、東急文化会館への設置に先立って、1956年11月に京都市立美術館（現：京都市京セラ美術館）で披露された。巨大な緞帳が3か月足らずで製作されたことになる。

7.2. 東急緞帳のサイズと現況確認

ル・コルビュジエによる東急緞帳のための原画の右下には以下のように記されている。「9.50×22.80のタピスリ＋隠れる部分＝9.80×23.80」（Mathias, 1987, p. 81）。ここから東急緞帳の可視部分が9.5×22.8mであり、両側に各50cm、上部に30cmの「隠れる部分」を含めて9.8×23.8mで製作するよう指示されていたことがわかる。しかし、当館が保有する資料概要によると東急緞帳のサイズは「9.8m×22.6m」と記されており、高さは一致するものの幅に20cmの差がある（表2）。

そこで、川島織物セルコンで行われた見学会を機会に緞帳の計測を行った。大きすぎて総長は計測できなかったので、黒の枠線を基準として左上角を計測した（図2）。その結果、黒枠から10cmの余白を含んで可視部分とすると、「隠れる部分」が左端で0.5m、上端で0.3mとなることがわかった。すなわち、隠れる部分についてル・コルビュジエの指示通りに製作されていることが確認できた[22]。

表2　東急緞帳のサイズ

	可視部分のサイズ（m）	隠れる部分込のサイズ（m）
A：ル・コルビュジエの製作用原画	9.5×22.8	9.8×23.8
B：資料概要（当館）のサイズ	データなし	9.8×23.6
B—A：高さ	0	
B—A：幅	0.2	

左端マージン：約60cm=0.6m

上端マージン：約40cm=0.4m

1）緞帳の黒枠を基準に左上角でマージンを計測（2021年10月21日）
左：0.6m、上：0.4m。その差＝0.2m
2）Le Corbusierによる隠れる部分の指示
左右：0.5m（23.8-22.8）/2、上：0.3m（9.8-9.5）。その差＝0.2m
→1）と2）の値が一致
→黒枠の左右と上に可視部分0.1mをプラスして
隠れる部分（左右：0.5m、上：0.3m）で製作されたと考えられる
→「隠れる部分」の考え方はLe Corbusierの指示と一致
→計測とLe Corbusierの指示における左右総長の違いは計測誤差、
あるいは伸びきっていない状態で計測した可能性

図2　東急緞帳の左上角の計測（2021年10月21日）

7.3. 東急緞帳の構成

東急緞帳に先行して、ル・コルビュジエはスイス学生会館の談話室に『直角の詩』の4つのリトグラフに対応する作品を隣接・併置した壁画を制作していた[23]。この先行例を念頭に見直すと、東急緞帳も複数の作品が隣接・併置されている可能性がある。そして、その可能性を示唆するテキストを彼のスケッチブックK43（Fondation Le Corbusier, 1982）に発見した。

その表紙には「インド / 1956–3/2 5月」と記されており、その制作年代が東急緞帳の最終案の構想時（1956年8月20日）直前にあたることがわかる。K43は「牡牛の誕生52年8月10日」と記された1952年に遡る《牡牛Ⅰ》の誕生を回想するデッサンの反芻からはじまる（ibid. 652）。続いて、56年5月6日から7日にかけて、組まれた手のスケッチが描かれている（ibid. 656–662）[24]。そして、リヨンで開かれる展覧会（1956年6月23日–11月10日）の展示作品リストや展示計画のスケッチ（1956年5月15日付）（ibid. 665–666）とチャンディーガルの議事堂に関するデザインスケッチ（ibid. 671–683）を挟んで以下のテキストがある。

> 「空間の概念 / 海ホライゾン /“1922 T80” / 砂 / “暖炉” アクロポリス1918 / 月のある構成1928 T80 海の光景 / 大弓［Arbalète］Ⅰ 1954 (?) / 牡牛Ⅺ＋Ⅻ (?) 海 / 水平＋垂直による空間 / ヴォリューム / 空からのパースペクティブ（パースペクティブのない）/（後略）」（ibid. 684、下線筆者）[25]。

ここでは（海の）水平線、アクロポリスや月を挙げて、彼の画家としてのキャリアが総括されている。対応する油彩画作品は、順に《垂直の静物Ⅰ》（1922, FLC 317）、《暖炉》（1918, FLC134）、《月のある静物》（1929, FLC146）、《大弓 ロンドン1》（1953, FLC434）と考えられる。末尾の作品は、《3人の音楽家》（1936, FLC11）と《音楽家たち》（1937, FLC 367）のロンドンにおける反芻であり、ロンドンでのデッサンに遡る連作〈私は夢を見ていた〉と関連付けられる。そして、その油彩画の制作を挟んで、東急緞帳の構想時に同作品がもう一つの緞帳案として構想されるにいたった（詳細は後述）。

以上から直後の記載「牡牛Ⅺ＋Ⅻ？」も東急緞帳に関する記述である可能性がある。そこで、東急緞帳が《牡牛Ⅺ》と《牡牛Ⅻ》の隣接・並置であると仮定して、比較・検証を試みた。その結果、東急緞帳の左半分が〈牡牛Ⅺ〉とほぼ同一であるものの、右半分は《牡牛Ⅻ》とは著しく異なっており、東急緞帳と一致しないことが確認された。

しかし、「牡牛Ⅻ」を「牡牛Ⅹ」と読み替えると東急緞帳の構成に非常に近い構成になることがわかった[26]。そこで、東急緞帳の構成を《牡牛Ⅹ》+《牡牛Ⅺ》と捉え直して、比較・分析を行った。

分析に当たっては、便宜上、東急緞帳、《牡牛Ⅹ》と《牡牛Ⅺ》を以下のように分割した。

1）東急緞帳を左右に4分割し、左から順に左1、左2、右1、右2とする。
2）《牡牛Ⅹ》を上下に分割して、それぞれ《牡牛Ⅹ》上と《牡牛》下とする。
3）《牡牛Ⅺ》を左右に分割して、それぞれ《牡牛Ⅺ》左、《牡牛Ⅺ》右とする。

分析結果をまとめると以下のようになる（図3）。まず東急緞帳の左1が《牡牛Ⅺ》の左、右1が《牡牛Ⅹ》上とほぼ同一図像の反芻であることが確認できた。次に右2と《牡牛Ⅹ》下を比較すると、東急緞帳の右2で《牡牛Ⅹ》下の上下に組み合された手というモチーフが位置を変えて反芻されていることがわかった。

残りの左2のイメージは《牡牛Ⅺ》には見られない。しかし、以下の理由から東急緞帳の左2に描かれたイメージが巻貝に置きかえられたと推定される。1）『直角の詩』A. 3環境のテキスト30ページに添えられた図に近い。それが何であるかは具体的に記されないものの、章のタイトルである環境すなわち自然に由来する[27]。2）《牡牛Ⅺ》右に描かれた図像が〈詩的反応を伴うオブジェ〉の構成に基づく第2のタイプの〈牡牛〉である。3）《牡牛ⅩⅦ》（1958, FLC 440）では右下に署名を内包する巻貝が描かれ、連作〈牡牛〉と巻貝の関連が示唆されている。

東急緞帳が《牡牛Ⅹ》と《牡牛Ⅺ》の総合であるとすると、それは以下のような彼の画家としてのイメージ探求を内包する。1）《牡牛Ⅹ》を介して、1-a）ピュリスム時代の静物画に由来する〈牡牛〉の誕生。1-b）連作《牡牛》の展開過程における〈女性〉イメージとの共存。1-c）上下に組あわされた手が象徴する二つの融合。2）《牡牛Ⅺ》を介して、2-a）二つの頭による〈男性〉イメージと〈女性イメージ〉の並置、2-b）巻貝による〈詩的反応を伴うオブジェ〉。

要約するなら、東急緞帳はそれまでの彼が探求したイメージの並置によって彼の画家としてのキャリアを総合する作品であるといえるだろう。

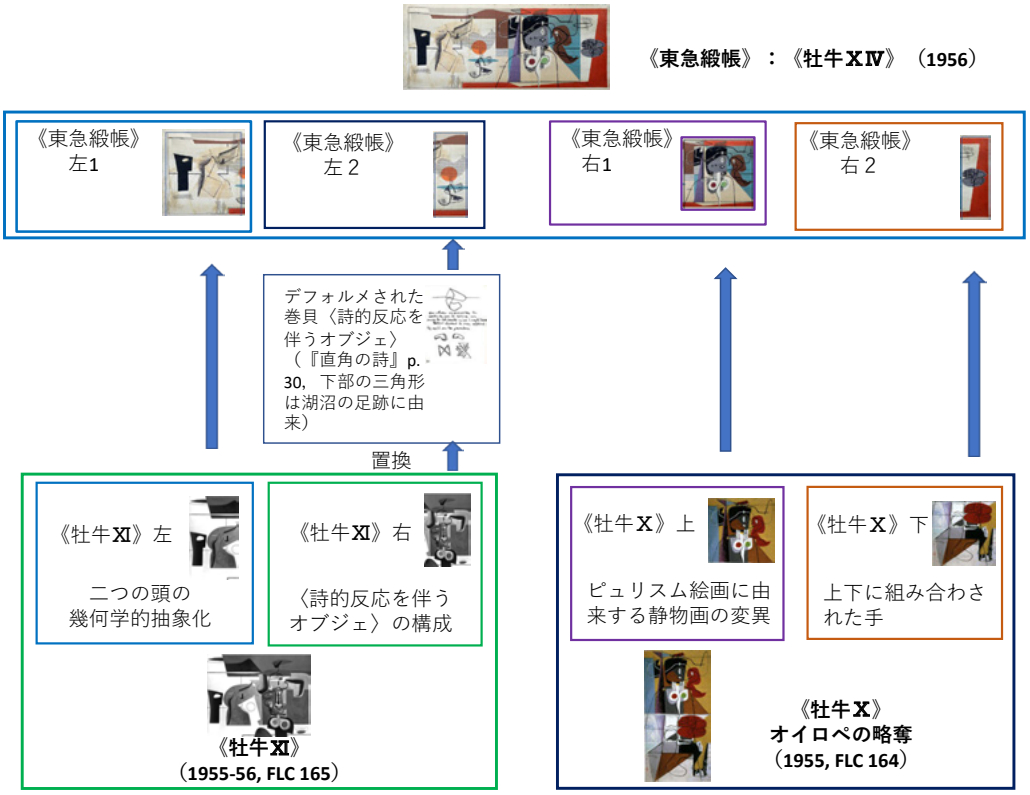


図3　東急緞帳の構成：《牡牛XI》＋《牡牛X》（図解）

8. 神話イメージとの接続

8.1. 東急緞帳と連作〈私は夢を見ていた〉との接続

本研究の過程で、もう一つの緞帳案の存在を示す習作：《劇場の緞帳のためのプロジェクト》（1956, FLC 0004）を発見した（Cohen, 2015, p. 131）。それは連作〈私は夢を見ていた〉の反芻である。その右下には以下のように記されている「緞帳大阪（サカ）［rideau OSaka (Saka)］/56年8月26日」。この記載は、このプロジェクトが坂倉による大阪の劇場の緞帳［rideau］のために構想されたことを示唆している。

残念ながら、どの劇場のために考案されたかを示す具体的な資料は発見できなかった。しかし、当館が保有する坂倉準三建築設計資料を調べると、《南海会館》の一連の図面群（実施設計図）が存在し、それ以外に1956年に大阪で劇場を内包する建築は設計されていないことがわかった。したがって、同緞帳プロジェクトは《南海会館》（竣工1957年）の劇場の緞帳のために構想されたと考えられる。

以上から、「〈牡牛〉の開花」直後にあたる1956年、坂倉設計の劇場のために二つの緞帳案が構想されたことが明らかになった。一つが東急文化会館の劇場の緞帳（《牡牛XIV》）であり、もう一つが同じく南海会館の劇場のための緞帳（計画案）である。前者は先行する連作〈牡牛〉の2作品の隣接・並置として連作〈牡牛〉の延長上に実現したのに対して、後者は連作〈私は夢を見ていた〉の延長上に構想されるものの実現することはなかった。

その後、未完に終わった緞帳案に代わって《牡牛XI》を左右反転した構図を持つタピスリ《奇妙な鳥と牡牛》が実現し、《牡牛XV》の写真の裏面に「（牡牛）XIV bis は（中略）タピスリ《奇妙な鳥と牡牛》」と記された（注18参照）。

同作品を単独に見てもどこが鳥でどこが牡牛かわかりづらい。もう一つの緞帳として構想されたLC（牡牛）と〈鳥＝女〉を隣接並置した〈私が夢を見ていた〉と関連付けて、このタイトルが理解できる作品である。

以上の事実は、同時期に構想された二つの緞帳が、これまで独立した連作と考えられてきた〈牡牛〉と〈私は夢を見ていた〉を関連付ける結節点になっていることを示している（図4）。

8.2. 東急緞帳の神話イメージとの接続

振り返るなら、東急緞帳の主要な構成要素となった《牡牛X》にはその右下に「オイロペの略奪」と記され、《牡牛XIII》には「ミノタウロスの誕生」と記されていた。

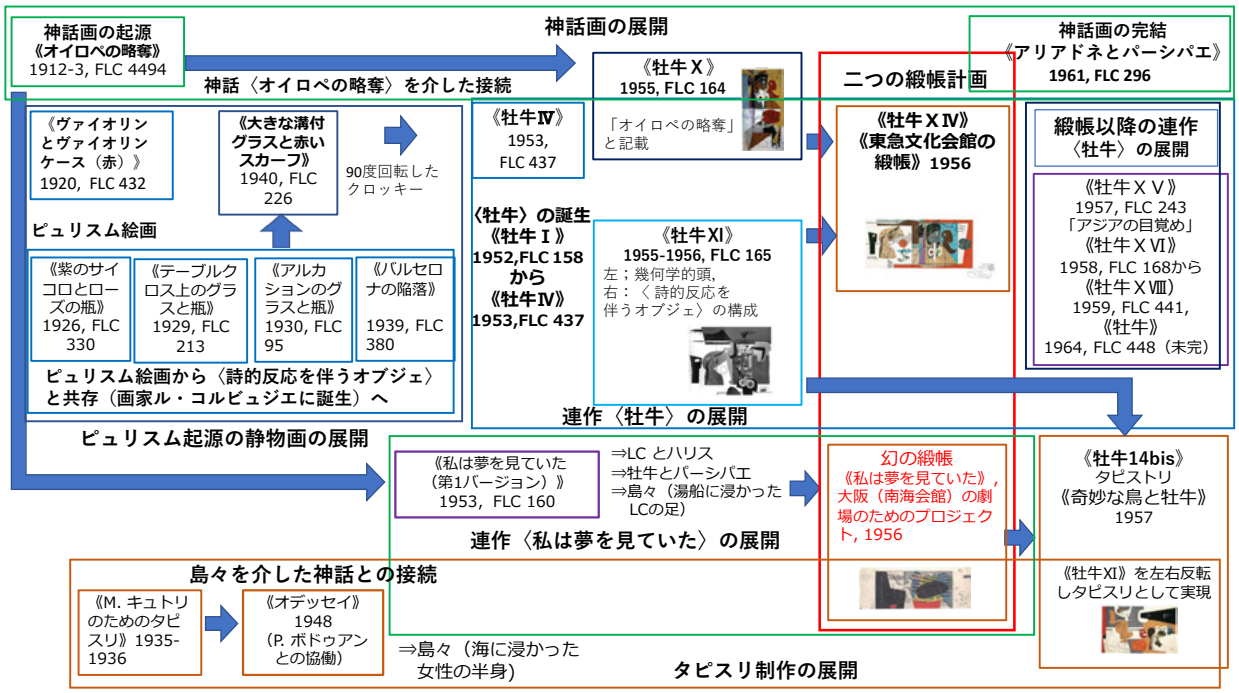


図４　ル・コルビュジエの絵画作品とタピスリにおける東急緞帳の位置づけ

そこで、オイロペの略奪に始まりアリアドネにいたる神話の観点から〈牡牛〉を描いた彼の絵画作品を調査した。その結果、以下のように4種、5作品の存在が確認できた。

1）オイロペの略奪（ミノス王の誕生）：
　a)《オイロペの略奪》（1912–13, FLC 4494）
　b)《牡牛Ⅹ》（1955, FLC 164）
2）ミノタウロス誕生につながる牡牛とパーシパエ（ミノス王の妻）の交わり：
　《私は夢を見ていた》（1953, FLC 160）
3）ミノタウロスの誕生：
　《ミノタウロスの誕生》（1956, FLC 4155）
4）アリアドネ（パーシパエの娘）：
　《アリアドネとパーシパエ》（1961, FLC 4153）

以上の事実は、東急緞帳が、形成期の《オイロペの略奪》に始まり晩年の《アリアドネとパーシパエ》で完結する牡牛関連神話の探求のほぼ中央に、位置づけられることを示している。

9. 結論

本研究の結果を要約すると以下のようになる。

1）東急緞帳のもとになった〈牡牛〉の種子は以下をカヴァーする。静物（〈オブジェ・ティプ〉、〈詩的反応を伴うオブジェ〉）、〈女性〉イメージ、神話イメージ、自然景観。
2）東急緞帳に先駆けて、タピスリ制作がはじまり、ボドゥアンとの共同制作《オデッセイ》では、海に浮かぶ島々が表現されていた。
3）東急緞帳は、連作〈牡牛〉の開花（《牡牛Ⅷから《牡牛XⅢ》）を緞帳という形式で実現した作品である。
4）東急緞帳の構成は、〈オブジェ・ティプ〉を構成要素とする静物画（種子–1）の延長上に位置づけられる《牡牛Ⅹ》と〈詩的反応を伴うオブジェ〉（種子–2）の構成に基づいた《牡牛XI》の隣接・並置に由来する。すなわち、東急緞帳は開花期の油彩画が内包する〈牡牛〉の二つの種を総合する作品である。
5）東急緞帳と同時期にもう一つの緞帳が構想された。それは連作〈私は夢を見ていた〉の緞帳化であり、坂倉が大阪で設計した南海会館のものと考えられる。
6）東急緞帳は、形成期の《オイロペの略奪》から晩年の《アリアドネとパーシパエ》に至る牡牛関連神話のほぼ中央に位置づけられる。

本稿を締めくくるにあたって、彼が最晩年に制作した『二つの間で』を改めて参照したい。そこには以下のように記されている。「複数の極［des poles］が必要だ。複数の岸［des rives］が必要だ。二つであることが必要だ

……すべては二つの群れの中でしか生じない。あるいはわれわれ二人、あるいは二者のあいだでしか」（Le Corbusier, 1964, 巻末プレート）。また、《牡牛XV》を反芻するテキストにおいて「アジアの目覚め」と記されていた。

以上の記載を踏まえると、東急緞帳は以下のような他者との共存を示しているといえるだろう。第一に、連作〈牡牛〉で探求されたのは〈牡牛（男性）〉に対立する〈女性〉という他者との共存であり、東急緞帳も同時期に緞帳としても構想された連作〈私は夢を見ていた〉も夢を介した同様な他者との共存だった。次に、直後の〈牡牛XV〉に関するテキスト「アジアの目覚め」は、ヨーロッパに対立するアジアという他者との共存を示している。その他、東急緞帳には、自然、神話、夢などさまざまな他者との共存が認められる。

要約するなら、東急緞帳は彼が創作活動の中で培ったさまざまな他者を内包し、それらを一者に還元することなく、共存という形式で併置するに至った彼の画家としての創作活動を総合する作品である。

注

1　東京急行電鉄株式会社編『東急文化会館（竣工記念パンフレット）』、東京急行電鉄株式会社、v.1956、pp. 12–13に添えられた原画はル・コルビュジエの原画デッサン（Mathias, 1984, p. 81）とほぼ同じである。ただし、右下に記されたメモが右に移動されている。坂倉が「taureau」を「闘牛」と邦訳した理由は未詳。

2　『全作品集第6巻』の「綴れ織り［tapisserie］」で「東京のさる劇場の緞帳」として掲載される図版は、右下に欠けが見られるなどの理由から東急緞帳ではなく、原画のトリミングと考えられる。

3　彼は8月18日作成のスケッチについて「モデュロールのおかげで確実な組織化と調和による壮麗さを得る」と記している。しかし、モデュロールの具体的適用に関する記述はない。

4　同書は〈牡牛〉を含む複数の連作に関する情報を提供するものの、東急緞帳そのものに関する情報は断片的である。

5　Pauly（2019）とPauly（2022）は、彼のデッサン集成（全4巻を予定）の第1巻と第2巻であり、1902年から1929年までのデッサンを網羅する。

6　日本に送付された原画の内、Pl. 2が掲載されるだけでなく、補遺に（東急緞帳：牡牛XIV作成のために添えられた）注釈が掲載されている。テキストから図版はPl. 1–3の3枚あったと考えられる。注釈には以下のような項目で緞帳製作のための説明と指示が記されている。1. Pl. 1に記載された緞帳の可視部分。2. Pl. 2とPl. 3に基いて色彩について。3. Pl. 2とPl. 3に基づきa）左下に描かれた二人の人物像、b）黒の線描、c）格子縞、d）型について。4. テクスチャー。ここでは羊毛が想定されている。対して、実現案は裂地がレーヨンである。

7　ロードイド板を版とする白黒反転の版画。

8　〈オブジェ・ティプ〉において、絵画対象、その形状と色彩の関係は以下のように整理できる。すなわち、絵画対象：形状＝多：1であり、形状が普遍の典型（タイプ）として一元化される。対して、形状：色彩＝1：多であり、色彩は絵画対象の固有色から自立するだけでなく、典型として一元化された〈オブジェ・ティプ〉の形状に対しても複数の色彩が割り当てられる。

9　彼の〈女性〉イメージ導入の極みを象徴する作品がアイリーン・グレイ設計のE1027の壁面に描かれた《3人の人物》（1938）である。

10　これとほぼ同様の図が『直角の詩』の序文に添えられた（Le Corbusier, 1955, p. 9）。

11　同様のイメージが1955年に反芻された（Krustrup, 1986, 頁付なし）。海の中で横たわる女性の裸身として描かれ、ひざや胸などのその突出部が島々と関連付けられ、ロンドンの浴槽でのル・コルビュジエの足により近いものとなっている。

12　Mathias（1987, p. 26）に掲載されたカルトンはこの油彩画がトリミングされたもので、制作年が1936年と記されている。ただし、この作品はマリー・キュトリ同様に下絵を提供しただけで、協働作業の開始はボドゥアンとの1949年と考えられる。マティアスによれば、「ピエール・ボドゥアンは、1962年7月25日に記された長い手紙の中で、1949年12月に始められた協働を総括（bilan）している」（Mathias, 1987, p. 20）。

13　彼にとってボドゥアンと共同制作したタピスリはそれまでのものとは異なる。「共同作業を始めてすぐ、彼は基本方針を定めた。タピスリはタンスカバーではないし、絵画でもない。それは床に届いていなければならない。タピスリは壁画となり、住まいの壁面絵画となり、装飾ではなく、建築の有用な要素となる」（Petite, 1970, p. 154（邦訳）p. 353）。タピスリは、このように飾られる部屋（空間）に固有な壁画に準ずるものと考えられた。しかし、ミュラル＝ノマド（遊牧民の壁）と名づけられたように、壁画とは異なり、丸めて持ち運び可能な建築要素だった。

14　ジョルノ等はその根拠として、ル・コルビュジエが同油彩画の写真の背面に記したメモを挙げている（N. Jornod et al., 2005-2, pp. 860–861）。そこには「1920 1950 / 1920のタブローのクロッキーを示す［donner］」と記され、その下に絵画のコンポジションを示すクロッキーが描かれ、その右横には「得も言われぬ空間を参照」と記されている。さらに、ジョルノ等はル・コルビュジエによるロナルド・アレイ（テートギャラリー学芸員補佐）に宛てた手紙を挙げて、「牡牛」が1920年のタブローとその作品を横にした写真から誕生したと説明している。手紙には以下のように記されている。「私はあなたのために「牡牛」の歴史を確立しました。あなたは物事がどの

ように生まれたかを見るでしょう（後略）」（「ル・コルビュジエのロナルド・アレイ氏への手紙」（1958年6月25日, FLC-C2-11-22, N. Jornod et al., 2005-2, p. 1043）。また、同作品の署名の下に「20/52」と記され、同作品が1920年制作の油彩画の延長上にあることが示されている。

15 〈牡牛〉誕生の直前に制作された《ヴァイオリンの変異》（1952, FLC 432）では、《アルカションの漁船、グラスと瓶》（1930, FLC 95）に描かれたロープに加えて、牡牛の胴体と尻尾、対の渦巻き、後に「牡牛のしるし」と名づけられた牡牛の角に由来する三日月状の形状などが描かれており、前者が後者の延長上にあることがわかる。

16 左端のスケッチに描かれた「ジャルド60」という記載から対応する作品は、モーリス・ジャルド編のル・コルビュジエのデッサン集（Jardot, 1955）に掲載された図版60にあたる。同書は80枚のデッサンの集成であり、その選択について「ル・コルビュジエに負う」という記載がある。ジョルノ等が掲載した図版（N. Jornod et al., 2005-1, p. 306, ill. 239）は上下が反転している。

17 C. 4肉体の項に添えられたリトグラフには、彼が『二つの間で』で「牡牛のしるし」と呼んだ牡牛の角を頭にねじ込んだ女性の裸婦像が描かれている。それは〈牡牛〉が〈女性〉イメージと関連付けられる準備段階を示唆している。

18 《牡牛XV》の写真裏面に東急緞帳が《牡牛XIV》、タピスリ《奇妙な鳥と牡牛》が《牡牛XIVbis》にあたると記される（N. Jornod et al., 2005-2, p. 928）。

19 「テーマ自体が展開し、その開花（おおよそ牡牛VIII～XIII）を経て、そしてテーマに関する感性の変化とタブローの諸要素の新しい配置へといたりました」（「ル・コルビュジエのロナルド・アレイ氏への手紙」（1958年6月25日, FLC-C2-11-22）。この手紙の写しが下記に掲載されている（N. Jornod et al., 2005-2, p. 1043）。

20 ジョルノ等はル・コルビュジエと妻イヴォンヌに対応付けている（N. Jornod et al., 2005-2, p. 909）。

21 表題となる「ユニテ」は1952年に完成したマルセイユのユニテとも重なり、同版画集がその完成に合わせて制作されたことを想起させる。

22 東急緞帳が株式会社東急電鉄から当館に寄贈される際に作成された「東急の東急緞帳について（平成25年6月17日）」に記される作品の現況は以下のとおりである。

【作品現況】

本　体：白地部分表面に（繊維中までは浸透しきっていない）茶色の筋状、面状汚れが多数ある。四周、部分に黒ずみ、汚れが目立つ。裏面に茶染み。裏化粧裂（緑地平絹）に切れ、破れ。吊紐に塵埃等による汚れ、染み、切れ、裂け。

素　材：レーヨン、科学染料。ドビー織（機械織）。一部（臙脂、緑円）綴織。

技　法：裂地は縫い継ぎ。部分的に地と別裂をアップリケ。黒曲線は黒紐を綴じ付け。

保　管：短辺を軸にして巻いた状態。

23 スイス学生会館談話室の壁画では『直角の詩』の以下の4つのリトグラフに由来する絵画が隣接・並置されている。1）C. 1肉体、2）E. 4性格、3）E. 3性格、4）C. 5肉体（Krustrup, 1986, p. 107）。この内、3）は以下の油彩画が対応する。《蝋燭を伴う女性Ⅰ》（1946, FLC 412）から《蝋燭を伴う女性Ⅳ》（1947, FLC 419）（N. Jornod et al., 2005-2, p. 796 & 810）。

24 スケッチブックK43には組み合わされた手を描いた多くのデッサンが存在する（K43-656～662）。内656～659は56年5月6日から7日にかけてミノタウロスの誕生をテーマとして描かれた。

25 “1922 T80”と記される作品については、1923年の独立展のために制作されたT80の《垂直の静物Ⅰ》をラ・ロッシュが購入したという記録がある（N. Jornod et al., 2005-1, p. 383）。水平線のイメージは、『直角の詩』E. 2性格、p. 92に掲載された後、東急緞帳の原画制作直前にあたる1956年5月6日に鉛筆デッサンとして反芻された（ル・コルビュジエ スケッチブックK43-60）。『二つの間で』のText Pl. 5に「水平線が/静寂をひろげる/夜の上に/海岸で」と記され、その下に東急緞帳と同様の地形を伴う水平線が描かれている。

26 スケッチブックの記載と東急緞帳の不一致については、以下の二つの可能性が考えられる。1）スケッチブックに記載された「？」が示唆するように、「XI＋XII」ではなく「X＋XI」の勘違いである。2）当初は《牡牛XI》と《牡牛XII》の組み合わせで構想していたが、《牡牛X》と《牡牛XI》の隣接・並置に変更した。2）に相当するデッサンが見られないことから1）の可能性が高い。

27 ジョルノ等は、《アルカションの漁船、グラスと瓶》（1930, FLC 95）の解説で、頂点を共有した二つの三角形について、彼のスケッチブックB9-582を挙げて、泥の中の足跡を象徴していると説明している（N. Jornod et al., 2005-1, p. 480）.

参考文献

1 ウィリ・ボジガー編：ル・コルビュジエと彼のセーブル街35番地のアトリエ全作品集1952–1957, A.D.A. EDITA Tokyo, 1977.

2 Cohen, J.-L. : La série *Je rêvais*, 1953–1960 : Musée Picasso (éd) : *Le Corbusier, le jeu du dessin*, Éditions Hazan, 2015, pp. 128–131.

3 Gordon, C. & Kilian, K. : *Chandigarh: Forty Years after Le Corbusier*, ANQ Documents, Architectura & Natura, 1991.

4 Fondation Le Corbusier (ed) : *Le Corbusier Sketchbooks 2 1950–1954*, The Architectural Foundation and The MIT Press Cambridge, 1981.

5 Fondation Le Corbusier (ed) : *Le Corbusier Sketchbooks 3 1954–1957*, The Architectural Foundation and The MIT Press Cambridge, 1982.

6 Jardot, M. : *Le Corbusier dessins*, Deux Mondes, 1955.

7 Jornod, N. et Jornod J.-P. : *Le Corbusier catalogue raisonné*

de l'œuvre peint Tome Ⅰ, Skira, 2005.
8 Jornod, N. et Jornod J.-P. : *Le Corbusier catalogue raisonné de l'œuvre peint Tome Ⅱ*, Skira, 2005.
9 Krustrup, M. : *Le Corbusier L'Iliade Dessins*, Borgen Copenhague, 1986.
10 Le Corbusier : *Maison des Hommes*, Librairie Plon, 1942. 邦訳『人間の家』、鹿島出版会、1977.
11 Le Corbusier : *Modulor 2*, Éditions de L'Architecture d'Aujourd'hui, 1955, 邦訳『モデュロールⅡ』、鹿島出版会、1976.
12 Le Corbusier: *Le Corbusier My Work*, The Architectural Press London, 1960.
13 Le Corbusier: *Le poème de l'angle droit* [直角の詩], Le Corbusier & Éditions Connivences, 1989 (originally published by les Éditions Verve, 1955). 小野塚昭三郎訳、ル・コルビュジエ『直角の詩』展、ギャラリー・タイセイ、1994.
14 Le Corbusier : *Entre-deux* [二つの間で], Éditions Forces-Vives, 1964.
15 Martine Mathias : *Le Corbusier œuvre tissée*, Philippe Sers, 1987.
16 Pauly, D. : *Le Corbusier Drawing as Process*, Yale Univ. Press, 2018.
17 Pauly, D. (éd) : *Le Corbusier catalogue raisonné des dessins TOME Ⅰ. Années de formation et premiers voyages. 1902–1916*, AAM Éditions, 2019.
18 Pauly, D. (éd) : *Le Corbusier catalogue des dessins TOME II Début de l'activité picturale*. 1917–1928. AAM Éditions, 2022.
19 Petit, J. (éd) : *Le Corbusier Dessins*, Les Editions Forces-Vives, 1968.
20 Petit, J. : *Le Corbusier Lui-même*, Editions Rousseau, 1970. 邦訳：田路貴裕＋松本裕訳『ル・コルビュジエみずから語る生涯』, 中央公論美術出版, 2021.

追記

本稿は、2022年12月23日に実施した川島織物セルコンに向けた東急緞帳に関する講義（ZOOM）を発展させたものである。当館所蔵の東急緞帳は川島織物セルコンに保管されており、同講義は2021年9月に実施された関係者向け見学会が契機となって実現した。

（2022年5月9日原稿受理）

［論 文］

上海華興商業銀行綜合社宅（設計：前川國男建築設計事務所）における住戸計画と空間構成

―収蔵資料の分析から得られた知見―

小林 克弘*

Planning of Residential Unit and Spatial Composition in Shanghai Hua Hsing Commercial Bank Dormitories designed by Mayekawa Kunio

— Some Findings Obtained by Analyzing Collected Materials

KOBAYASHI Katsuhiro

The Shanghai Hua Hsing Commercial Bank Dormitories, a representative of the prewar works of Kunio Mayekawa Architects, was displayed in the "Designing Houses - Masterpiece House from NAMA's Collection 1940–1975" (December 14, 2021 to March 13, 2022) held by the National Archives of Modern Architecture. In preparation for the exhibition, the collection materials were analyzed and scrutinized. The purpose of this paper is to summarize the findings obtained at that time to use as a useful basic material for the future research. In particular, the following points became clear.

1) By examining the date of the drawings investigated was when the square shape was changed to the C shape.
2) The characteristics of the five dwelling unit types were confirmed concretely in the drawings.
3) Clarified are some features regarding the scale of drawings and the characteristics of how to draw.

キーワード：国立近現代建築資料館、令和３年度収蔵品展「住まい」の構想、集合住宅、スキップフロア、メゾネット、住戸タイプ

1. はじめに

1.1. 本稿の目的

上海華興商業銀行綜合社宅は、前川國男建築設計事務所の戦前の実施作品の代表的存在であるのみならず、戦中期に実現した近代建築として創意工夫に満ちた秀作である。しかしながら、上海郊外に建設され、直接見ることが難しかったため、これまで、大きく取り上げられることが少なかった。

文化庁国立近現代建築資料館が開催した「令和3年度収蔵品展「住まい」の構想　収蔵資料が物語る名作住宅1940－1975」（2021年12月14日から2022年3月13日）において、上海華興商業銀行綜合社宅の収蔵資料の展示を行った[1]。その展示準備のために、収蔵資料の分析と精査を行う過程で、この作品に関する様々な事実を見つけることができた。本稿は、その際に得られた知見をまとめておくことで、この作品に関する今後の研究にとって有用な基礎資料とすることを目的とする。

1.2. 施設の概要

華興商業銀行綜合社宅は1939年（昭和14年）に上海で設立された日中共同出資の銀行の大規模社宅であり、前川國男建築設計事務所の上海分室において1939年夏から半年強で設計がなされ、実施図面を作成する間の1940年1月に着工し、1941年の秋には第一期工事竣工という速さで建設された集合住宅である[2]。

この施設は、上海市の中では北東部に立地し、中心部から北に数キロメーターに位置する未開拓の地区を敷地として、東社宅（日本人行員用）と西社宅（華人行員用。華人という表現は図面に従った）から成る。それぞれ大きな共用中庭を囲むロの字配置の計画であり、戸数はそれぞれ約100戸、住戸の合計床面積は約1万5千平方メートルを超えるという大規模プロジェクトであった。1941年秋に第一期工事が竣工したものの、東社宅と西社宅共に南側の棟は第二期工事となったため、実際はロの字型ではなく、コの字型での竣工であった。

東社宅は、5つの住戸タイプから成り、最大規模のA型は、一住戸が3層で、面積が300平方メートルを超える。また、B型、C型、D型では、3層の中に、1.5層分の天井高を持つ住戸を重ねるなど、各住戸の平面計画および空間計画においても、大変意欲的な創意工夫がなされた集合住宅である。西社宅でも4タイプの住戸が組み合わされた。

1.3. 既往研究

住戸計画や空間構成を述べている既往研究としては、当時、前川國男建築設計事務所の上海分室においてこ

*国立近現代建築資料館 主任建築資料調査官、工学博士

の社宅を担当した大沢三郎による『建築』1961年6月号に掲載された記事[3]や松隈洋『建築の前夜　前川國男論』みすず書房、2016年[4]がある。後者には設計・建設の経緯に加えて、各住戸タイプの概要が説明されている。華興商業銀行綜合社宅には、8頁がさかれているものの、図面が掲載されていないため、図面と対照しながら各住戸タイプの概要を理解することはできない。

本稿は、これらの既往研究からわかる事実に基づき、収蔵図面を活用して、それらの内容を検証し、既往研究では明らかにされていない新たな知見を得ることを目指した。

1.4. 収蔵資料について

1.4.1. 図面資料の全体像

収蔵資料は、図面が主であるが、先述の展示に際しては、前川建築設計事務所が保管する写真アルバムの展示も行った。両者ともに、奇跡的に国内に持ちかえられ戦禍を逃れることができた、貴重な資料である。

図面は、2019年以降に前川建築設計事務所から、資料館に寄贈されている。その際、前川建築設計事務所に保管されていた華興商業銀行綜合社宅に関連する図面は、すべて資料館に寄贈された。大半の図面は、フィート・インチ法の縮尺を用いて、A1サイズの和紙に鉛筆で描かれており、前川國男建築設計事務所による図面番号（4桁の数字）が付されている。資料館では、収蔵後に、管理上の整理番号を付しているが、本稿では、図面番号を用いて［図面番号］という表記により説明を行った。そのうえで、末尾に図面番号と資料館整理番号の対照表（表1）を付すことにより、今後の研究において資料館の収蔵図面へのアクセスが容易になるように配慮した。

1.4.2. 東社宅に関する図面資料

まず、図面は、東社宅（日本人行員用）と西社宅（華人行員用）に大別される。

東社宅に関しては、作成年月順に、図面［1033］（昭和14年11月20日）から図面［1168］（昭和16年7月16日）までの番号が振られており、欠番（当初番号が振られてであろうが、保管されていなかった図面）もあるので、計103枚である。大半が、昭和14年11月20日から、昭和15年11月20日までの間に作成されている。これらの図面は、基本設計の詰めの段階から、工事と並行して進められた実施設計期間に作成されている。図面番号の始まりが、［1033］という半端な数であることはやや奇妙であり、図面［1033］より前の基本計画段階でのスタディ図面も描かれたはずであるが、それらは何らかの理由で残されていないと考えることが自然であろう。

住戸の5つの型すべてについて、1:8"=1'（メートル法で描かれた図面の1/100に相当する。正確には、1/96）で描かれた平面図、立面図、断面図に加えて、1:2"=1'で描かれた平面詳細図、展開図、矩計図が残されている。構造図、設備関連図（電灯器具及カーテン配置図）は、1:8"=1'で描かれている。また、外構図、外構遊具、室内移動家具も残されている。

1.4.3. 西社宅他に関する図面資料

西社宅は、図面［1301］（昭和15年1月27日）から図面［1345］（昭和15年12月24日）までの内、28枚が残っており、図面の種類や内容、作成された時期は、東社宅とほぼ同様である。更に、図面［7305］から図面［7307］の番号をふられた高架水槽関連の図面3枚がある。これらは、昭和15年6月に描かれ、1/100,1/20という縮尺が用いられている。加えて、図面番号と日付のない図面4面がある。すべてを合計すると、137枚になる。

2000番台から6000番台の図面は収蔵されていないが、それらの番号付された図面が描かれたか否かは定かではない。

1.4.4. 写真アルバム

写真アルバムは、資料館の収蔵ではなく、前川建築設計事務所が保管している。プロジェクトを担当した大沢三郎が残したA4版の写真アルバムであり、中の94頁の台紙に、各頁3〜5点の写真が貼られている。ほぼ時系列順に整理されており、工事中の記録写真に始まり、最後は外観竣工写真、内部竣工写真も含まれる。これらの竣工写真に関しては、どこを撮影した写真であるかという点についてのキャプションは付されていない。竣工写真については、撮影箇所を特定できる写真を掲載することで、今後の研究のための基礎資料としたい。

2. 住戸配置計画の概要

東社宅（日本人行員用）と西社宅（華人行員用）は、それぞれ大きな共用中庭を囲むロの字配置の計画であったが、ある時点から、一部が第二期工事となり、結果的にはコの字型となったことが知られている[5]。この変更がどの時点でなされたかを、図面を通じて検証してみよう。

東社宅に関しては、2つの街区にまたがった計画であり、その全体を示す配置図［1153］（図1）が残っている。配置図として描かれたというよりは、昭和15年10月23日に描かれた東棟住宅庭園計画図であり、建築工事

が進む中で、庭園部分のデザインを描いた図面である。図面の上がほぼ北側であり、後述するように、右からロの字棟（すでに、コの字に描かれている）の街区（ここには、B～E型の住戸が配置される）、その左が、A型の南北に伸びる棟、その左上に高架水槽、広い菜園と思われる場所が広がり、左上にはテニスコート3面が描かれている。

西社宅の配置は、西社宅庭園計劃圖［1334］（図2）に示されている。昭和15年10月4日なので、東社宅とほぼ同時期に、外構計画がなされていたことがわかる。図面の上がほぼ北側であり、右から、ロの字棟（すでに、コの字に描かれている）その左上に高架水槽、広い菜園と思われる場所が広がる。

この地区の幹線道路である松井通りを挟んで、100M以上離れた西側に建てられたといわれているが[6]、そうした配置を明確に示す図面は残っていない。しかしながら、写真アルバムの一組の写真（写真1）を見ると、東社宅を南側から撮った写真の左端に、明らかに西社宅とわかる施設が写っている。正確な距離は明らかではないが、かなり離れた西側に建てられたという事実はこの写真でほぼ確認できる。

3. 東社宅の住戸構成と平面計画

3.1. ロの字からコの字への変更

図面を精査することで、どの時点で、ロの字からコの字への変更がなされたかという点を考察してみたい。

まず、全体を描いた平面図の内、図面［1039］（昭和14年12月6日）（図3）では、ロの字の三階全体が記載され、第二期工事になる南側の棟について、第二期工事という記載は見当たらない。一方、図面［1080］（昭和15年1月31日）（図4）は、全体の2階の平面図であり、南側の棟には第二期工事の記載がなされている。

立面の検証を行う必要もあるだろう。図面［1044］（昭和14年12月11日）（図5）では、南棟（ロの字の場合、図面上、下側に来る棟）については、異なる筆跡で、第二期工事の追加記載がある。これらから総合的に判断すると、昭和14年12月から翌年1月にかけて、南棟を第二期工事とする決定がなされたと考えられる。要は、実施設計が本格化する直前の時期であると思われる。

3.2. 5タイプの住戸平面と組み合わせ構成

3.2.1. A型住戸

東社宅は、A型からE型の5つの住戸タイプから構成されていたことは先述した通りであるが、各タイプの

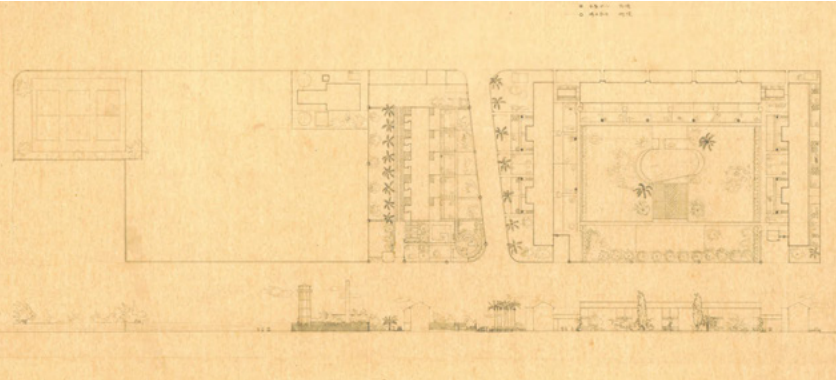


図1　東社宅全体配置図（元名称：東棟住宅 庭園計画図）［1153］

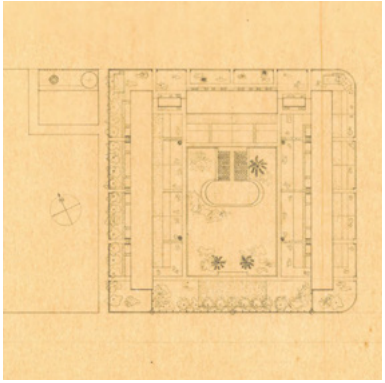


図2　西社宅配置図
（元名称：西社宅庭園計劃圖）［1334］

写真1　東社宅と西社宅（左遠方）の全景　昭和15年12月13日（台紙83）

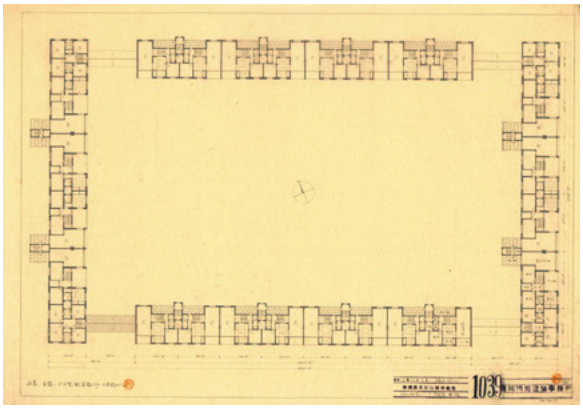


図3　日本人住宅　平面図三階［1039］
左下に、「本図ハCD型ノ配置図トシテノミ使用スベシ」と記載がある。

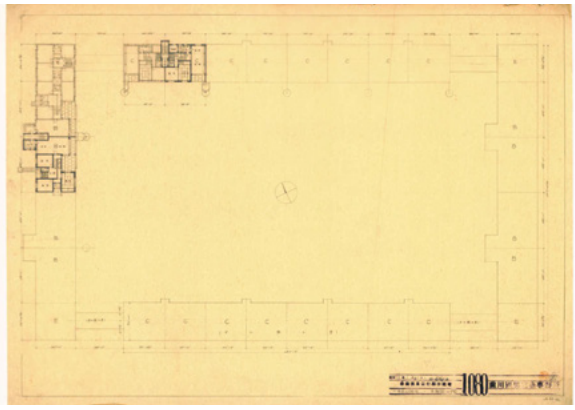


図4　日本人住宅　平面図二階［1080］
南側の棟（繋ぎ棟も含め）に第二期工事と記載あり。

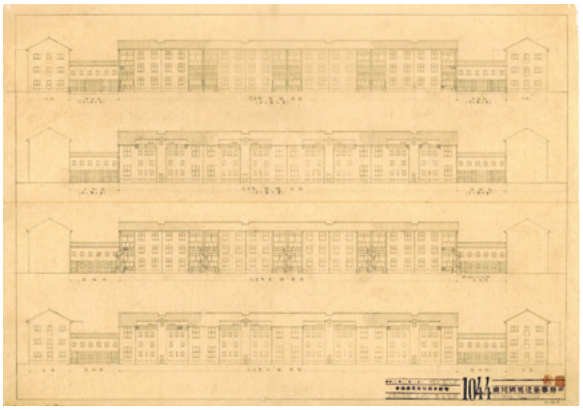


図5　日本人住宅　C・D型立面図［1044］
南棟と北棟の南北立面図。

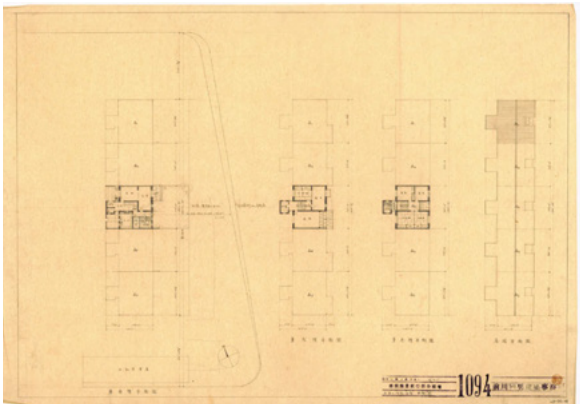


図6　日本人住宅　A型　平面図［1094］

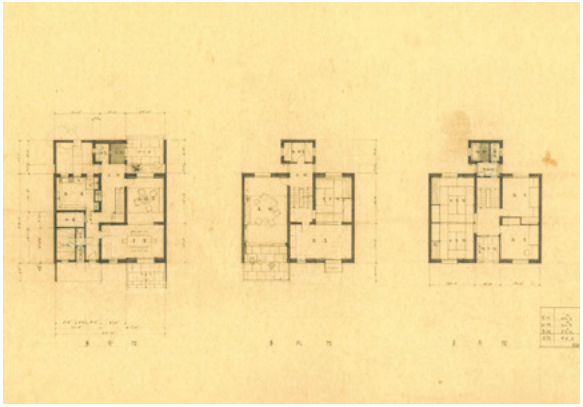


図7　日本人住宅　A型　平面図［1093］

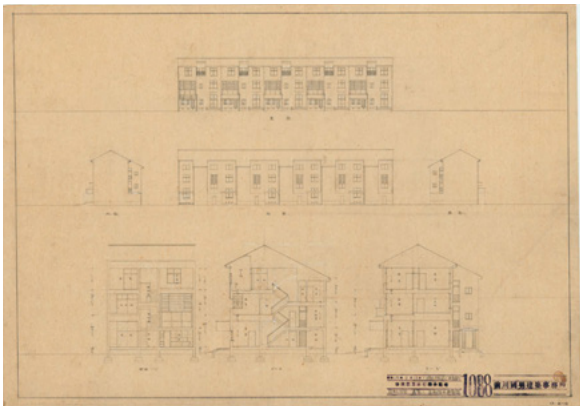


図8　日本人住宅　A型　立面図及断面図［1088］

住戸平面および配列のされ方を図面にて確認する。

A型は、配置図を兼ねた平面図［1094］（図6）でわかる通り、3層の連続長屋方式の住戸であり、ロの字型住棟の隣の敷地において、南北方向に一列に5住戸配列された。図面［1093］（図7）は、図面［1094］を右回りに90度回転させた方向（図面の下が東になる）に描かれているが、この図面からより詳細な平面構成がわかる。この図面に記載されている面積表を見ると、一戸の各階が30坪強であり、一戸当たりの合計は93坪になり、この社宅の中で、最大規模を誇る。

図面から内部の構成をたどってみよう。まず、西側に玄関を設け、中央の階段室が主動線になる。図面［1088］（図8）の中の断面図1'−1、2−2'を見ると、3階ではあるが、すべて同じ階高ではなく、1階南西側（図面

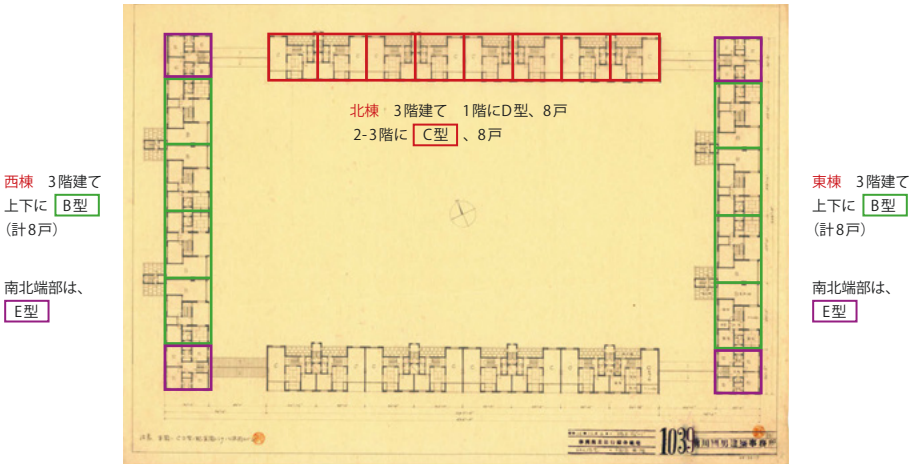


図 9　B-E 型住戸配置ダイアグラム
（元図は、日本人住宅　平面図三階［1039］）　B−E 型住戸の色分けは筆者が行った。

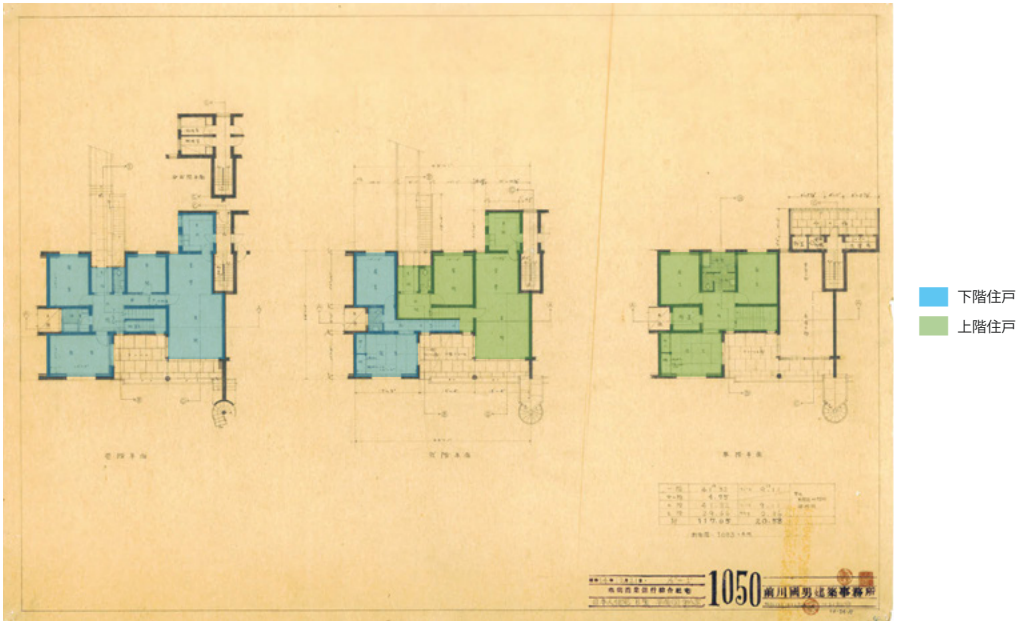


図 10　日本人住宅　B 型　平面図　第八案［1050］
上階住戸と下階住戸の色分けは筆者が行った。

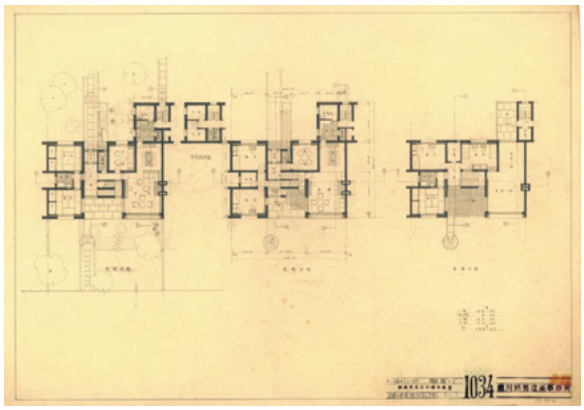


図 11　日本人住宅　B 型　規準平面［1034］

では上）の玄関、広間、台所や使用人室の上部の床面を約70cm下げることで、断面図2'-2に見られるように、スキップフロア的な構成を導入するという、巧みな断面構成がなされている。それにより、2階の居間の床が下がり、居間においては、約5m近い高さの天井高が確保されることとなった。

2階の居間の前の広いテラス、玄関前の凹型のポーチ、台所への通用口を中庭化するなど、随所に、平面的かつ立体的な工夫がみられる。単に規模が大きいだけではなく、立体的な空間的工夫がみられる点は特筆に値する。

3.2.2. B型住戸

B型からE型は、ロの字型の棟の中で使用されている。三階平面図［1039］を基にして、B型からE型の住戸が使用されている個所を示したB-E型住戸配置ダイアグラム（図9）を作成したので、参照しながら分析を進めていきたい。最終的には、コの字になるが、ロの字であった場合を想定して、分析を進める。その際、図面にならって北棟は図面上上側の一辺の棟を指し、同様に、時計回りで、東棟、南棟、西棟と呼ぶことにする。

B型は、3層の中に、二戸が納まる独特の構成であり、住戸配置図（図9）に示されるように、東棟と西棟において、端部のE型を除き、各棟とも、平面的に4区画ずつ、上下二戸ずつなので、計8戸が納められ、東棟と西棟と併せて、16戸になる。

昭和14年12月21日作成の図面［1050］（図10）が、B型の最終形であり、第八案と記されている。第八案なので、この案に至るまでに、数多くのスタディがなされたものと推察される。ちなみに、残存しているスタディ段階の図面では、昭和14年11月27日に作成された図面［1034］（図11）があるが、この図面では、名称の末尾の第八案が消された跡があるので、第七案ということではなく、あくまで、第八案内に属する先行案と考えるべきスタディ案である。先の三階全体平面図［1039］（図3）をよく見ると、B型として、この先行案が書き込まれており、図面左下には「本図ハCD型ノ配置図トシテノミ使用スベシ」という注意書きもある。全体平面図でこの先行案が使用されていること判断すると、一度は、この先行案で進めることが決まったのではないかと思われる。

先行案以前の案を示す図面は残っていないので、ここでは第八案の先行案と最終案を比較検討してみたい。理解を容易にするため平面図［1050］（図10）の上階と下階を色分けした。まず共通点としては、①西側に玄関が設けられ、上階は外部階段で上がった2階に玄関がある、②下階、上階とも居間は、1.5層分の天井高をもち、そのため、2階居間は半階上がったスキップフロアの構成になる、③東側に2階居間のレベルに大きなテラスを設け、西棟では、そこから地上への螺旋階段も備える（東棟では、この螺旋階段は作られていない。立面図にも記載なく、写真でも見当たらない。図12，13参照）、④西側には、主として使用人のための階段が設けられ、居間の高さをさらに2分割して台所や使用人室、物干しを設ける（この点は、立断面図のC-C断面図で理解される）、⑤主要諸室構成は、居間・食堂、客間、寝室・和室であり、下階では寝室・和室が4室であるのに対して、上階では、寝室・和室が3室である、⑥南側の戸境壁（図面上、左）には、水回り室のために小さな光庭が設けられている。

一方、第八案の先行案と最終案の相違点を整理すると、①中央の内部階段が最終案では、行ってこい階段の2列の中に納めており、先行案では階段に3列用いていたことに比べて、より合理的な階段室構成となった、②外部螺旋階段の位置が変更となり、先行案だと1区画ご

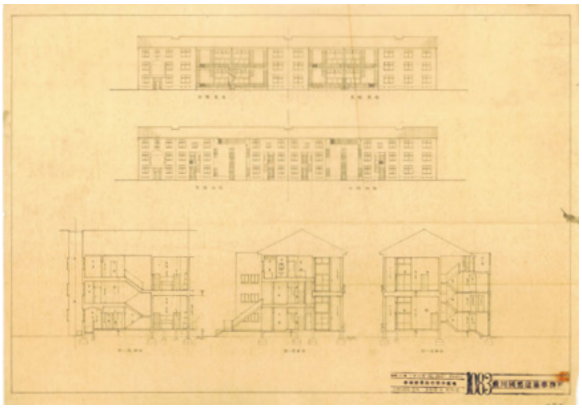


図12　日本人住宅　B型　立面図及断面図［1083］
西棟東面（左上）は螺旋階段があるが、東棟東面（右上）には、螺旋階段はない。

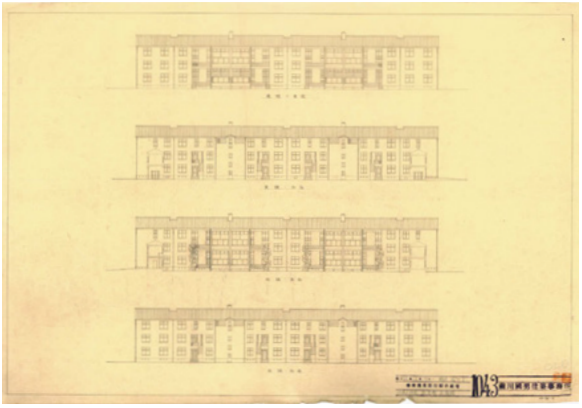


図13　日本人社宅　B, E型　立面図［1043］

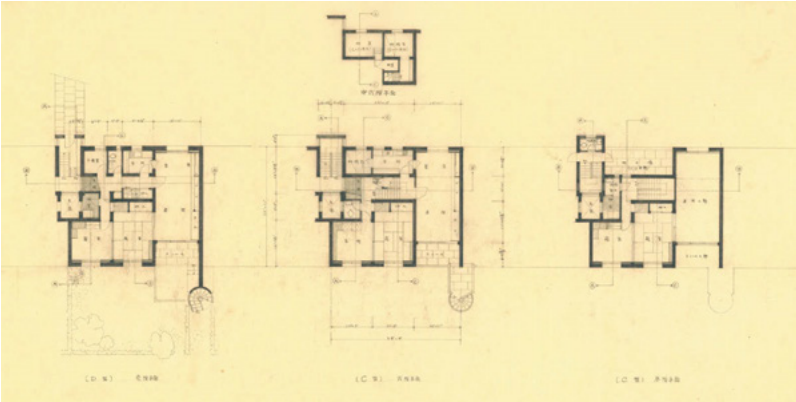


図 14　日本人住宅　C, D 型平面図　第五案［1052］

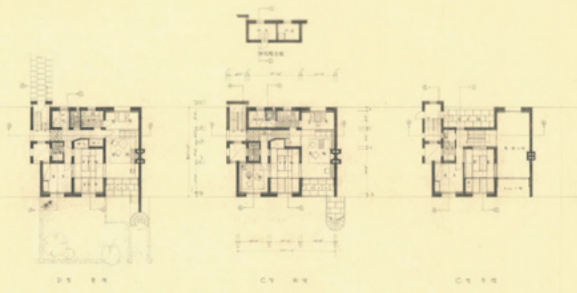


図 15　日本人住宅　C, D 案平面図［1033］

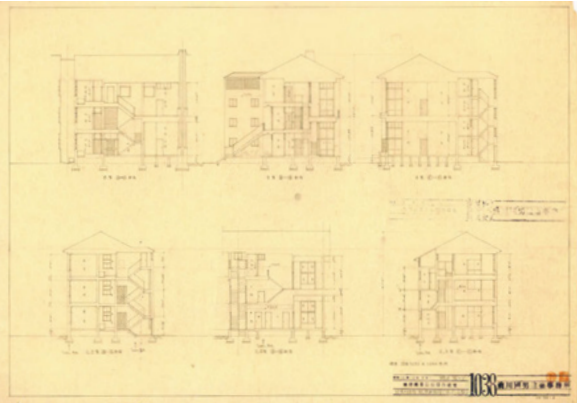


図 16　日本人住宅　規準断面図（B, C, D 型）［1038］

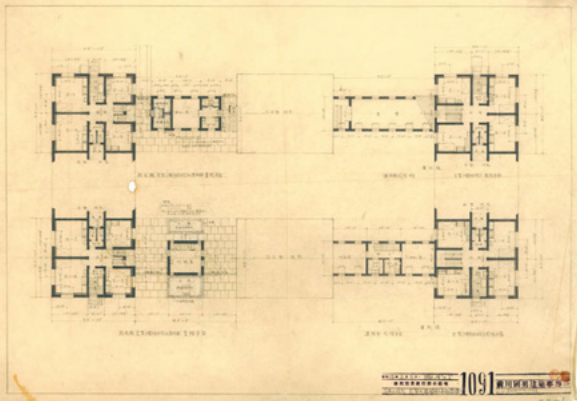


図 17　日本人住宅　E 型及連結部平面図［1091］

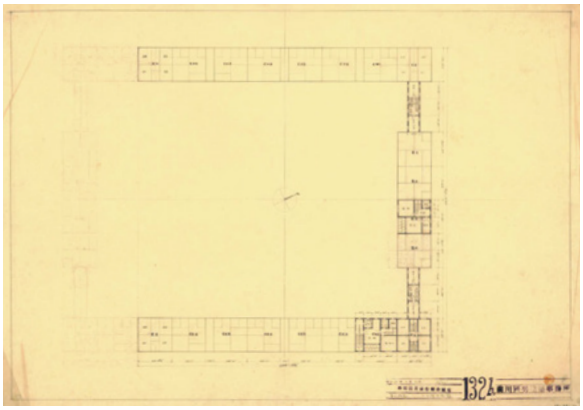


図 18　華人住宅　2 階平面図［1324］
方位は右が北。

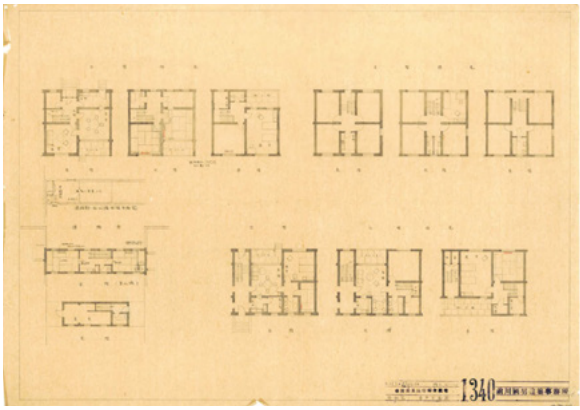


図 19　西社宅　各戸平面図［1340］

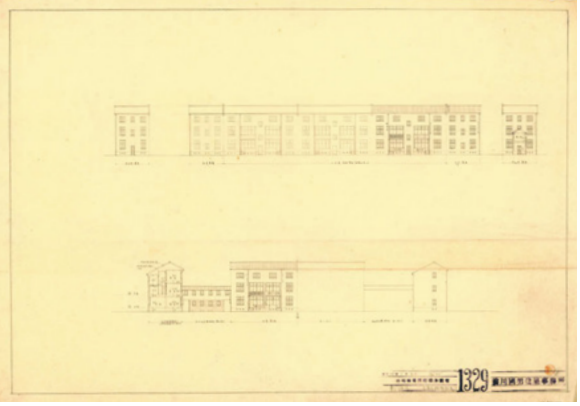


図 20　華人住宅　立面図及断面図　其ノ一［1329］

とに螺旋階段が必要であったが、最終案では、2つの区画で一つの螺旋階段が共有できるようになった。スキップフロアや異なる階高の組み合わせなので、これらの階段をいかに合理的・経済的に計画するかが最後まで検討されたものと思われる。

面積的には、最終案では、上階下階併せて、2住戸の内部面積が117.05坪、テラスと物干しで20.58坪である。上下B型といっても、下階で寝室・和室が一部屋分多いので、面積的にも若干多くなる。その意味では、B型上階、B型下階と分けて分析すべきかもしれない。

3.2.3. C型住戸とD型住戸

CD型は上下に重なる一対の住戸タイプであり、D型が下階の一層を占め、C型がその上の2層分を占める。住戸配置図［1039］（図9）に示されるように、北棟と南棟それぞれに、8対ずつ納められている。

昭和14年12月26日作成の平面図［1052］（図14）に描かれたCD型第五案が最終案である。D型は、北側から入る共用階段室奥の玄関から入り、1階と中二階の一部を使用して、面積は、33.36坪である。居間・食堂は、B型同様、1.5階分の天井高をもつ。階段室奥に光庭が設けられており、階段室及び各回水回りへの採光換気に貢献する。

C型は、共用機段を2階に上ったところに玄関を持ち、2階に客間と居室、半階上がって居間、食堂、台所、更に半階上がり、寝室が2部屋、北側に物干しスペースを備える。この寝室は、洋室と和室が連なり、和室からは居間を半階上がった高さから見渡すという、極めて立体的な空間である。全体の面積は51.13坪という大きさになる。

最終案の約一か月前の昭和14年11月20日に、平面図［1033］（図15）が作成されている。この先行案からの変更点は、詳細に見比べないと理解できないほどに微妙であるが、要は、2階から3階への階段の向きを変えることで、中二階の扱いがより合理的になったことである。中二階の一部（図面上右側）は、D型が一階からの階段で使う使用人室となり、中二階の残りは、C型が使う物置となっている。また、C型の2階の台所も広くなった。断面図［1038］（図16）、の右下図に、北側では天井高が抑えられていることがわかる。半階というスケールを持ち込むことで、居間食堂に高い天井高を確保しつつ、階段回りに無駄な空間が生じないよう、大変きめ細かい設計を行っていることがわかる。

CD型の全体の立面は、図6に示した通りであり、南棟は二期工事とされて、結局は建設されなかった。

天井高を1.5階分とした居間を作ることが目的であれば、すべてをB型にすることも考えられるが、居間食堂の天井高をすべて1.5階にするという趣旨は守りつつ、住戸面積の違い、テラスの広さの違いなどによって、バリエーションを作るということが意図されたと考えられる。

3.2.4. E型住戸

E型は東棟と西棟の南北両端に位置している。それらと、北棟の間には、連絡棟があるが2階建てであるため、北棟とは分節した見え方になる。昭和15年2月5日作成の図面［1091］（図17）に、1，2階の平面図が描かれている。E棟は、他の家族用の棟とは異なり、各階に4室の八畳の独身者室があり、4戸で便所と浴室を共有する。単純な平面とはいえ、浴室は外気に面し、便所は光庭（B型と共有）に面するなど、衛生面での配慮離されている。立面に関しては、図14、図16を参照されたい。

4. 西社宅の住戸構成と平面計画

西社宅（華人行員用）についても、住戸構成・平面計画を、図面参照しながら確認したい。住戸配置については、華人住宅　2階平面図［1324］（図18）で全体の把握ができる。この配置図は、図面の右側が北になるので、コの字平面の中央（図面上右）には、3階建ての連続長屋であるB型が4戸配置され、その両側には連続部2棟がある。

コの字平面の両翼は、図面上での上が西棟であり、下が東棟である。両棟とも端部にE型を3層に渡って配置し、中央には、1階にD型、2−3階にC型を6対ずつ配置している。

各住戸内部の平面については、西社宅　各戸平面図［1340］（図19）がわかりやすい。

B型は、北側玄関から入り、1階には、居間、食堂、台所、2階に8畳の和室2室と浴室、3階に、12畳の寝室と予備室、便所という構成であり、全体はほぼ55坪である。3階に小さな雇人室も設けられているので、華人行員の中でも役員クラスの住宅であったと推察される。東社宅で見られたように、居間の天井高を1.5階分設けるといった立体的な構成はなされていない。しかし、1，2階に南面した広いテラス、3階北側には物干場は設けられている。

C型・D型の組み合わせは、2対で内部階段室を共有し、入り口はすべて階段室経由で設けられている。華人住宅　立面図及断面図其ノ一［1329］（図20）の断面図から読み取れるように、ここでも居間の天井高を1.5階

分設けるといった立体的な構成はなされておらず、東社宅に比べると面積的にも小さいが、テラス付きの居間や寝室などの居室群をすべて東側に向けることで、居室の快適性を確保し、共有階段室から上がった3階の西側に物干場を設けるなど、使い勝手に対する配慮は十分になされている。

E型は、各階6畳程度の個室4個を組み合わせて、台所、便所、浴室は共有という、極めて簡潔な構成である。連結部にも、独身者2部屋が設けられて、台所、便所、浴室は共有となっている。

全体として、西社宅は東社宅に比べると、面積規模において、また、立体的な構成において、簡素なつくりであるが、採光換気含め、生活上の快適さには十分な配慮がなされていることがわかる。

5. アルバム内写真の撮影箇所の特定

5.1. 外観写真

写真アルバムは、1.4.4において述べた通り、A4版であり、各頁3〜5点の写真が貼られた94頁の台紙は、ほぼ時系列順に整理され、地鎮祭（1月6日）に始まり、工事中の多くの記録写真が納められ、最後は外観竣工写真、内部竣工写真も含まれる。各写真のタイトルは記載されていないが、整理番号が付され、撮影日付が記入されている場合もある。日付には、年は記載されていないが、工事期間を考えると、大半が昭和15年なので、昭和15年撮影の写真については年を記載せず、翌昭和16年撮影の場合は、年を記載した。

外部写真については、住戸計画や空間構成の理解の一助となる写真を11点抜粋し、簡潔な説明を加えることで、今後の研究の一助となるようにしたい。各写真については、撮影箇所、撮影日付（記載がある場合）、台紙番号を記載する[7]。また、東社宅配置図［1153］に撮影箇所と撮影の向きを記載した図を、11点の写真の後に掲載した（図21）。

以下、順に各写真からわかることを解説する。尚、西社宅は、遠景にうつっているのみであり、近景写真は残っていない。以下、西社宅という特記がない限りは、すべて東社宅を指す。

［写真2］東社宅と西社宅（左遠方）の全景、9月4日（台紙59）からは、この時期に、東社宅と西社宅共に躯体工事が終了していることがわかる。但し、足場や東社宅の中庭の工事用仮設小屋が残っている。

［写真3］工事中の中庭、正面は東棟（B型）の西面、11月4月（台紙79）では、既に足場がはずれたことがわかる。東棟（B型）西面が写っている写真が少ないので、東棟（B型）西面がわかる貴重な写真である。

［写真4］南東から見たA型棟外観、12月3日（台紙82）。この写真の右側に、コの字型住棟が立つ。

［写真5］A型棟西面外観（台紙92）

［写真6］A型棟東面、昭和16年6月7日（台紙96）。コの字型住棟の西棟3階から撮影した写真と推測される。

［写真7］A型棟東面夜景（台紙87）

［写真8］北棟（CD型沿い）に正面に西棟（B型）を見る、

写真2　東社宅と西社宅（左遠方）の全景（台紙59）

写真3　東社宅工事中の中庭、正面は東棟（B型）の西面（台紙79）

写真 4　南東から見た
A 型棟外観（台紙 82）

写真 5　A 型棟西面外観
（台紙 92）

写真 6　A 型棟東面
（台紙 96）

写真 7　A 型棟東面夜景
（台紙 87）

写真 8　右に北棟（CD 型）、正面に西棟
（B 型）を見る（台紙 96）

写真 9　東棟から西棟を見る
（台紙 85）

写真 10　北棟外部螺旋階段
下から西棟を見る（台紙 85）

写真 11　中庭北西角
（台紙 84）

写真 12　西棟の西側外観（台紙 92）

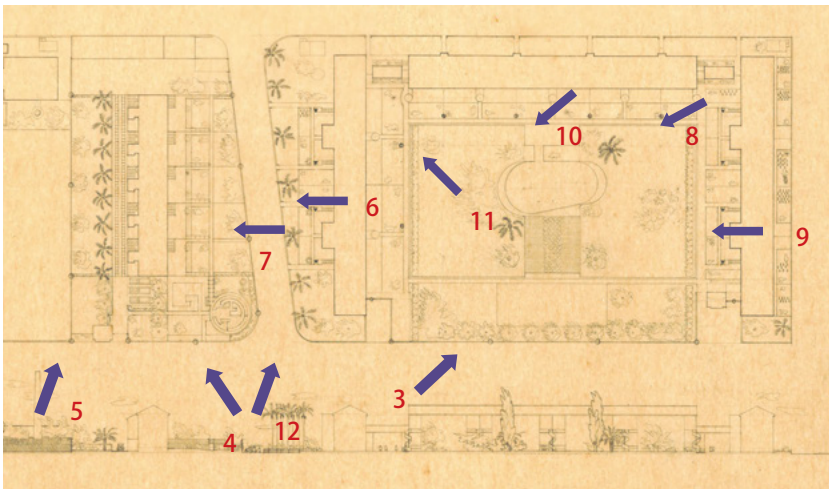


図 21　撮影箇所記載図（元図は、東棟住宅 庭園計画図［1153］）

昭和16年6月7日（台紙96）。

［写真9］東棟から西棟を見る（台紙85）。階段室の踊り場からの撮影と推察される。

［写真10］北棟外部螺旋階段下から西棟を見る（台紙85）。

［写真11］中庭北西角（台紙84）。左が西棟（B 型）、中央が連結棟、右が北棟（C, D 型）（台紙84）。

［写真12］西棟（B 型）の西側外観。この左側に A 型棟が建つ（台紙92）。

5.2. 内部写真

写真アルバムには、竣工後の内部空間の写真が17点含まれている。しかし、残念ながら、写真の説明が記載されていないため、どの住戸の写真であるかは、簡単には判別できない。17点の内部写真について、平面詳細図や室内展開図も参照しつつ、開口部、家具などに着目しながら、部屋の特定するための分析を行った。その結果、どの住戸の部屋であるかが判明した写真を、A 型住戸（写真13～16）、B 型住戸（写真17～20）、C 型住戸（写真21～22）に分けて掲載した。

写真 13　A 型住戸、1 階食堂（台紙 88）

写真 14　A 型住戸、1 階応接室（台紙 88）

写真 15　A 型住戸、1 階台所（台紙 88）

写真 16　A 型住戸、2 階居間（台紙 89）

写真 17　B 型住戸、1 階玄関内側（台紙 90）

写真 18　B 型住戸、居間から食堂を見る（台紙 90）

写真 19　B 型住戸、和室（台紙 91）

写真 20　B 型住戸、1 階浴室（台紙 90）

写真 21　C 型住戸、居間から食堂を見る（台紙 91）

写真 22　C 型住戸、台所（台紙 91）

6. 結

以上の分析を通じて、上海華興商業銀行綜合社宅の住戸配置計画、住戸内の平面計画と空間構成について、得られた知見を整理して述べたい。

1) 図面の作成日時を調べることで、どの段階でロの字型からコの字型への変更がなされたかを知るための手掛かりが得られた。変更の理由は不明であるが、昭和15年冒頭という時点では、戦況が悪化していたとはいいがたいので、この時点で規模縮小が意図されたとは考えにくい。おそらく、ロの字型であると中庭を活用した建材の搬入や保管などが行いにくくなるため、建設工事を容易に進めるために、南側の棟を第二期工事としたのではないかと推察される。

2) 5つの住戸タイプの特徴を、図面で具体的に確認し、変遷の一端も考察することができた。立体的な住戸構成を短期間のうちにまとめることができた点は、驚くべきことである。理由や秘訣を考察したいが、収蔵図面は立体的な構成という方針がなされた後に描かれた図面であるため、立体的な住戸構成が生まれるまでの過程の分析は、本稿の目的を超えた問題である。しかし、設計の最終段階においても、立体的な構成を意図しつつ、合理的な空間利用を達成するために、断面と平面をスタディし続けていたことは、明らかになった。

3) 図面の枚数、描き方の特徴については、基本図が1:8"=1'（通常の1/100に相当する。正確には、1/96）は一般的であろうが、平面詳細図、展開図、矩計図が1:2"=1'（1/24）という縮尺で描かれており、正確な図面を描くということへの強い思い入れが感じられる。家具図や遊具図も作成されている。これらのことが、当時一般的であったかどうかを調べることも今後の課題である。

4) 工事記録写真の分析を通じて、東社宅と西社宅の立地の関係を理解することができた。また、工事中の写真ではあるが、東社宅の東棟の西側（中庭側）の貴重な写真を発掘できた。更に、平面詳細図や室内展開図も調べることで、内部写真のいくつかを特定することができた。

尚、国立近現代建築資料館「令和3年 度収蔵品展「住まい」の構想　収蔵資料が物語る名作住宅1940－1975」にて、上海華興商業銀行綜合社宅の図面が展示されていた2022年1月に、中国人研究者から前川建築設計事務所宛てに、華興商業銀行綜合社宅が現存して使用されているという情報と写真がメール送信されてきた。情報の真偽は未だ確認できていないが、現存していれば、更なる研究の発展が可能となるだろう。

注

1　期間中4枚の図面展示を行った。加えて、1か月間の特別展示（マンスリー展示）には、さらに8枚、計12枚の展示であった。併せて、1.4.4で述べる写真アルバムの全頁をスライドショーにて映写した。

2　設計から工事の期間については、田中誠「上海の前川事務所」『建築雑誌』1985年1月号、35頁において、「設計は14年8月から始めて翌年の春に着工、16年秋に竣工していると思う」と述べている（14年は昭和14年を指す）。しかし、1.4.4で述べる大沢三郎作成の写真アルバムにおいて、撮影日が記録されている写真を見る限りでは、1月6日が地鎮祭であり、建物自体は年末にはほぼ完成しているように見える。本稿では、基本的には、田中の記述に従うが、着工は14年1月とした。

3　大沢三郎「上海華興商業銀行綜合社宅」は、『建築』1961年6月号49頁に掲載された半頁分の記事であるが、設計及び設計管理に直接携わった人物の記事であり、貴重である。

4　松隈洋『建築の前夜　前川國男論』みすず書房、2016年は、上海華興商業銀行綜合社宅を知る上では、最も詳しい資料である。但し、本文中に述べた通り、図面の掲載はなされてない。

5　松隈洋、前掲書、368頁において、第二期工事部分が建設されなかった理由を、戦況の変化や施設が十全足る形で使用されなかったという状況を推論している。戦況の変化による工事中止は大いにありうる理由であろう。但し、前川建築設計事務所に残る他の資料では、施設は竣工後、適切に使用されていたようである。

6　松隈洋、前掲書、263頁

7　写真アルバムには、台紙番号が付されていないが、アルバム全頁をデジタル化した際に、画像名称に台紙番号が付されている。本稿では、この台紙番号を使用する。尚、写真アルバム自体は、前川建築設計事務所が保管しているが、アルバムのデジタルデータは、前川建築設計事務所と資料館の双方にて保管されている。

謝辞

前川建築設計事務所 橋本功所長には、上海華興商業銀行綜合社宅の図面を含む前川國男資料のご寄贈をいただき、当資料館開催の「令和3年度収蔵品展「住まい」の構想　収蔵資料が物語る名作住宅1940－1975」においては、写真アルバムの貸出および展示をご了承いただいた。こうした常日頃のご協力に心から感謝申し上げる次第である。本稿が上海華興商業銀行綜合社宅に対する理解と知見を広げることに貢献できることを切に願っている。

（2022年5月8日原稿受理）

表1　本稿図番号と図面番号（前川國男建築設計事務所）およびNAMA整理番号の対照表

本稿図番号	図面番号	図面名称	作成年月日			NAMA整理番号
			昭和年	月	日	
1	1153	東棟住宅　庭園計画図	15	10	23	24-84-91
2	1334	西社宅　庭園計劃圖	15	10	4	24-84-119
3,9	1039	日本人住宅　平面図三階	14	12	6	24-84-7
4	1080	日本人住宅　平面図二階	15	1	31	24-84-35
5	1044	日本人住宅　C, D型立面図	14	12	11	24-84-9
6	1094	日本人住宅　A型　平面圖	15	2	8	24-84-48
7	1093	日本人住宅　A型　平面圖	15	2	7	24-84-47
8	1088	日本人住宅　A型　立面図及断面図	15	2	12	24-84-42
10	1050	日本人住宅　B型　平面図　第八案	14	12	21	24-84-15
11	1034	日本人住宅規準平面（B型）	14	11	27	24-84-2
12	1083	日本人住宅　B型　立面図及断面図	15	1	25	24-84-37
13	1043	日本人住宅　B, E型　立面図	14	12	7	24-84-8
14	1052	日本人住宅　C, D型平面図　第五案	14	12	26	24-84-17
15	1033	日本人住宅　C・D型平面図	14	11	20	24-84-1
16	1038	日本人住宅　規準断面図（B, C, D型）	14	12	5	24-84-6
17	1091	日本人住宅　E型及連絡部平面図（変）	15	2	5	24-84-45
18	1324	華人住宅　二階平面図	15	2	26	24-84-112
19	1340	西社宅　各戸平面図	15	10	20	24-84-125
20	1329	華人住宅　立面及断面図　其ノ一	15	3	2	24-84-115

ヴァスムート氏所蔵吉田鉄郎著作関連資料整理報告

［資料紹介］

江本 弘*

Report of the material for Tetsuro Yoshida's German Trilogy donated by Ernst Wasmuth

EMOTO Hiroshi

This report is about the NAMA materials previously held by German publisher Ernst Wasmuth concerning three books, namely *Japanische Architektur* (1952), the second edition of *Das Japanische Wohnhaus* (1954; English translation 1955), and *Der Japanische Garten* (1957; English translation 1957), including photographs, original drawings, and layout instructions. Their author, Yoshida Tetsuro, was a leading architect of the Ministry of Communication of Japan during the inter-war period who retired there to work as a professor at Nihon University. Those materials seem to be prepared during the post-war period to his death from disease in 1956.

キーワード：吉田鉄郎、日本の住宅、日本の建築、日本の庭園、エルンスト・ヴァスムート

1. はじめに

本報告は、「ヴァスムート社旧蔵吉田鉄郎著作資料」（以下「ヴァスムート資料」）の調査報告である。本資料は2019年冬から国立近現代建築資料館で行われた「吉田鉄郎の近代――モダニズムと伝統の架け橋」展（会期：2019年11月1日～2020年2月11日）に際してエルンスト・ヴァスムート氏から寄贈されたものであり、吉田鉄郎（1894–1956）の「ドイツ語三部作」として知られる、『日本の建築』（1952年、以下『建築』）、『日本の住宅』（第二版1954年、同英語版1955年、以下『住宅』）、『日本の庭園』（1957年、英語版も同、以下『庭園』）の3著作の編集作業にかかわる[1]。この資料群の整理は同資料館によって行われ、著者はこの整理に基づき、各資料に記された手書き文字の解読を行った。本報告では、その整理結果と併せて資料の概略を述べる。

2.「ヴァスムート社旧蔵吉田鉄郎著作資料」収蔵までの経緯

「ドイツ語三部作」の出版社である、ドイツの老舗建築系出版社、エルンスト・ヴァスムート社を出所とする。同資料の存在は、2008年5月19日に富山テレビで放送された、「平凡なるもの～建築家吉田鉄郎物語～」の取材経緯で明らかとなった。これをきっかけに資料の受け入れ先の問題が俎上に上ったが、本件は担当者の異動により頓挫した。その後、マンフレート・シュパイデル氏から、ヴァスムート社の閉鎖に伴う資料消失の危惧に関する情報が伝えられ、国立近現代建築資料館に受入れが打診されたのは2018年8月のことであった。当時、本件と並行して先述の「吉田鉄郎の近代」展の準備が進められており、本展に際して、吉田に造詣の深いシュパイデル氏と、ヴァスムート氏を会期中に招聘することとなった。両氏は2020年1月25日に開催された追加ギャラリートークの登壇者として来日したが、このときヴァスムート氏が資料群を持参、同氏の意向を汲み、そのまま国立近現代建築資料館収蔵に至った。

3. 整理方針

本資料群は『建築』、『住宅』改訂版、『庭園』で用いられた図版原図（写真、ドローイング）および試し刷りを中心に構成される。以下、その整理方針の概略を示す。

「ヴァスムート資料」全体に対応するフォンド番号「27」を頭に、以下「ファイル番号」、「アイテム番号」の順にハイフンで並列されたものが資料の通し番号となっている（例：「27-30-3」であれば、「ヴァスムート資料」内、ファイル「30」内のアイテム「3」を指す）。ファイル番号は三著作の戦後の出版順（①『建築』、②『住宅』、③『庭園』）にしたがい、かつ、レイアウト指示書とカバー関連資料を先頭におき、各著作内の対応する章番号の順につけられている。『建築』の場合であれば、ファイル番号「1」がレイアウト指示書、ファイル番号「2」がカバー関連資料、そしてファイル番号「3」から「12」までがⅠからⅩの各章資料に充てられ、ファイル番号「13」、「14」はその他の資料（封筒など）に充てられている。『庭園』に関しては、レイアウト指示書を冒頭におき、前付を別途ファイル番号「34」とした。ファイル番号「35」には桂離宮の飛石や庭園を写したフィルムが納められているが、これ

*京都美術工芸大学建築学部建築学科 講師、博士（工学）

表１　日本に送付された図面群

目録最終項目（ファイル～アイテム）

資料番号開始	資料番号終了	アイテム点数	該当書籍	内容
27-1-1	27-1-11	11	JAPANISCHE ARCHITEKTUR	レイアウト指示書
27-2-1	27-2-3	3	JAPANISCHE ARCHITEKTUR	カバーデザイン画
27-3-1	27-3-8	8	JAPANISCHE ARCHITEKTUR	Ⅰ章写真・図版
27-4-1	27-4-13	13	JAPANISCHE ARCHITEKTUR	Ⅱ章写真・図版
27-5-1	27-5-15	15	JAPANISCHE ARCHITEKTUR	Ⅲ章写真・図版
27-6-1	27-6-43	43	JAPANISCHE ARCHITEKTUR	Ⅳ章写真・図版
27-7-1	27-7-53	53	JAPANISCHE ARCHITEKTUR	Ⅴ章写真・図版
27-8-1	27-8-25	25	JAPANISCHE ARCHITEKTUR	Ⅵ章写真・図版
27-9-1	27-9-21	21	JAPANISCHE ARCHITEKTUR	Ⅶ章写真・図版
27-10-1	27-10-37	37	JAPANISCHE ARCHITEKTUR	Ⅷ章写真・図版
27-11-1	27-11-52	52	JAPANISCHE ARCHITEKTUR	Ⅸ章写真・図版
27-12-1	27-12-47	47	JAPANISCHE ARCHITEKTUR	Ⅹ章写真・図版
27-13-1	27-13-22	22	JAPANISCHE ARCHITEKTUR	シャルロッテ・ヨレス宛封筒
27-14-1	27-14-2	2	JAPANISCHE ARCHITEKTUR	レイアウト指示書（追加分か）
	小計	352		
27-15-1	27-15-6	6	DAS JAPANISCHE WOHNHAUS	カバーデザイン画
27-16-1	27-16-9	9	DAS JAPANISCHE WOHNHAUS	レイアウト指示書
27-17-1	27-17-8	8	DAS JAPANISCHE WOHNHAUS	Ⅰ章写真・図版
27-18-1	27-18-50	50	DAS JAPANISCHE WOHNHAUS	Ⅲ章写真・図版
27-19-1	27-19-18	18	DAS JAPANISCHE WOHNHAUS	Ⅳ章写真・図版
27-20-1	27-20-29	29	DAS JAPANISCHE WOHNHAUS	Ⅴ章写真・図版
27-21-1	27-21-12	12	DAS JAPANISCHE WOHNHAUS	Ⅴ、Ⅵ章写真・図版
27-22-1	27-22-24	24	DAS JAPANISCHE WOHNHAUS	Ⅶ章写真・図版
27-23-1		29	DAS JAPANISCHE WOHNHAUS	Ⅷ章写真・図版
27-24-1	27-24-9	9	DAS JAPANISCHE WOHNHAUS	Ⅸ章写真・図版
27-25-1	27-25-41	41	DAS JAPANISCHE WOHNHAUS	Ⅹ章写真・図版
27-26-1	27-26-7	7	DAS JAPANISCHE WOHNHAUS	追加図版
27-27-1	27-27-9	9	DAS JAPANISCHE WOHNHAUS	初版との図版対照表／初版
	小計	251		
27-28-1		1	DER JAPANISCHE GARTEN	レイアウト指示書
27-29-1	27-29-41	41	DER JAPANISCHE GARTEN	Ⅰ章写真・図版
27-30-1	27-30-50	50	DER JAPANISCHE GARTEN	Ⅱ章写真・図版
27-31-1	27-31-44	44	DER JAPANISCHE GARTEN	Ⅲ章写真・図版
27-32-1	27-32-41	41	DER JAPANISCHE GARTEN	Ⅳ章写真・図版
27-33-1	27-33-96	96	DER JAPANISCHE GARTEN	不採用写真
27-34-1	27-34-5	5	DER JAPANISCHE GARTEN	包み紙／タイトル活字
27-35-1	27-35-16	16	DER JAPANISCHE GARTEN	桂離宮フィルム
	小計	294		
	総計	**897**		

らはカバー写真の候補であったと推測される。

この整理により、ファイル番号「1」から「14」が『建築』関連資料、「15」から「27」までが『住宅』関連資料、「28」から「35」までが『庭園』関連資料に割り振られた。なお、同一図版に関する資料には同一のアイテム番号が振られており、場合によっては複数の資料をもつアイテムがある。このアイテム数は『建築』関係352点、『住宅』関係251点、『庭園』関係294点で総計897点となっている[2]。

なお、「ヴァスムート資料」のファイル番号は、ヴァスムート氏の寄贈時に各アイテムが収められた封筒の振り分けに対応している。つまり、寄贈時点で各史料は章ごとに整理されていた。この封筒は寄贈に際して新たに準備されたものではなく、1950年代の編集作業当時に用いられたと考えられるものである。大判図版原図以外の各アイテムにはいずれも帰属する封筒があるため、没図版も含めて、どの著作の資料かについては曖昧であったり不明であったりするものはほぼない。また大判図版原図については、出版された著作との明らかな対応関係がある。なお、『住宅』改訂版第Ⅱ章に対応する資料はない。

以上の概要を表1「ヴァスムート資料の整理概要」にまとめる。

4. 史料整理の経過報告

上述の整理に基づき、2021（令和3）年度6月より手書き文字の解読を開始した。資料のスキャン（データ化）と並行して作業を進めており、2022（令和4）年度4月段階でスキャンがすべて完了した。

4.1. キャプションの解読

『建築』および『住宅』改訂版の資料のほぼすべてには、吉田鉄郎本人によるとみられる、鉛筆によるキャプションの書き込みが確認される。これらはほとんどがドイツ語の筆記体であり、その文字情報の読解を江本が担当した。吉田本人によるとみられるキャプションの筆跡はほとんどが走り書きであり、難読である場合も多い。かつ、消しゴムのようなもので何度も書き直した跡がみられる場合もある。こうした条件が解読を困難にし、判読不能な箇所が多々残されたが、スキャンデータを拡大するなどして、可能なかぎりの活字化を試みた。消し跡についても可能な場合は活字化し、消し跡である旨を注記した。一方、『庭園』資料にはキャプションの書き込みはなく、あったとしても消しゴムのようなもので消した消し跡となっており、消し残しや筆圧による凹みから辛うじて判読できる場合がある。

前2著作（『建築』、『住宅』改訂版）と後者の著作（『庭園』）の資料群にみられる吉田の肉筆の有無の違いは、吉田の病状の進行を表している。吉田に脳腫瘍が発覚したのは1949年5月のことだが、ここから吉田の病状は日を追うごとに悪化していった。その経過は『住宅』改訂版への書き込み文字の筆圧や震えからも推し量ることができる。その後、1955年初夏とされる『庭園』の執筆開始当時にあっては、吉田の病状はすでに深刻であり、「口も不自由、手も片方しか動かせない寝たきりの状態」[3]であった。『庭園』は近江栄およびその後任の森俶朗の協力のもと口述筆記で書きすすめられ、図版の選択やレイアウトの指示なども専ら口頭であったとされる。

4.2. 写真図版の修正指示

写真原図については、クロッピングのために紙を貼り付け、枠取りをしたものがまま見受けられる。その他、写真の内容に修正指示のあるものは、原図にトレーシングペーパーを重ね、その上に修正箇所とその内容が鉛筆で指示されている。そうした修正のなかでも顕著なものに、『住宅』改訂版の図119への指示がある（27-20-21）。この資料では障子の桟をすべて消す指示がなされており、この変更は実際の出版物にも反映された。

また『住宅』改訂版資料には、『住宅』初版の頁（バラされ、対象頁のみ）を用いて、改訂版への再掲の有無を手書きの「○」「×」印で指示している場合がある。これらの資料は、「○」と指示された図版と、出版された改訂版の図版位置とを対照させて整理してある。

4.3. 出版物との異同の概略

「ヴァスムート資料」内の鉛筆書きのキャプションと、出版された3部作のキャプションはおおむね一致している。ただし全般的に、ドイツ語の表現として簡略かつ自然なものに改められる傾向にある。また、特に配置図を中心としたドローイングについては、日本語の固有名詞（施設名）が多くなる場合に、出版物のキャプションではそれらを省略し、一般名詞にまとめるなどの変更がみられる。こうした変更は、『住宅』初版以来の協力者である、シャルロッテ・ヨレスに一任されていたと考えられる。

『建築』および『住宅』改訂版資料には頁ごとの割り付けを指示した、吉田作成とみられるレイアウト指示書が含まれる。『庭園』の組み付けにもそれらと同様の「本の体裁に綴じたもの」[4]が作成されたとの回想があるが、「27-28-1」がこれにあたるとみてよい。しかしその作成者は吉田本人ではなく、森俶朗である。

これらのレイアウト指示書の内容も出版物とほぼ一致している。

4.4. 寸法等書き込みの解読

その他の書き込みとして、原図寸法と印刷寸法の指示、通し番号とみられる数字表記などがみられるが、これらの記入者はヴァスムート社を含むドイツ現地の業者だと考えられる。これらはすべて所定のフォーマットに則っており、判読も容易であることからすべて活字化することを得た。資料には同じくドイツの業者によるとみられる4桁の数字（「9335」や「1256」など）が鉛筆で記載されている場合があるが、その意味は未詳である。

4.5. 補足：『建築』関連資料の提供時期よりみる「ヴァスムート資料」一群の作成時期

『建築』の執筆が始まったのは『住宅』初版出版から間もない1935年秋から1936年春のことであり[5]、本文自体は戦中の1940年代初頭までには完成していたとみられる。一方、「ヴァスムート資料」を構成する『建築』関係の写真図版やレイアウト指示書などが吉田からヴァスムート社に提供されたのは、戦後のことだと考えられる。

これは、ファイル13の封筒類に書かれた住所から推測できる。ここに書かれた宛名は前述の協力者シャルロッテ・ヨレスだが[6]、その住所はワトフォード（イングランド）の「リトル・ナスコット（Little Nascot）」となっている。1930年代初頭に吉田と知り合った当時のヨレスはドイツ（ノイバーベルスベルク）に住んでいたが、1939

年初ごろにイギリスに亡命した。ただし、第二次世界大戦終戦までのヨレスの住所はワトフォードの「グローブ・リー（Grove Lea）」であり、吉田がその後のヨレスの引越先であるリトル・ナスコットの住所を知りえたのは、戦後1949年2月以降のことだったと考えられる[7]。

「ヴァスムート資料」中には、『住宅』第2版と『庭園』の送付時期同定に関連する住所の情報は見当たらない。しかしこれらの制作は少なくとも戦後に入ってからのことであり、より具体的には『建築』出版後のことだとみられる。すなわち、エルンスト・ヴァスムート社が「ヴァスムート資料」の一群を取得した時期は、戦後の1940年代末から1950年代半ばまでの、約5年間あまりに集中していたと推定されるのである。これもまた、「ヴァスムート資料」の来歴を理解する上で付記しておくべきだろう。それは、『住宅』ドイツ語初版の編集にかかわる資料がおおよそ未発見である一方で、『住宅』第2版を含む戦後の「ドイツ語三部作」の編集にかかわる資料がこのように、一群として、全体性の高い状態で保管されていた理由を示す傍証だからである。

注

1 Tetsuro Yoshida: *Japanische Architektur*, Ernst Wasmuth, 1952; idem, *Das Japanische Wohnhaus*, Ernst Wasmuth, 1954; idem, *The Japanese House and Garden*, Marcus G. Sims, tr., The Architectural Press, 1955; idem, *Der Japanische Garten*, Ernst Wasmuth, 1957; idem, *Gardens of Japan*, Marcus G. Sims, tr., The Architectural Press, 1957.

2 なお、27-34-5のタイトル活字は『住宅』英語版（*The Japanese House and Garden*）のもの。

3 森俶朗：吉田さんと『日本の庭園』, 建築家・吉田鉄郎の『日本の庭園』, 鹿島出版会, p.187, 2005

4 同前

5 1935年9月24日付吉田鉄郎宛シャルロッテ・ヨレス書簡（#14010）、14011 1936年3月27日付吉田鉄郎宛シャルロッテ・ヨレス書簡（#14011）。ともにNTTファシリティーズ蔵。

6 シャルロッテ・ヨレスの略歴および『日本の住宅』初版（1935）での吉田との協働については、以下の論考を参照。江本弘：吉田鉄郎『日本の住宅』（1935）の誕生：書簡史料を中心としたその編集経緯に関する研究, 京都美術工芸大学紀要, 第2号, pp. 20–34, 2022.3

7 NTTファシリティーズ蔵、1949年2月4日付吉田鉄郎宛シャルロッテ・ヨレス書簡（#14030）がヨレスのリトル・ナスコットの住所を記した現存で最も古い書簡である。なお本書簡はその内容から、ヨレスから吉田に宛てられた、戦後最初のものだと考えられる。

謝辞

本報告は、NTTファシリティーズの吉岡康浩氏（当時）および堀田渡氏の助言、国立近現代建築資料館の寺内朋子氏による収蔵手続きと目録作成、スキャニング作業に多くを負っている。ここに記してお礼申し上げる。

（2022年5月9日原稿受理）

村田豊建築設計資料のうち、図面以外の資料について

［資料紹介］

飛田ちづる*

Report of materials except of drawings among MURTA Yutaka architectural materials

TOBITA Chizuru

Following the last year report, I will report the materials except architectural drawing. In 2021, we completed to organize the non-graphic materials of MURATA Yutaka architectural materials, although some items remain to be confirmed. We have understand the entire the materials. In addition to drawings and sketches, the materials completed to organize in 2021 included site surveys, photographs of the site during and after construction, documents related to correspondence with related organizations, journals for information gathering, memo for meetings, committee and conference materials, books, and other materials. Other items include notebook. In the future, while we can interview the related persons, I continue to research MURATA Yutaka including the materials.

キーワード：村田豊、空気膜構造、構造設計、建築事務所資料

1. 背景と目的

本報告は、令和元（2019）年に贈与契約を締結した村田豊建築設計資料（以下、村田豊資料）について、全体の整理を終えたことから、その概要を紹介し、今後の研究の一助となることを目的とするものである。

村田豊は空気膜構造建築の第一人者として知られる。大正6（1917）年に新潟県新潟市に生まれ、昭和63（1988）年2月に死去した。昭和16（1941）年東京美術学校建築科を卒業し、同年坂倉準三建築研究所に入所。坂倉建築研究所を退き、フランス政府招聘技術留学生としてパリに留学、ウージェーヌ・ボードワン、ル・コルビュジェに師事。34年に帰国し、同年村田豊建築事務所を開設する[1]。なお、東京都港区麻布台に立地するレストラン、キャンティは、村田豊氏の設計であり[2]、現在は三代目の隆一郎氏がオーナーを務めている。

建築設計事務所の資料は多岐に渡り、一般的に図面とそれに準じるものをもっとも特徴的な資料として考えられる。しかし、事務所や建築家、あるいは同時代の建設業界を知るためには、図面を含めた多様な資料を整理し、調査することが必要である。また、寄贈された資料が建築事務所のすべてを表すものではない。関係者が事務所閉鎖後、あるいは建築家没後に整理する場合もある。

そうした資料の性質を考えながら、調査を進める必要がある。

今回は、主に文書や写真を主体としたファイルの整理を行った結果を、前回のプロジェクト一覧に追加し、かつ資料の質を見ることで、近現代の建築家の事務所を描く一助としたい。

2. 手法

表は、紀要一号に掲載したプロジェクト一覧表に、今回判明したプロジェクトを追記したものである。

合わせて、資料館の分類に沿って、資料の内容をまとめた。所謂意匠に直接関わる図面、スケッチといった資料以外に、敷地調査時や施工中、施工後の写真、関係組織とのやり取りに関する文書、情報収集のための雑誌、打ち合わせを行った際のメモ、何らかの委員会や会議の資料、書籍が挙げられる。他に、建築家の手帳、事務所の経理書類や所員の履歴書などが含まれる場合もある。各資料の位置づけは容易に想像できる利点のある一方で、当時勤務していた人員も存命であるという時代の特徴から、扱いに慎重な判断を要する場合もある。

3. 結果

表1のとおりである。今回の整理で判明したプロジェクトは15件であり、プロジェクトであるかどうかも調べる必要があり、あわせて実物確認の必要がある。

次に、資料の内容を見ると、文書、写真が大半を占める。文書は業務文書と思われる。書籍は、現在は参考資料として館内で館員が使用するように、寄贈資料とは別に整理されているが、当時は寄贈資料に含めていたため、ファイル3つ分が含まれている。

図面も散見された。専ら、筒にしまわれる形式ではなく、文書とともに保管しやすいよう、A2版を折りたた

*国立近現代建築資料館研究補佐員、博士（世界遺産学）

みＡ３にしている青焼きを、裏面で糊付けしたものなどが多い。

写真は、空気膜構造の実験中の写真、模型の写真、施工中の写真、施工後の写真である。建築事務所の写真としては一般的であるものの、当時を知る貴重な資料である。

文書資料の中には、原稿も含まれる。なお、村田が残した原稿は、一般誌に掲載済みのものが大半である[3]。

なお、構造設計事務所の図面も多く残されている点が、筆者の担当する他の資料との相違点であるといえる。村田豊氏の発想を構造の面から支えた構造設計士のいたことがわかる。

また、村田の関心のありそうな雑誌記事を収集したと思われる資料も存在する。寄贈者によれば、そうした情報収集業務を担当する人員が所内に配置されていたと聞いた。

4. 資料の描く建築事務所の姿と資料の利用方法

村田豊氏の活動期間は昭和16年から昭和62年とされている。本資料はその間に作成された資料であり、今回の整理は図面以外のものから読み取れたプロジェクトおよび、資料の形態と特徴について述べた。

資料の形態については、プロジェクトの写真、情報収集のためと推察される印刷物、発表済みの原稿、会議等への招待状、事務所運営に関わる書類、業務日誌等に大別できる。事務所運営に関わる書類や発表済み原稿などをさらに詳細に見ることで、村田豊氏の活動を具体的に描けると思われる。

また、この時期は図面を手書きで作成している。インターネットが普及する前の情報収集は紙媒体が大半であり、業務書類も紙である。写真の類もフィルムや紙焼き写真が多い。つまり年代により紙の質は異なるものの、紙は物理的な資料として残る。映像資料もビデオテープであり、模型も実際に作り上げる。

国内の建築事務所の調査を行ってはいないが、少なくとも図面や写真の作成器具と、作成されるものの質がパーソナルコンピュータの普及後、大きく変貌を遂げたことが実感できる。

資料を整理する上で、手書きの図面の作成経験のある世代が存命中に、利用目的なども含めた解説とともに保管することもアーカイブズ施設の役割ともいえる。

村田豊資料に限らず、資料は、対象の建造物等が非現存であれば、在りし日の姿を知ることができ、現存であれば維持管理の際に元資料となるため、実務資料としての価値も持つ。

5. まとめ

村田豊建築資料は、ひとまず公開できる目録を作成した段階である。図面は、令和３(2021)年夏季にアイテムレベルまで公開している。昨年度中に一定の作業を終えた図面以外の資料についても、精査を終え次第データベースに掲載することが望まれる。また、資料の画像についても、資料の状態を踏まえて作成していない一部を除き、令和３年度に作成を終えている。可能なものは順次収蔵資料検索データベースに掲載することで、一層、建築アーカイブズとしての役割に資するといえる。

最後に、今後、村田豊氏の業績や位置づけを、同氏の関係者、プロジェクトの関係者に聞き取りを行える間に、調査や研究が進められることを願う。

注

1 「村田豊　日本美術年鑑所載物故者記事」(東京文化財研究所)https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/9889.html (閲覧日 2022-05-10)。
2 訂正とお詫びのとおり。
3 村田あが氏より。

訂正とお詫び

紀要第１号の「建築評論家の川添登との親交から、キャンティの設計も担当した」は、「レストランキャンティの当時の経営者である川添浩史氏との親交から、キャンティの設計も担当した」に訂正し、関係の皆様に深くお詫びします。

謝辞

本報告を作成するに当たり、当時の様子や村田豊氏について寄贈者である村田あが氏（跡見学園女子大学教授）に伺いましたことを記し、感謝の意を表明します。また、整理は、小澤梓氏（埼玉県立文書館）、稲垣晴夏氏（国立映画アーカイブ）、合同会社ＡＭＡＮＥにより行われたことを記します。特に小澤氏には、約２年、整理の中心を担っていただきました。

（2022年５月12日原稿受理）

表１　村田豊氏のプロジェクト一覧

※『村田豊の建築-同時代の空気構造と彼のオリジナリティ』（佐々木暢、2014年度東北大学大学院工学研究科修士論文）を基に作成し、令和4年2月28日までの整理資料目録を加筆した。

竣工／計画年	新規	収蔵	ファイル番号	プロジェクト名	備考†1
1952（昭和27年）		※	7-5	寺田邸	
1959（昭和34年）		※	7-25	岡田邸	木造応力外皮屋根
		※	7-19	エスゲラ箱根別荘案	
1960（昭和35年）				長崎印刷埼玉工場	
				チュニス首都計画国際コンペ案	
		※	7-48, 7-24, 7-1, 7-21, 7-5	レストランキャンティ内装	S40
		※	7-3, 7-25	鳥羽ホテル計画案	
1961（昭和36年）		※	7-2, 7-18, 7-25, 7-47	高橋邸	
		※	7-2	三浦邸	
		※	7-3	賛育会病院	S37
1962（昭和37年）		※	7-4, 7-5, 7-25, 7-47	レストラン常盤家	
				ポール・ネロ邸案	
		※	7-5, 7-6, 7-25,	日本鉱業給油所案	S36
		※	7-7, 7-17,	千葉県知事公邸改装	
				村田宗家の墓	
	※	※	7-8,	すきやき「神戸」	
1963（昭和38年）	※	※	7-3	REZ de-CHAUSEE	
		※	7-8, 7-25, 7-49	絵画堂ギャラリー	
				ラジオ関西改装案	
		※	7-9	龍村織物美術館東京支店改築	
1964（昭和39年）		※	7-12, 7-25, 7-47	寺中邸	吊屋根 S38
		※	7-1, 7-25	レストランキャンティ増築	
		※	7-11, 7-2, 7-25	保坂邸	吊屋根 S38
		※	7-10, 7-25	乃木坂マンション案	
1965（昭和40年）	※	※	7-1, 7-21, 7-47, 7-33, 7-48, 7-33, 7-32, 7-5	Project pour Le Coin de Bourigue au Grands Mazons Matuzakaya	
		※	7-2, 7-5	クラブ・シャングリラ内装	
				日本炭素ビル案	
		※	7-14, 7-25	光輪閣将来計画案	
		※	7-5, 7-17, 7-25	ソニービル内装工事（ベルベデーレ内装）	
		※	7-15	荻野邸	
1966（昭和41年）		※	7-30	福澤邸	
		※	7-16, 7-47, 7-49, 7-25	三井邸	吊屋根
		※	7-17	ベルベデーレ内装	照明器具は、「今中クミ子ルバー図」としても収蔵(M.A.)
		※	7-19, 7-25, 7-21	HAKONE	狸穴CHIANTISSIMO
	※	※	7-47	鳥羽市開発計画案 鳥羽市観光商業地域造成診断報告書第2編	1966-2
1967（昭和42年）				ビニシェル計画案	
				フォンタナ内装	トリコット構造
		※	7-61	クラブ・トベ	
		※	7-8	ラ・モール内装	
		※	7-5, 7-30	パブ・カーディナル	棚
		※	7-19, 7-25	三好箱根別邸案	吊屋根
		※	7-20	新関邸（案）	S52
				万博本部ビル設計競技審査員	
		※	7-18, 7-48, 7-5	シャンゼリゼ内装工事	
		※	7-20	佐渡改築 佐渡雲清山庫裏本屋改築	
	※	※	7-33, 7-32	上野・松坂屋キャンティ	42.3.24 42.4.6 46.1.21
1968（昭和43年）		※	7-17	加納邸マンション内装	トリコット構造
		※	7-1, 7-46	ブティック・ベビードール内装	
1970（昭和45年）		※	7-18, 7-2, 7-21, 7-48, 7-23	クラブ花内装	
		※	7-26	亜鉛鉄板コンペ	
		※	7-13, 7-25	**日本万国博覧会富士グループパビリオン**	空気膜構造
		※	7-13, 7-50, 7-55, 7-47, 7-25, 7-17	**日本万国博覧会電力館水上劇場**	空気膜構造 S44
		※	7-13, 7-21, 7-22, 7-25, 7-30	渡辺邸	
		※	7-21, 7-48, 7-5	キャンティ名古屋松坂屋本店新館８階レストラン	
		※	7-2, 7-18, 7-21	クラブニューハナ内装	
				パーラー羅甸内装	
				サンジェルマン内装	
1971（昭和46年）		※	7-27	パリポンピドーセンター国際コンペ案	引張構造
		※	7-2	村田邸計画案	
		※	7-28	箱根コンペ案	
	※	※	7-8, 7-9	伊勢丹デパート地下鉄連絡階段拡張計画案	

竣工／計画年	新規	収蔵	ファイル番号	プロジェクト名	備考
1972（昭和47年）	※	※	7-17, 7-47, 7-25	PNEUMATIC STRUCTURE	
		※	7-29	ソビエトロシア青少年スポーツ施設案	空気構造
	※	※	7-21, 7-25, 7-29	水泳場＋アイススケート場	
				海洋博ステンレス二重膜空気構造案	
		※	7-22, 7-25	宮田邸計画案	
		（※）		ジャクラ計画案	
		※	7-2, 7-22, 7-25, 7-21	クラーク別邸 倉久氏別邸	
1973（昭和48年）		※	7-1, 7-21, 7-24	キャンティ赤坂店内装	
		※	7-30	広橋医院	吊構造
				空気仮枠FRP量産住宅案	
		※	7-18, 7-31, 7-47, 7-33, 7-21	上杉邸	吊構造
	※	※	7-45, 7-17, 7-25	テニスコート	S46
1975（昭和50年）		※	7-21	原宿のビル計画	吊構造
		※	7-38	永野邸（案）	
		※	7-30, 7-327-33, 7-47	沖縄海洋博覧会芙蓉グループパビリオン	
				吊構造による小学校建築案	
		（※）		クラブシャトレ	S40
1976（昭和51年）		※	7-46	網膜式空気構造開発	S53
		※	7-21	村井邸	
		※	7-54, 7-57, 7-58, 7-59	M式水耕研究所用空気構造温室	
		※	7-17	三重県　養鰻池用空気構造	
		※	7-25, 7-44	籾山クラブ計画案	
	※	※	7-21	CAF_ LATIN HIROSHIMA	
	※	※	7-21	CAF_ LATIN CHIBA	
	※	※	7-17	松岡産業用鰻エアーハウス	
	※	※	7-21	日野市高幡台スポーツグランド管理棟新築工事試案	51.4.7, 52.1.19, 52.2.7
	※	※	7-21	銀座羅蜀	51.5.26
	※	※	7-17	PNEUMATIC HYDROPONIC GREEN-HOUSE in NAGOYA	
	※	※	7-17	グリーンウッドPNEU	
	※	※	7-17	大林組リヤドニューマチックグリーンハウス（案）	
1977（昭和52年）		※	7-21,	持田邸	
				レストランベルベデーレ吉祥寺店内装	
		※	7-17	箱根小涌園子供村「空気のお山」	
	※	※	7-17, 7-22	箱根小涌園プールサイド	
		※	7-39, 7-18, 7-31, 7-52	辻口邸	吊構造 不明
	※	※	7-21	日野市児童館試案	
	※	※	7-21	広島駅ビル2F羅蜀改装工事	
	※	※	7-17	PNEUMATIC HILL NO.7	
	※	※	7-17	農業用PNEUMATIC HOUSE NO.4	
	※	※	7-22, 7-17	小涌園PNEUMATIC HILL	
		※	7-19	箱根別荘	
1978（昭和53年）				芦屋の吊構造ビル案	
		（※）		神戸垂水中学校プール空気構造上屋	S52
				名鉄スーパーマーケット屋上プール空気構造上屋	
	※	※	7-19, 7-21	HAKONE新築工事	
	※	※	7-17	黄桜酒造PNEU	
		※	7-45	40m x 40m TENT プール 家庭用プールPNEU	
	※	※	7-17	アラビアPNEU（案）	53.4.28
	※	※	7-49	グリーンウッドテニスランチ 空気構造屋内テニス場	53.5.25
1979（昭和54年）		※	7-19, 7-25	箱根三好別邸	
				針生邸	
				神戸神陵台、同王塚台中学校プール空気構造上屋	
				名古屋家具移動展示用空気構造	
				青山ビラ・モデルナ　中目黒	二重膜空気構造
				青山表参道ビル屋上実験農場用空気構造	
				北海道上の国町・湯の町町営プール空気構造上屋	
	※	※	7-19, 7-21	HAKONE新築工事	
	※	※	7-17	辻学園PNEU	
	※	※	7-17	玉川高島屋展示空気構造	
	※	※	7-45, 7-17	〔テニスコート〕	54.1.11
	※	※	7-45	テニスコート三面用空気構造	54.5.14
	※	※	7-45	プールPNEU(竜奥興業のもう一つのプール)	54.12.5

竣工／計画年	新規	収蔵	ファイル番号	プロジェクト名	備考
1980（昭和55年）				岐阜県多治見高校プール空気構造上屋	
				名古屋近郊釣り堀空気構造上屋	
				木曽福島町味噌倉空気構造	
		※	7-22	箱根小涌園子供村施設	
	※	※	7-30	正ちゃん池 PNEU	55.8.28
	※	※	7-45	小田急成城テニスガーデン	55.8.4
	※	※	7-45	プールドーム(日本アルミ カタログ用)	55.2.20
1981（昭和56年）		※	7-42, 7-44, 7-41, 7-43	柴田邸案	吊構造
				サーカステント案	サスペンション膜構造
				宮崎県立工業高校プール空気構造上屋	
		（※）		沖縄パシフィックホテルプール空気構造上屋	
				日本大学横芝セミナーハウスプール空気構造上屋	
		（※）		名古屋フラワーショー用空気構造	管圧式
		※	7-40, 7-30, 7-47, 7-49, 7-32, 7-35, 7-36, 7-45, 7-55, 7-34, 7-37, 7-25, 7-33, 7-5	神戸ポートピア博覧会芙蓉グループパビリオン	
				空気膜構造計画案	
				空気膜構造	
	※	※	7-45	慶応大学50M+30M プールPNEU	56.12.4
1982（昭和57年）		※	7-9	新宿伊勢丹デパート屋上遊具	空気構造 S50
		※	72	池袋サンシャインシティ屋上遊具「胎内くぐり」	空気構造
				日本橋三越デパート屋上空気構造及びグリッドシェル案	
				EXPO' 85 農林水産館案及び芙蓉館案	空気構造
				ラ・ヴィレットコンペ案	
		※	7-18, 7-25, 7-10	「長生きする家」コンペ案	1982
	※	※	7-45	POOL PNEU No 82709	57.7.9
	※	※	7-45	橋本高校	57.9.29
1983（昭和58年）				群馬スイミングスクール空気構造	
				ディズニーランド用空気構造案	
				新潟博覧会会場全域を覆う空気構造案	
				ミサワホーム研究所及び同伊豆実験農場用空気構造案	
		（※）		東京国立競技場テニスコート及び駐車場空気構造案	
	※	※	7-45	草津町プールPNEW No. 2	58.2.4
	※	※	7-45	草津町プールPNEW No. 1	58.2.4
1984（昭和59年）				高知黒潮博覧会ヤンマー館空気構造	
				栃木博覧会農業館空気構造	
				沖縄プール空気構造上屋	
		※	7-61	東京都三宅島阿古小・中学校体育館空気構造	
				鹿児島テクノフェア空気構造パビリオン	
1985（昭和60年）				新宿伊勢丹デパート屋上遊具「エアロトンネル」	空気構造
				太陽工業エアロジム（空気構造遊具）試作	
		※	7-54	ダイキン、テニスコート用空気構造案	
				太陽工業、間伐材によるジャングルジム	
	（※）	（※）		YOKOTA	米軍横田基地内プール 製造はM式水耕研究所 1985年2月15日
	（※）	（※）		名山小学校屋上プール	製造はM式水耕研究所 1985年2月15日
	※	※	7-45	神社	1985.8.8
	※	※	7-46	村田式網膜空気構造CABLE NET 交点金物	1985 8 31
1986（昭和61年）				熊本博覧会空気構造水耕パビリオン案	
				φ 300m 空気膜構造案	
1987（昭和62年）		※	7-46	国際蘭博覧会のための2棟のパビリオン	
	※	※	7-54	新潟市役所跡地建設計画（案）	9月1日

				家具等図面	
		※	7-30	江崎邸内扉	
				ミロワール	
				三角テーブル	
		※	7-44	田中邸	
				内装	
				設備	
				トヨワケ邸計画案	
		※	7-13, 7-47, 7-25	住宅計画案 試作組立住宅	
				鉄骨造住宅コンペ案	
				佐藤邸計画案	
				プレハブ住宅案	
				プロジェクト不明	
	※		7-1	川添邸	
	※		7-5	全自動水耕空気構造農園	
	※		7-5, 7-25	ONCOURS INTERNATIONAL- PARC DE LA VILLETTE PARIS	
	※		7-17	中村風船乗り	
	※		7-17	Alpha cubic	アパレル会社のブティック、オフィス(M.A.)
	※		7-21	キャンテー水耕	
	※		7-21, 7-25	JACRA 伊豆工場	
	※		7-21	鳥の立花	
	※		7-21	CAF_ LATIN TOKUYAMA	
	※		7-21	La Maijoin Latine a TOKUYAMA	
	※		7-25	ボーリング場	
	※		7-21	日本橋羅蜀	
	※		7-22, 7-25	宮□邸	
	※		7-45	〔プール〕	
	※		7-45	網膜空気構造水泳場計画	
	※		7-47	M 氏邸	
	※		7-47	M さんの住まい	
	※		7-47	FRP Sandwich Domes Shaped on the Shallowest Possible Pneumatic Forms	
	※		7-25, 7-47	PNEU POLI-CLIMATES	
	※		7-49	Air Beam	
	※		7-51	パルコ	
	※		7-51	Place de la Defence	
	※		7-51	Munic	大阪万博電力館水上劇場
	※		7-51	電事連	
	※		7-51	ヤマハ ニューマチック	
	※		7-52	〔島谷邸〕	
	※		7-52	〔東京日仏学院〕	
	※		7-53	GANGUN GOZUMEL ISLA MUJERES	
	※		7-53	岡本邸	
	※		7-55	本□広場	1968
	※		7-57, 7-58	茶農空気	
	※		7-59	小田急御殿場スケートリンク網膜空気構造	
	※		7-61	EXPO'80筑波科学技術博農業館試案	1972.4.29
			7-44	富月寺開山堂	
		†2		永田(鐵佐)邸	(M.A.)
	†3			半田	半田富久氏の揺れる石の彫刻の技術的な相談に乗ったもの（M.A）

†1　S40は昭和40年を示す。なお、図面に記載されていた年を記しているため、既存研究と齟齬がある。
†2　収蔵資料ではないが、村田あが氏の指摘によりプロジェクト一覧に追記した。
†3　プロジェクトではないが、図面に準じるものが収蔵されているため加えている。

［資料紹介］

国立近現代建築資料館が所蔵する 菊竹清訓設計の日本政府建立戦没者慰霊碑の図面群について

戸田 穣*、加藤 直子**

On the Drawings of the War Memorials erected by the Japanese Government, designed by KIKUTAKE Kiyonori in NAMA Archives

TODA Jo, KATO Naoko

Since 1971, the Japanese government has erected 14 war memorials overseas. Eleven of these sites were designed by KIKUTAKE Kiyonori. NAMA (National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs), received the donation of these materials in 2019 through the kindness of the bereaved families. This report introduces this new collection.

キーワード：慰霊、菊竹清訓

1. はじめに
―菊竹清訓と日本政府建立戦没者慰霊碑―

文化庁国立近現代建築資料館（以下「建築資料館」）では、2013年開館当初より、「顕著に時代を画した建築家」にかかる収集対象資料として、建築家菊竹清訓（1928–2011）に関する建築資料の収集を進め、「菊竹清訓建築設計資料」としてアーカイブ化に取り組んでいる。平成26（2014）年10月には「建築のこころ　アーカイブにみる菊竹清訓展」を開催した。令和元（2019）年には1960年代および慰霊碑関連の図面資料が収蔵され、現在は1970年代前半の図面資料および慰霊碑関連の文書資料等の資料調査を進めている。本稿ではこれらのうち、日本政府建立戦没者慰霊碑の図面群について、その概要と各慰霊碑ごとに資料の構成を紹介するものである。

日本政府は、昭和46（1971）年以降に硫黄島と海外14ヶ所に戦没者慰霊碑を建立した。谷口吉郎設計による最初期の3基と、横河建築設計事務所設計になる最近の《日本人死亡者慰霊碑》を除く11基を菊竹清訓が設計している（菊竹 1990）。この事業では、碑＝モニュメントそのものだけでなく、メモリアル・パークとして敷地全体の整備も同時に計画された。ただし事業規模は大きくはなく、菊竹の仕事として必ずしも注目を集めてきたわけではない（遠藤他 2017）。しかしこれらの施設は、厚生労働省による援護施策における二大事業 ―― 遺骨収集と現地への慰霊巡拝 ―― の重要な拠点であり、また戦没者遺族と旧戦域現地の戦争犠牲者の交流の場としても機能している。建築家のキャリアにおいてだけでなく、国の歴史においても重要なモニュメントだといえるだろう。

2. 資料の構成

本資料は、フォンド「菊竹清訓建築設計資料」の一部であり一連の資料番号を付されている。寄贈時にはプラスチックの図面筒23本に収められており、これらの図面筒を一資料単位とみなしてフォンドの下位にファイルとして位置づけている（該当する資料番号は15-358～370, 15-373～376, 15-279, 15-405, 15-415～416, 15-447, 15-521）。整理作業においては、図面筒から資料を取り出し、中性紙保存箱に移してフラットニングした状態で保存した。その上で、一つ一つのアイテムの資料情報から目録を作成した。本資料を構成するのは、菊竹が設計した11基の慰霊碑のうち10基の図面群であり、総点数は355点である（表1）。

3. 各慰霊碑について

それでは10基の慰霊碑資料群について竣工年順に紹介していく。

《南太平洋戦没者の碑》（1980年9月30日竣工）は、1979年7月1日の日付を中心としたふたつの図面群からなる（NAMA15-360, NAMA15-362）。特記仕様書から工事図、配筋図、伏図・軸組図など詳細図まで29点（内6点は重複する図面）が揃う（図1：NAMA15-360-20「伏図　軸組図　背筋詳細図」）。

《ビルマ平和記念の碑》（1981年3月28日竣工）は、ふたつのファイル計24点からなる（資料番号15-358～359）。日付については二つあり1979年2月21日の段階の図面においては「BRUMA PEACE MEMORIAL PARK」、1979年7月1日では「ビルマ戦没者慰霊碑」となる。中心となるのは後者の図面19点である。厚生労働省の説

*昭和女子大学 専任講師, 博士（工学）　**国立近現代建築資料館 研究補佐員, 博士（学術）

表 1　日本に送付された図面群

建立年	慰霊碑名	国・所在地	資料番号
1980	南太平洋戦没者の碑	パプアニューギニア独立国 東ニューブリテン州ラバウル市	15-360 15-362
1981	ビルマ平和記念の碑	ミャンマー連邦共和国 ヤンゴン市	15-358 15-359
1981	ニューギニア戦没者の碑	パプアニューギニア独立国 東セピック州ウエワク市	15-361 15-363
1982	ボルネオ戦没者の碑	マレーシア ラブアン市	15-365 15-366 15-367
1984	東太平洋戦没者の碑	マーシャル諸島共和国 マジュロ島マジュロ	15-368 15-369
1985	西太平洋戦没者の碑	パラオ共和国 ペリリュー州ペリリュー島	
1987	北太平洋戦没者の碑	アメリカ合衆国アラスカ州 アッツ島（アリューシャン列島）	15-370 15-447
1994	第二次世界大戦慰霊碑	インドネシア共和国 パプア州ビアク島パライ	15-374 15-375
1994	インド平和記念碑	インド共和国マニプール州 インパール市ロクパチン	15-379 15-376
1995	日本人死亡者慰霊碑	ロシア連邦ハバロフスク地方 ハバロフスク市	15-405 15-416
1996	樺太・千島戦没者慰霊碑	ロシア連邦 サハリン州（樺太）スミルヌイフ	15-415 15-373
	戦没者慰霊碑	フィリピン クラーク地区	15-364 15-521

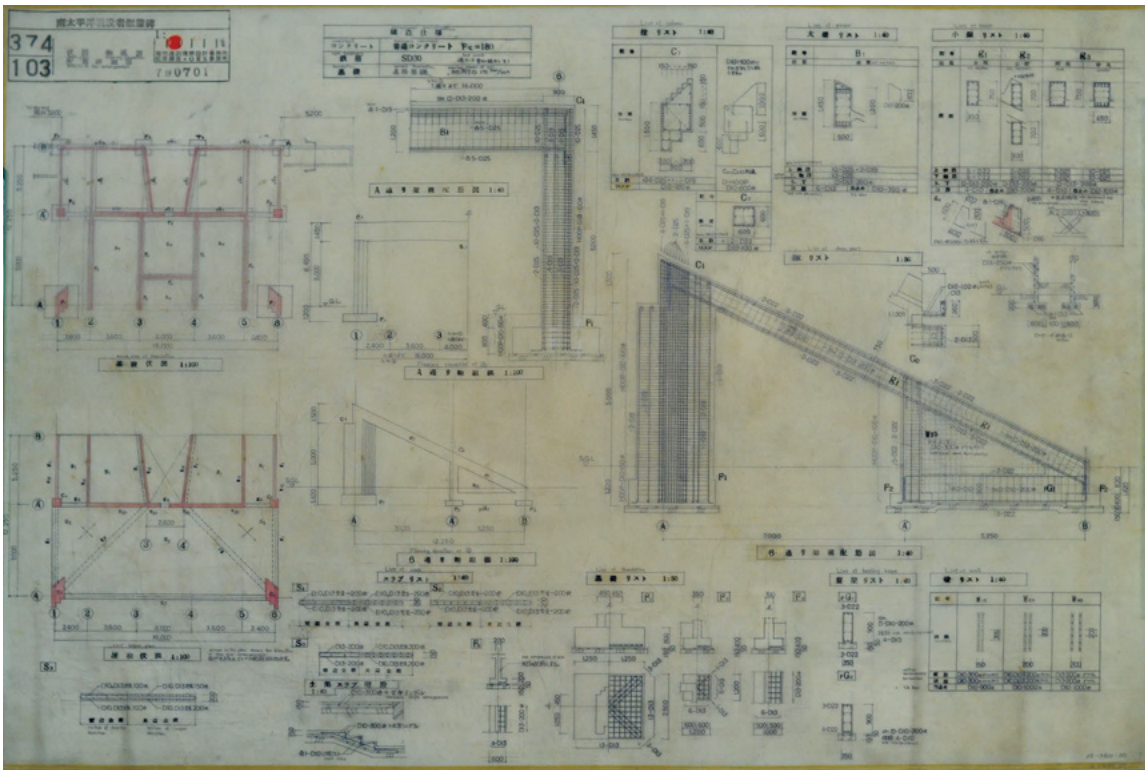


図 1　NAMA15-360-20「伏図　軸組図　背筋詳細図」

明によれば、この事業においては、設計・施工はビルマ側のラングーン開発委員会が行い、菊竹清訓建築設計事務所は「協力」と位置づけられている。また、本慰霊碑ははじめ日本人墓地に建設されたが、のちにヤンゴン市により別の日本人墓地に移転されている。

《ニューギニア戦没者の碑》（1981年9月16日竣工）は、ふたつのファイル（資料番号15-361, 15-363）にまたがって計57点の資料からなる。資料番号15-363は、15-361の青焼きが主である。図面のほとんどは「PAPUA NU GINI 戦没者慰霊碑（仮称）」のタイトルをもち11月6日、11月24日、12月19日の日付をもつ（図2：15-361-1）。これらは基本的に白焼きであるが、鉛筆書きの「WEWAK」〔ウエワク〕というタイトルの図面が5点あり、そのうちのひとつの日付は1980年11月24日となっている。これら鉛筆によるエスキスでは、竣工記念式典の座席配置の検討図があり、式典における光の効果を検討していることが伺える。また上述の図2とは、碑とプラザの位置関係に変化がみられる（図3：15-363-26）。

《ボルネオ戦没者の碑》（1982年9月30日竣工）は三つのファイルからなる計22点（15-365～367）。最も古い日付は1981年3月25日で、当初は塔状の碑を計画していた。碑の意匠については複数の案が検討されたことが

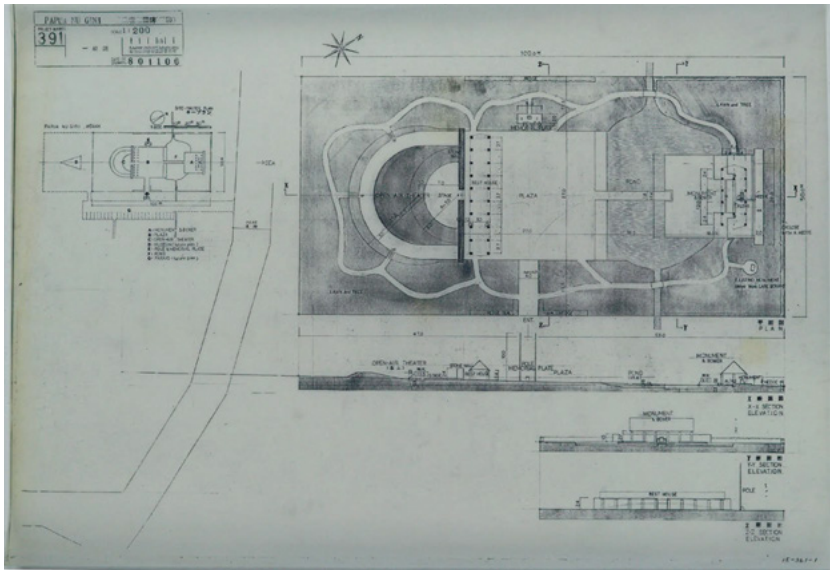


図2　15-361-1

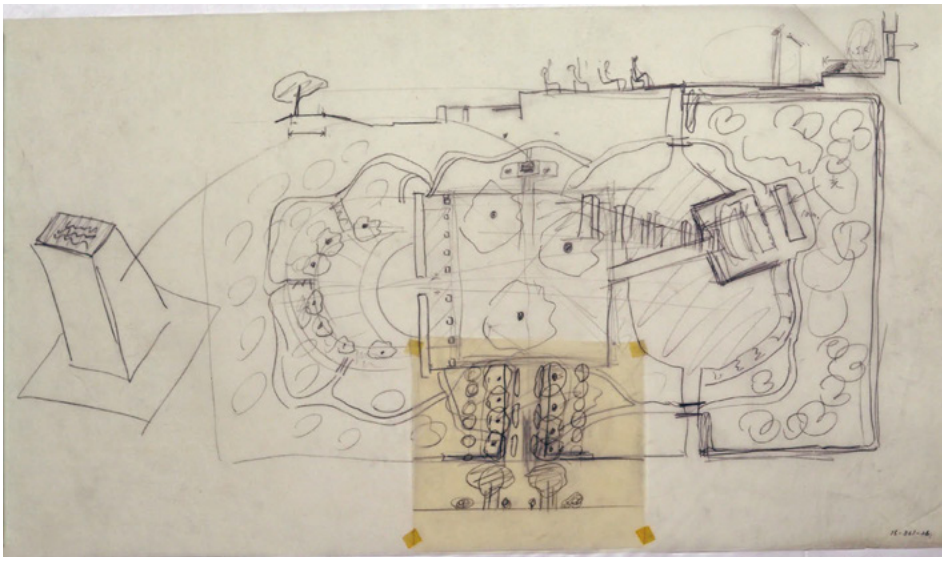


図3　15-363-26

わかるが、配置計画についても1983年9月14日付の実施案（図4：15-365-3）以外に3案が図面として残されている。また竣工後の1983年9月20日から、この規模の公園からするとかなり立派な便所の設計案も複数残されている。慰霊碑と公園という計画の中では数少ない建物を設計する機会をとらえて意欲的に取り組んでいることが伺える。

《東太平洋戦没者の碑》（1974年3月16日竣工）はふたつのファイルからなる計55点（15-368～369）。エスキスの図面なども含み、戦没者慰霊碑資料の中でもヴァラエティに富むファイルとなっている。1983年5月25日にA案（図5：15-368-3）を経てから、同6月30日の実施案の配置図まで1か月で設計が進んだが、その後もさらに変更が重ねられて最終案に至ったことがわかる。

《北太平洋戦没者の碑》（1987年7月1日竣工）はふたつのファイル計16点の資料からなるが（15-370, 15-447）、資料番号15-447は尾川宏制作になる碑文原寸と題字のエスキスであり、図面資料は資料番号15-370の8点にすぎない。いずれも1987年5月30日の日付をもち特記仕様書1点と施工図面6点、原寸の変更図1点である。

さらに時代を下って、1990年代に実現した四つの計画については資料点数には多寡がある。ほぼ同じ時期

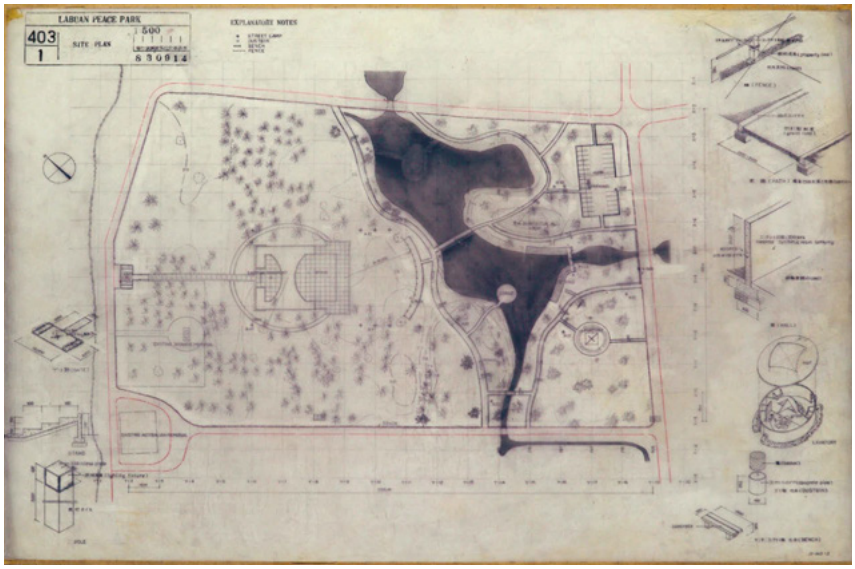


図4　15-365-3

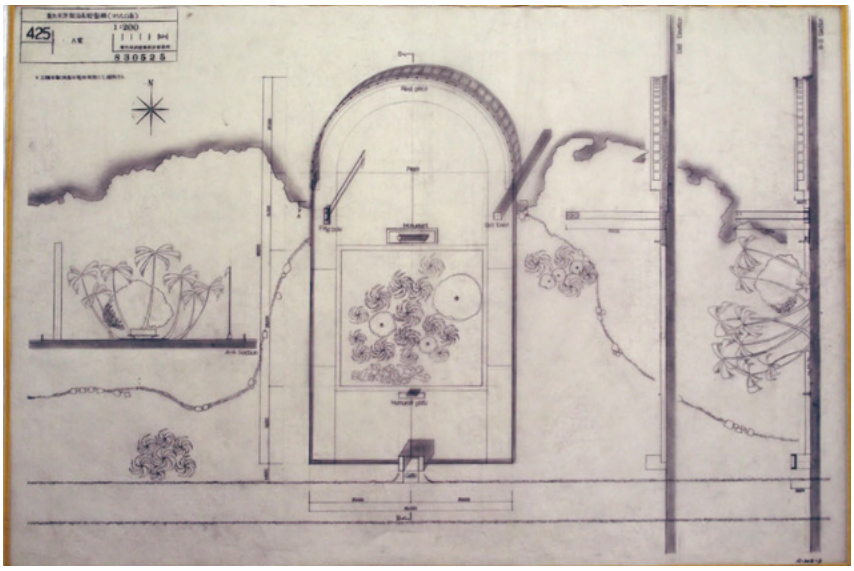


図5　15-368-3

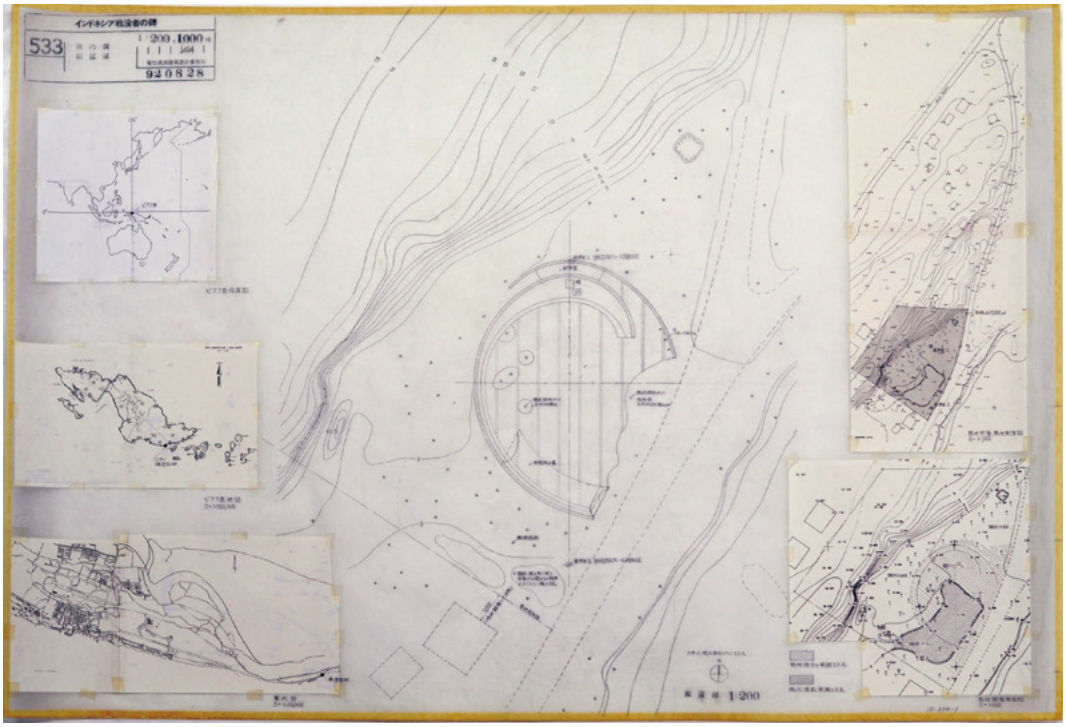


図6　15-374-1

に竣工した《第二次世界大戦慰霊碑》(1994年3月24日竣工)と《インド平和記念碑》(1994年3月25日竣工)では、前者が三つのファイルからなる資料56点(15-374, 375, 379)、後者がふたつのファイルからなる資料18点(15-376, 15-405)で構成されている。前者については、慰霊碑や全体の遺配置図(図6：15-374-1)だけでなく、納骨像、休憩所、碑文の取り付け詳細などまで、広場を取り巻く一式の図面が残されている。一方で、後者も点数は多くないものの一通りの図面を揃えており、その計画について知ることができる。後期の仕事においては、途中のエスキスにかかる資料が少ない傾向にある。同じくロシア連邦にて実現したふたつの慰霊碑、ハバロフスクに実現した《日本人死亡者慰霊碑》(1995年7月31日竣工)と、サハリンに実現した《樺太・千島戦没者慰霊碑》(1996年11月1日竣工)は、前者がはふたつのファイルからなる資料51点、後者が1ファイル14点の資料で構成されている。これも後者については点数が少ないものの、実施設計図から詳細図、伏図・軸組図を含む。

4. 今後の課題

4.1. 全体の傾向

11基のうちの一つ、昭和60(1985)年建立の《西太平洋戦没者の碑》(パラオ共和国ペリリュー州ペリリュー島)については本資料群には含まれていない。推察するに《西太平洋戦没者の碑》についてはとりわけ別置して保管されていたなど、寄贈者の手元に残っている可能性が考えられる。今後の追跡調査が待たれる。

また、それ以外にも詳細不明の資料がある。資料番号15-521の図面群には、「フィリピン クラーク地区 戦没者慰霊碑 REST HOUSE」(図9：15-521-6)というタイトルの図面1点が確認される。フィリピンに建立された政府建立慰霊碑としては谷口吉郎設計の《比島戦没者の碑》(1973, ラグナ州カリラヤ)が知られるが、クラーク地区はそれとは異なる地域である。プロジェクト名称が記載されている図面は同じ図面筒の中ではこれ一点だけであり、それ以外には敷地面積2分の1エーカーに計画された慰霊碑の配置図・平面図・断面図・立面図を含む「一般図」が5点確認されるとともに、敷地面積6エーカーに計画された異なる意匠の慰霊碑の図面が3点確認されている。後者についてはNAMA番号15-364の資料にも、透視図2点、平面図・立面図2点、配置図1点が確認される。これら二つの計画と「フィリピン クラーク地区 戦没者慰霊碑」の関係についても、今後調査が必要である。

本資料を構成するのは主として図面群だが、慰霊碑および慰霊空間は、施設としての社会的な、また歴史的な性格上、意匠や空間構成の観点だけでなく、建設の経

緯や、現地における施設計画、またその後の維持管理などについても考察する必要があるだろう。そのため、これらの事業に係る文書資料についても精査することが望まれる。従来、建築資料は意匠の観点、またその展示価値から図面を中心とした図像資料に関心を傾けていたきらいがある。今後は、より多様な資料へと広く視野を開くことが、社会の中での建築の役割を理解する上で必要となるだろう。

参考文献

1 「PACIFIC PEACE MONUMENT 1980–1987 太平洋平和記念碑」『菊竹清訓作品集 2』求龍堂, 1990
2 遠藤勝勧, 山崎一彦, 市居博, 古賀繁雄, みぞぶちかずま「菊竹清訓と11の戦没者慰霊碑」日本建築学会『建築雑誌』1700号, 2017年7月号

謝辞

本報告執筆に際して、菊竹清訓建築設計資料の寄贈者であるスミス睦子氏、菊竹雪氏、菊竹三訓氏には、本図面資料のほかにも関連する資料の閲覧の機会をいただきました。また菊竹清訓建築設計事務所の元所員である鹿田健一朗氏、塚本二朗氏には資料調査においてご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。

本報告はJSPS科研費 JP17K06758の助成を受けたものです。
This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number JP17K06758

（2022年5月11日原稿受理）

［プロジェクト解説］

「丹下健三 1938–1970　戦前からオリンピック・万博まで」展開催記録
―アーカイブズ展示の試み―

木下紗耶子*

A Report of the exhibition, “Tange Kenzo 1938–1970, From Pre-war period to Olympic Games and World Expo”:
Case Study of Exhibition from the Aspect of Archives

KINOSHITA Sayako

This paper is a report of the exhibition “Tange Kenzo 1938-1970, From Pre-war period to Olympic Games and World Expo” in 2021. The exhibition focused on the first half of the career of architect Tange and consisted of Sections, 1. War and Peace, 2. Modernity and Tradition, 3. Postwar Democracy and Government offices Architecture, 4. Challenge to Massive Space, 5. Designs in Information Society and High Economic Growth, and 6. Integration of the Five Keywords. There are approximately 170 pieces of materials on display. The exhibition was curated by Toyokawa Saikaku based on his research at NAMA, and the materials were selected from diverse collections. In this way, the exhibition was a case study in the disclosure of the architectural design process and the plurality of subjects involved in its creation, a characteristic of exhibitions using archival materials.

キーワード：建築アーカイブズ、展示企画、丹下健三
Architectural Archives, Curation, Tange Kenzo

1. はじめに：NAMA における展示活動

国立近現代建築資料館（以下、当館）は全国的な建築アーカイブズ・システムの構築を目的に、以下の事業を展開してきた。1）情報収集、2）資料の収集・保管、3）展示・教育普及、4）調査研究等である[1]。この4つの柱のなかでも、展示・教育普及の一環として建築資料の一般公開を通じて、より広く社会に近現代の建築資料および建築文化に触れる機会を提供するべく、当館では2013年の開館以来、年に2回の展覧会を開催してきた。展示活動は、他の3つの事業と密接に連携しており、館内での日常的な資料整理や調査、および館外協力者によるワーキンググループ体制での調査・研究の蓄積に基づくものである。

本稿の目的は2021年7月21日～10月10日に開催された展覧会「丹下健三 1938–1970　戦前からオリンピック・万博まで」展（以下、丹下展とする）を振り返りその開催記録を残すことである。筆者は2020年度に企画担当研究補佐員に着任した。本稿では、筆者が着任以降に資料調査や資料借用、展示設営等の業務に携わった立場から、経緯や展示内容を振り返り、丹下展の特徴やアーカイブズ展示の意義を考察する。

2. 展覧会開催の経緯

本展覧会は、2014～2016年に行われた丹下に関する建築資料の所在調査を元に組み立てられたものであり、丹下が大学を卒業した1938年から大阪万博が開催された1970年までの前半生の業績について、関連資料の網羅的な調査を踏まえて紹介するものであった。展覧会に先立つ調査および展覧会のキュレーションは、豊川斎赫氏（千葉大学大学院准教授）に担っていただき、また千葉大学および勝原基貴氏（千葉大学特任研究員、現・金沢工業大学講師）に制作協力をいただいた。

展覧会は、当初2020年7月からの開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響による東京オリンピックの延期に伴い、4月に1年間の開催延期が決定された。これを受け、2020年度は豊川氏を中心に展覧会の調査・研究を継続し、内容を一層充実させることにあてられた。2020年度の調査では、写真家・石元泰博との交流を通じた丹下による桂離宮理解についての研究、1950年代に丹下研究室の研究生として成

*元国立近現代建築資料館研究補佐員、練馬区立美術館学芸員、学術修士

城の自邸や旧東京都庁舎等に携わった田良島昭の旧蔵資料の調査、そして雑誌『新建築』の編集長として戦後の建築批評を牽引した川添登の旧蔵資料の調査が行われた。これらの調査に基づき、キュレーションは再構成された。また、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で会場での展示公開が不可能になった場合に備えてウェブコンテンツの拡充の準備も進められた。

3. 展覧会概要

3.1. 展示構成

展示は全6セクションで構成された。1から5セクションで丹下の建築活動に関するキーワードが示され、セクション6ではそれらを統合する作品としての国立代々木競技場が紹介された。展示資料は図面、スケッチ、写真、映像、模型、文書、雑誌、丹下健三旧蔵の個人資料などを含む約170点（一部展示替えを含む）であり、同時代資料とともに、複製や近年制作された参考資料を織り交ぜた展示であった（表1）。資料の所蔵元は、内田道子アーカイブ、高知県立美術館、東京大学生産技術研究所川口健一研究室、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻デジタルミュージアム準備室、千葉大学豊川斎赫研究室、東京造形大学、秩父宮記念スポーツ博物館・図書館、香川県立ミュージアム、ハーバード大学デザイン大学院フランシス・ローブ図書館および個人所蔵者等、多岐にわたる。

以下、各セクションのタイトルと概要、主な展示プロジェクトを記載する。各セクションの概要は豊川氏の解説文より抜粋、要約したものであり、詳細は展覧会に合せて制作された図録を参照されたい。

セクション1：戦争と平和

丹下は、大正時代に生まれ20代後半から30代前半に第二次世界大戦を経験したが、戦前・戦後を問わず、戦没者と如何に向き合うかを設計上でのテーマとした。そして、戦争を生き延びた市民と戦争で亡くなった人々を結び付ける建築を模索し続けた。

展示プロジェクト
- 大東亜建設忠霊神域計画（1942）
- 広島平和記念公園及び記念館（1952）
- 戦没学徒若人の広場（1966）
- 丹下健三「都市計画」講義ノート（大歳幹夫記）（1952）

セクション2：近代と伝統

丹下はル・コルビュジエのソヴィエト・パレスなどを読み解くことで近代建築を理解し、卒業設計「芸術の館」に反映した。また、ワルター・グロピウスや石元泰博らと共に写真集『桂』（1960）を編集、出版するなかで、丹下は伝統建築に関する独自の理解を発展させた。丹下自身が設計した成城の自邸では伝統建築の要素を併せ持つ近代建築が実現された。

展示プロジェクト
- 卒業設計「芸術の館」（1938）
- 成城の自邸（1953）
- 成城の自邸増改築案（1964頃）
- 『桂』（1960）
- 墨会館（1955）
- 旧草月会館（1958）

セクション3：戦後民主主義と庁舎建築

庁舎建築においては、都心部（都市のコア）に多くの市民が集い、政治参加を体感できるような戦後民主主義を具現化するデザインが目指された。丹下は、労働者が都心部に集まることを前提に、彼らが快適に働き、過ごせる都市のコアと庁舎を一体化することを目指し、都市と建築を結び付けることを試みた。

展示プロジェクト
- 旧東京都庁舎（1957）
- 香川県庁舎（1958）
- 今治市庁舎・公会堂（1958）

セクション4：大空間への挑戦

本セクションでは丹下が構造家・坪井善勝と組み、様々なシェル空間が実現されたプロセスを紹介した。当時高価であった鉄の使用を避け、また耐震性の問題を克服しながら、シェル構造による大胆な造形が目指された。

展示プロジェクト
- 平和記念広島カトリック聖堂（1948）
- 広島子供の家（1953）
- 愛媛県民館（1953）
- 駿府会館（1955）
- 香川県立体育館（1964）
- 東京カテドラル聖マリア大聖堂（1964）
- クウェートスポーツセンター計画（1970）

セクション5：高度経済成長と情報化社会への応答

高度経済成長や情報化という社会変化を捉えて、丹下は新たな都市ビジョンを構想した。そして丹下は線型の都市モデルとしての東京計画1960を発表し、都市や国土を客観的に把握するための国土開発地図を作成した。

展示プロジェクト
・静岡中心市街地区再開発計画「静岡計画」（1959）
・ボストン湾25000人のコミュニティ計画（1960）
・東京計画1960（1960）
・旧電通本社ビル（1967）
・山梨文化会館（1966）

セクション6：五つのキーワードの統合

丹下の最高傑作と評価される国立代々木競技場を紹介した。この競技場は1964年東京オリンピックのために建設され、2021年のオリンピック・パラリンピックでも使用された。セクション1から5までで紹介してきた丹下のデザイン手法は、国立代々木競技場で統合され、かつ現在も維持活用されている。

展示プロジェクト
・国立代々木競技場（1964）

3.2. 展覧会図録

丹下展に合わせて制作された図録は全84頁、各セクション解説と図版、関連論考が掲載された。当館では展覧会ごとに図録を制作している。丹下展図録もこれまでの形式を継承し、会期中は展示を見る際の補助資料であるとともに、会期後は、展覧会記録となるよう展示した資料や解説を可能な限り盛り込んでいる。なお丹下展図録は国立国会図書館に収蔵されており、閲覧可能である。

以下に丹下展図録における論考の執筆者とタイトルを掲載順に記す。

・加藤道夫（国立近現代建築資料館主任建築資料調査官／東京大学名誉教授）「丹下健三1938–1970　他者ル・コルビュジエを介したナショナル・プロジェクトへの道程」
・豊川斎赫「『丹下健三1938–1970』展に寄せて」
・川口健一（東京大学教授）「丹下健三＋坪井義勝そして川口衛」
・長谷川香（東京藝術大学講師）「国立代々木競技場の周辺環境とその歴史的文脈」

3.3. 展覧会特設ウェブサイト

2021年7月に公開した展覧会特設ウェブサイトは、展覧会の章構成および資料画像を掲載し、さまざまなきっかけでウェブサイトを訪れる幅広い人の興味・関心を喚起することが目指された。その一環として、展覧会を訪れることの難しい人に会場の雰囲気を伝えることを目的とし、各セクションごとの展示風景を撮影した会場紹介映像を制作・公開した。ウェブサイトは令和２年度末で一旦公開を停止したが、コンテンツの再公開を準備中である。

3.4. シンポジウム

シンポジウム「丹下健三（つなぐ）：二つの間で」は2021年9月9日に開催・収録された。シンポジウムは、国立代々木競技場に代表される丹下の功績を、人間的・歴史的・空間的他者を「つなぐ」という視点から再考しつつ、彼の建築作品を如何に「リヴィング・ヘリテッジ」として利活用し、後世に引き継ぐかについて議論するものである。プログラムは下記である。

① キーノートスピーチ
・丹下健三とル・コルビュジエの間で
加藤道夫（国立近現代建築資料館主任建築資料調査官／東京大学名誉教授）

② 講演
・時間のなかの丹下健三：20世紀と21世紀の間で
加藤耕一（東京大学教授）
・丹下健三をいかに未来につなぐのか
DOCOMOMOの活動を通して　共感力と想像力を喚起すること
渡邉研司（DOCOMOMO Japan 代表理事／東海大学教授）

③ ギャラリートーク
・広島平和記念公園及び資料館
・丹下研究室の作業風景
・卒業設計「芸術の館」
・香川県庁舎
・東京カテドラル聖マリア大聖堂
・山梨文化会館
・国立代々木競技場の周辺環境とその歴史的文脈
・クロージングトーク

シンポジウムは一般公開での開催を避け、収録映像をウェブサイトで公開した。なお映像は日本語と英語の2か国語で作成した。翻訳は、長谷川香氏とヴォイチュツケ・ロバート氏（国立西洋美術館リサーチフェロー）に担っていただいた。

4. 開催報告

丹下展の来場者数は14,179名（会期82日間）であった。この数値は当館の展覧会において「ル・コルビュジエ×日本」展（2015）、「安藤忠雄」展（2019）に次ぐものであり、丹下展を経て開館以来の来館者数は17万人を超えた。なお展覧会開幕より9月30日まで会期中のほとんどの期間が緊急事態宣言下であったことが、来館者数にマイナスの影響を及ぼしていることを付記しておく。

展覧会アンケートの結果からは、来場者の内訳では20代が2割を占め、来場のきっかけはSNSを含む口コミが5割を超えた。国立代々木競技場が改修工事を経て2020東京オリンピックでも活用され、注目されるとともに、2021年5月には国の重要文化財への指定が答申されるなど、丹下展会期前より、丹下の建築活動を歴史的に振り返る気運が高まっていた。これらのことから、丹下の活動を同時代的に知らない若い世代からも丹下の建築活動および丹下展に注目が寄せられたと考えられる。また、当館では初めてスマートフォンを使った音声ガイドを運用して好評を得た。

5. アーカイブズ展示としての丹下展

以下ではアーカイブズ展示としての丹下展の特徴を考察する。展示された建築プロジェクトのなかでもとりわけ多様な資料が紹介された成城の自邸を取り上げたい。展示資料は、設計時の検討図や写真、雑誌の紹介記事、室内に置かれていた丹下旧蔵の美術作品、そして後年の増改築案のスケッチ等であった。ここでは、竣工した建築を静的なものとして捉えるのではなく、設計段階から竣工後の暮らし、そして周辺環境の変化への対応等、時間の推移のなかで建築を一体的に捉える視点が提示された。

2020年度の調査では、田良島昭旧蔵資料に含まれる設計時の図面やスケッチの研究が進められ、図録に詳述されるとおり、丹下による成城の自邸を通じたモデュール研究と、平屋から2階建てにデザインが変化するプロセスが明らかにされた[2]。

アーカイブズの調査研究に基づく展示の特徴の一つ目は、成城の自邸の事例が示すように、設計や建設における創造のプロセスを、資料を通じて開示する点である。アーカイブズ資料は、完成作品としての建築にいたる手前において多様な可能性が検討されていたことを後世に伝え、設計者の様々な審級における判断の積み重ねを記録している。成城の自邸の設計のプロセスからは、展示で示されたように、丹下が目指す近代的な生活の在り様と伝統建築の工法を統合する試みを見出すことができる。

一般的に建築資料が作成されるのは、建築物の施工を目的とし、明確な用途を有するという意味において現用資料とされる[3]。それゆえ建築資料は建物が竣工した後に半現用になり、取り壊された場合には非現用となり、その経過にしたがって、保存の対象から外れていくことが多い。本展覧会に出陳された資料のなかにも、なかば破棄される状況から、個人や組織の尽力により今日に継承された資料が含まれる。成城の自邸のように現存しない建築について、われわれは残された建築資料を通じてのみ、建築を再構成することができるのであり、また、建築家の設計思考のプロセスや、協働した人物の存在とそこで行われただろう対話に接近していくことができる。このように建築資料は現用か否かによってのみだけでなく、建築家の思考に触れたり当時の建築文化の在り様を後世に伝えるという、資料に固有の歴史的・文化的価値においても評価され継承されていくべきものだと考えられる。

二つ目の特徴は建築が集団的に作られるという性質に由来する。先述のように本展覧会は多数の所蔵者から資料を借用することによって成立した。電子媒体での提供を含め、国内外から当館展示室に集められた資料を通じて可視化されたことは、丹下建築が、数多くの協働者によって集団的に練り上げられていったことである。言うならば、本展覧会は丹下を起点にして、坪井義勝、川口衞、横山不学、磯崎新、田良島昭、石元泰博、イサム・ノグチ、岡本太郎、川添登等の個人および、企業等、記載し尽くすことのできない数多くの人々による建築活動のネットワークに触れ、繋がっていくものであり、「集合知」としての丹下建築のありようを、多数の資料によって示した[4]。このような意味で展示を通じて、丹下建築の作者は多数化され、拡散されていた[5]。このことは次のように言い換えることができるだろう。すなわち、本展覧会は戦争や経済成長、オリンピックなどの国家的プロジェクト、伝統の再考や美術、出版文化、海外との交流、情報化社会等を担った多彩な人々が紡いだ近現代の建築文化を「丹下健三」という切り口から指し示すものであった。

建築を中心とするこれらのネットワークは、会場に集結させられた資料を通じて空間的に再構成された。それゆえ、展示室は、丹下と直接または間接に刺激し合いながらそれぞれの場所で取り組まれた人々の試行錯誤が鳴り響く場となった。このような制作プロセスと作者の複数性の開示はアーカイブズ展示の特質であると言えるだろう。

6. おわりに

丹下展では、多様な建築資料の会場展示や図録、そしてウェブサイトやシンポジウム等通じて丹下の設計思想や建設のプロセスが紹介された。また丹下と構造家や写真家等との協働にも光が当てられた。本稿では丹下展の企画概要を記し、そこにおけるアーカイブズと展示の関係について考察した。丹下展の制作プロセスがそうであったように、展示活動は収集業務・保管業務・調査研究といったアーカイブズ業務の蓄積の上に成り立つものである。これらは当館の内部で完結するものではなく寄贈者や館外の研究者との協力、および一般の利用者への資料公開を通じて蓄積されていくものであり、それによって資料の重層的な意義や価値は徐々に明らかになっていく。展覧会の際に展示公開の対象となる資料はアーカイブズのなかのごく一部にすぎない。しかし、その公開を通じて広く建築文化の振興、および理解増進に貢献できれば幸いである。

謝辞

本稿は、加藤道夫（国立近現代建築資料館主任建築資料調査官）、豊川斎赫（千葉大学准教授）、田良島哲（国立近現代建築資料館主任建築資料調査官）、山口俊浩（文化庁企画調整課）、小池周子（国立近現代建築資料館研究補佐員）の助言、協力による。ここに記して御礼申し上げる。

注

1 当館の事業の枠組みについては、当館公式ウェブサイトを参照。https://nama.bunka.go.jp/overview/operations.html（最終閲覧：2022.4.1）

2 豊川斎赫『丹下健三1938–1970　戦前からオリンピック・万博まで』展覧会カタログ、文化庁国立近現代建築資料館、2021、pp. 24–27

3 現用・非現用という資料管理学上の言葉遣いを建築資料に置き換えた際の意味と用法については、下記を参照。山口俊浩「編集後記　媒体の継承と活用に向けて」『建築雑誌』第125集1610号、日本建築学会、2010.11、p. 45

4 「集合知」の概念については、加藤道夫氏よりご教示いただいた。また、保坂健二朗氏が、展示では明示されなかった岸田日出刀の影響力に言及し、岸田が丹下の活動をかたち作る重要な一部であることを指摘した（保坂「丹下健三展の楽しみ方」『すばる』集英社、2021年9月、pp. 296–97）。

5 丹下建築を複数の作者によるものとする観点からの研究は、豊川斎赫『群像としての丹下研究室―戦後日本建築・都市史のメインストリーム―』（オーム社、2012年）で示されており、丹下展企画の重要な先行研究となっている。なお資料および展示に潜在するプロセスや作者の複数性については、ボリス・グロイス『アート・パワー』2017年、現代企画社、pp. 156、157、160、161。

（2022年5月13日原稿受理）

【展覧会】
丹下健三　1938–1970
　―戦前からオリンピック・万博まで―
会期：2021年7月21日（水）～10月10日（日）
主催：文化庁
協力：株式会社丹下都市建築設計、内田道子、公益財団法人東京都公園協会、独立行政法人日本芸術文化振興会、ワールド・モニュメント財団、アメリカン・エキスプレス、一般社団法人DOCOMOMO Japan、高知県立美術館
会場：文化庁国立近現代建築資料館
企画：文化庁国立近現代建築資料館
　加藤道夫（主任建築資料調査官）
　木下紗耶子（研究補佐員）
　小池周子（研究補佐員）
　清水信宏（研究補佐員）
・ゲストキュレーター
　豊川斎赫（千葉大学准教授）
・制作協力
　国立大学法人千葉大学
　豊川斎赫
　勝原基貴（千葉大学特任研究員）
・会場展示
　グラフィックデザイン：寺山祐策事務所
　特設ウェブサイト：大田暁雄
　会場設営：株式会社第一広房
　展示輸送：TERRADA ART ASSIST
　映像編集：岡篤郎
　資料修復：有限会社東京修復保存センター
　美術照明：竹下誠司（合同会社サムサラ）
　翻訳：株式会社フレーズクレーズ
　音声ガイド：株式会社ケイカ
　模型製作：諏佐遙也（ZOUZUO MODEL）

【図録】
発行・監修：文化庁
編集：文化庁国立近現代建築資料館
執筆協力：川口健一（東京大学生産技術研究所教授）
　長谷川香（東京藝術大学講師）
装丁デザイン：寺山祐策事務所
翻訳：株式会社フレーズクレーズ
資料撮影：佐治康生、坂本敦宏
印刷・製本：株式会社東京印書館

表1　丹下展出品リスト

文化庁 国立近現代建築資料館
令和3年度企画展
丹下健三 1938–1970：出品リスト

丹下健三
TANGE KENZO
戦前からオリンピック・万博まで 1938~1970
From Pre-war period to Olympic Games and World Expo

凡例：資料名｜制作年｜縮尺｜寸法（mm）｜技法・素材｜制作／撮影者（丹下健三以外の場合）｜所蔵者／著作権者
※不明ないし該当のない項目は不記載とした　※●マークは期間中展示替えを行った

Section 1：戦争と平和
丹下健三ポートレイト｜990×1500｜写真｜撮影：田澤進｜新潮社
慰霊祭（1955年8月6日）に集う人々（撮影：丹下健三）｜1955｜5 min｜スライドショー｜個人蔵
広島平和記念資料館　立面図｜1950｜1/100｜542×1074｜図面（複製）｜丹下都市建築設計｜ハーバード大学大学院デザイン学部
断面図｜1950｜1/50｜542×1074｜図面（複製）｜丹下都市建築設計｜ハーバード大学大学院デザイン学部
広島平和記念資料館 航空写真｜1955頃｜写真｜撮影：二川幸夫｜文化庁国立近現代建築資料館蔵
広島平和記念資料館｜1955頃｜写真｜撮影：二川幸夫｜文化庁国立近現代建築資料館蔵
広島平和記念資料館 模型｜2013｜1/100｜222×3200×900｜スチレンボード、紙｜制作/所蔵：東京造形大学　沖研究室・上田研究室
Central Theme of Hiroshima City Planning｜1953｜316×240｜冊子｜『Peace City HIROSHIMA』所収｜個人蔵
AN OUTLINE of CHILDREN'S CENTER PROJECT｜1951｜299×210｜書類｜個人蔵
広島平和記念都市建設計画についての意見書｜1951｜360×258｜書類｜個人蔵
競技設計模型｜1953頃｜227×317｜写真｜撮影：平山忠治｜個人蔵
CIAM8 LONDON 1951: the City｜1951｜326×233｜冊子｜個人蔵
「広島計画　1946-1953」｜1954｜210×290｜『新建築』1954年1月号所収｜新建築社
平和大橋「つくる」（イサム・ノグチ）｜1953｜406×508｜ゼラチン・シルバー・プリント｜撮影：石元泰博｜高知県立美術館蔵
広島平和記念資料館本館｜1953｜406×508｜ゼラチン・シルバー・プリント｜撮影：石元泰博｜高知県立美術館蔵
丹下研究室の作業風景｜1952｜写真｜個人蔵
丹下健三がイタリア・ローマから家族に送った手紙（1951年7月3日）｜1951｜105×150｜書簡｜個人蔵
丹下健三がイタリア・フィレンツェから家族に送った手紙（1951年8月10日）｜1951｜105×150｜書簡｜個人蔵
天体望遠鏡のレンズ｜φ155｜レンズ｜個人蔵
戦没学徒若人の広場　案内図・配置図｜1965｜図面（マイクロフィルム複製）｜丹下健三＋都市・建築設計研究所
戦没学徒若人の広場　平面図｜1965｜図面（マイクロフィルム複製）｜丹下健三＋都市・建築設計研究所
戦没学徒記念館　模型｜2013｜1/200｜1590×700×510｜木｜制作：神戸大学大学院 遠藤秀平研究室｜香川県立ミュージアム蔵
大東亜建設忠霊神域計画 模型｜2013｜1/1000｜2309×1620×150｜木｜制作：滋賀県立大学 松岡拓公雄研究室｜香川県立ミュージアム蔵
大東亜建設忠霊神域計画　鳥瞰パース｜1942｜900×620｜図面（複製）｜『建築雑誌』1942年12月号所収｜日本建築学会｜個人蔵
『建築雑誌』｜1942｜210×300｜雑誌｜『建築雑誌』1942年12月号｜日本建築学会｜個人蔵
Section 2：近代と伝統
●「芸術の館」配置図（CHATEAU D'ART 1）｜1938｜1/700｜650×960｜図面｜東京大学大学院工学系研究科建築学専攻蔵
●一階平面図（CHATEAU D'ART 2）｜1938｜1/250｜645×950｜図面｜東京大学大学院工学系研究科建築学専攻蔵
●二階平面図（CHATEAU D'ART 3）｜1938｜690×960｜図面｜東京大学大学院工学系研究科建築学専攻蔵
●三階平面図（CHATEAU D'ART 4）｜1938｜1/250｜690×955｜図面｜東京大学大学院工学系研究科建築学専攻蔵
●北面図　東面図（CHATEAU D'ART 11）｜1938｜1/250｜640×960｜図面｜東京大学大学院工学系研究科建築学専攻蔵
●南面図　西面図（CHATEAU D'ART 12）｜1938｜1/250｜640×960｜図面｜東京大学大学院工学系研究科建築学専攻蔵
●全面東面図　南面図　東面図　北面図　西面図（CHATEAU D'ART 13）｜1938｜640×960｜図面｜東京大学大学院工学系研究科建築学専攻蔵
●断面図（CHATEAU D'ART 14）｜1938｜1/250｜640×960｜図面｜東京大学大学院工学系研究科建築学専攻蔵
●外観パース（CHATEAU D'ART 15）｜1938｜650×960｜図面｜東京大学大学院工学系研究科建築学専攻蔵
●透視図（CHATEAU D'ART 16）｜1938｜650×960｜図面｜東京大学大学院工学系研究科建築学専攻蔵
●透視図（CHATEAU D'ART 17）｜1938｜640×960｜図面｜東京大学大学院工学系研究科建築学専攻蔵
●芸術家倶楽部の大サロン　透視図（CHATEAU D'ART 19）｜1938｜図面（複製）｜東京大学工学系研究科建築学専攻蔵
卒業設計「芸術の館」 模型｜2013｜1/100｜206×1627×1225｜木｜制作：千葉工業大学工学部 古市徹雄研究室｜香川県立ミュージアム蔵
成城の自邸　32尺×15尺案（立面図）｜213×305｜鉛筆、トレーシングペーパー｜丹下健三、田良島昭｜個人蔵
32尺×15尺案（平面図）｜210×307｜鉛筆、トレーシングペーパー｜丹下健三、田良島昭｜個人蔵
50尺×18尺案（立面図）｜210×308｜鉛筆、トレーシングペーパー｜丹下健三、田良島昭｜個人蔵
50尺×18尺案（平面図）｜210×308｜鉛筆、トレーシングペーパー｜丹下健三、田良島昭｜個人蔵
60尺×18尺案（立面図）床高：1400mm｜290×560｜鉛筆、トレーシングペーパー｜丹下健三、田良島昭｜個人蔵
60尺×18尺案（立面図）｜290×560｜鉛筆、トレーシングペーパー｜丹下健三、田良島昭｜個人蔵
西面道路から入車庫案｜1964年頃｜360×432｜鉛筆、トレーシングペーパー｜丹下健三｜個人蔵
南面道路から入車庫案（1）｜1964年頃｜394×424｜鉛筆、トレーシングペーパー｜丹下健三｜個人蔵
南面道路から入車庫案（2）｜1964年頃｜367×426｜鉛筆、トレーシングペーパー｜丹下健三｜個人蔵
外観｜276×199｜写真｜個人蔵
内観｜276×199｜写真｜個人蔵
外観｜276×199｜写真｜個人蔵
外観（撮影：丹下健三）｜1953年頃｜写真｜個人蔵
手帳に記された自邸の断面検討図｜1952｜145×95｜手帳｜丹下健三｜個人蔵
平面図｜2018｜297×420｜図面（復元）｜作図：野口直人｜東海大学工学部野口研究室蔵

断面図｜2018｜297×420｜図面（復元）｜作図：野口直人｜東海大学工学部野口研究室蔵
断面図　床高：1400mm｜433×555｜鉛筆、トレーシングペーパー｜丹下健三、田良島昭｜個人蔵
断面図　床高：1920mm｜444×555｜鉛筆、トレーシングペーパー｜丹下健三、田良島昭｜個人蔵
イサム・ノグチから贈られたオブジェ｜380×320×150｜陶｜イサム・ノグチ｜個人蔵
犬｜370×510×510｜陶｜岡本太郎｜個人蔵
丹下自邸　模型｜2013｜1/30｜685×1200×1202｜木｜制作：芝浦工業大学工学部 堀越英嗣研究室｜香川県立ミュージアム蔵
内観写真｜写真（複製）｜撮影：石元泰博　©高知県，石元泰博フォトセンター
透視図｜280×790｜鉛筆、トレーシングペーパー｜丹下健三、田良島昭｜個人蔵
桂離宮｜1953｜406×508｜ゼラチン・シルバー・プリント｜撮影：石元泰博｜高知県立美術館蔵
古書院東南角の石垣｜1953｜406×508｜ゼラチン・シルバー・プリント｜撮影：石元泰博｜高知県立美術館蔵
松琴亭前から天の橋立を見る｜1953｜406×508｜ゼラチン・シルバー・プリント｜撮影：石元泰博｜高知県立美術館蔵
Section 3：戦後民主主義と庁舎建築
旧東京都庁舎　東西断面図｜1/100｜800×1150｜図面（青図）｜丹下健三計画研究室｜岡本太郎記念館蔵
中二階平面図｜1/100｜740×1060｜図面（青図）｜丹下健三計画研究室｜岡本太郎記念館蔵
北立面図｜1/200｜540×796｜図面（青図）｜丹下健三計画研究室｜個人蔵
透視図｜539×794｜図面（青図）｜丹下健三計画研究室｜個人蔵
香川県庁舎｜1958｜841×1189｜写真（複製）｜撮影：石元泰博｜高知県立美術館蔵　©高知県，石元泰博フォトセンター
三階平面図｜1955｜1/100｜811×1128｜図面（複製）｜丹下健三計画研究室｜ハーバード大学大学院デザイン学部
断面図｜1955｜1/100｜811×1128｜図面（複製）｜丹下健三計画研究室｜ハーバード大学大学院デザイン学部
香川県庁舎　模型｜2013｜1/100｜584×1299×903｜木｜制作：日本大学生産工学部 川岸梅和研究室｜香川県立ミュージアム蔵
倉吉市庁舎建設記録映像｜1955年頃｜12 min｜映像｜撮影：山本繁喜｜生田昭夫（堂計画室）蔵
Section 4：大空間への挑戦
広島子供の家　配置　平面　断面図｜1952｜1/100｜542×1070｜図面（青図）｜丹下健三研究室｜東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
配筋図｜1952｜1:20｜540×834｜図面（青図）｜丹下健三研究室｜東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
横断面・縦断面詳細図｜1952｜1/100｜547×1075｜図面（青図）｜丹下健三研究室｜東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
広島子供の家　模型｜2013｜1/50｜160×602×600｜木｜制作：金沢工業大学環境・建築学部 西村督研究室、竹内申一研究室｜香川県立ミュージアム蔵
愛媛県民館　断面図｜1952｜1/100, 1/50｜530×1064｜図面（青図）｜丹下健三研究室｜東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
愛媛県民館　模型｜2013｜1/100｜150×801×700｜木｜制作：金沢工業大学環境・建築学部 西村督研究室、竹内申一研究室｜香川県立ミュージアム蔵
東京カテドラル聖マリア大聖堂｜1964｜写真（複製）｜撮影：石元泰博｜高知県立美術館蔵　©高知県，石元泰博フォトセンター
断面図｜1963｜1/100｜800×1107｜図面（複製）｜丹下健三計画研究室｜ハーバード大学大学院デザイン学部
配置図｜1963｜1/100｜800×1107｜図面（複製）｜丹下健三計画研究室｜ハーバード大学大学院デザイン学部
東京カテドラル聖マリア大聖堂　模型｜1963｜1/200｜355×900×722｜木｜制作：石黒建築模型｜宗教法人カトリック東京大司教区蔵
Section 5：高度経済成長と情報化社会への応答
山梨文化会館　模型｜2014｜1/100｜1140×990×1600｜木｜制作：植野石膏模型製作所｜株式会社山梨文化会館蔵
南側立面図｜1967｜図面（マイクロフィルム複製）｜丹下健三＋都市・建築設計研究所
二階天井伏図｜1967｜図面（マイクロフィルム複製）｜丹下健三＋都市・建築設計研究所
一階平面図｜1967｜図面（マイクロフィルム複製）｜丹下健三＋都市・建築設計研究所
『図集・日本列島の地域構造』｜1967｜300×300×100｜書籍｜日本地域開発センター｜武蔵野美術大学図書館蔵
Section 6：五つのキーワードの統合
国立代々木競技場（第二体育館　外観）｜1964｜406×508｜ゼラチン・シルバー・プリント｜撮影：石元泰博｜高知県立美術館蔵
国立代々木競技場（第一体育館　工事中）｜1964｜406×508｜ゼラチン・シルバー・プリント｜撮影：石元泰博｜高知県立美術館蔵
全体配置図｜1962｜1/600｜796×1218｜図面（複製）｜丹下都市建築設計｜ハーバード大学大学院デザイン学部
立面図｜1962｜1/200｜801×1223｜図面（複製）｜丹下都市建築設計｜ハーバード大学大学院デザイン学部
一階平面図｜1962｜1/200｜824×1226｜図面（複製）｜丹下都市建築設計｜ハーバード大学大学院デザイン学部
第二体育館　一階平面図｜1962｜1/200｜600×775｜図面（複製）｜丹下都市建築設計｜ハーバード大学大学院デザイン学部
トップライト詳細図｜1962｜1/50｜818×629｜図面（複製）｜丹下都市建築設計｜ハーバード大学大学院デザイン学部
第一体育館　竣工図（青焼製本）｜図面（複製）｜丹下都市建築設計｜個人蔵
第二体育館　竣工図（青焼製本）｜図面（複製）｜丹下都市建築設計｜個人蔵
国立屋内総合競技場｜1963｜1/600｜1190×830×350｜木｜制作：石黒建築模型｜日本スポーツ振興センター秩父宮記念スポーツ博物館蔵
第一体育館　内観写真｜1964頃｜2200×1470｜写真｜撮影：二川幸夫｜文化庁国立近現代建築資料館蔵　※展示室ロビーに展示
第二体育館　内観写真｜1964頃｜1450×1100｜写真｜撮影：二川幸夫｜文化庁国立近現代建築資料館蔵　※展示室ロビーに展示
オーラルヒストリー（岡村幸一郎氏、荘司孝衛氏）｜17min｜映像｜聞き手：豊川斎赫、鎌田恭彦、桐原武志、撮影：鎌田恭彦、編集：岡篤郎｜文化庁国立近現代建築資料館蔵
国立代々木競技場周辺地域模型｜2021｜1150×3100｜ミクストメディア｜制作：諏佐遥也（ZOUZUO MODEL）｜千葉大学豊川斎赫研究室蔵 ※中央円形台に展示
競技場のアプローチを示した構想メモ｜1961｜420×305｜書類｜個人蔵
丹下健三手帳に記された国立代々木競技場の検討｜1962｜145×95｜手帳｜個人蔵
ガラスケース内展示
「都市計画」講義ノート（大歳幹夫記）｜1952頃｜250×182｜ノート｜大歳幹夫記｜個人蔵
磯崎新から丹下に宛てた書簡｜1959｜361×258｜書簡｜磯崎新｜個人蔵
MIT における 丹下の講評会風景｜写真｜個人蔵
ボストン湾2500人のコミュニティ計画　断面図 A-A｜複写物｜個人蔵

ボストン湾2500人のコミュニティ計画　断面図 B-B｜複写物｜個人蔵
『東京計画1960　その構造改革の提案』｜1960｜285×275｜冊子｜丹下健三＋都市・建築設計研究所｜文化庁国立近現代建築資料館蔵
『東京計画1960　その構造改革の提案』｜1960｜285×275｜写真｜個人蔵
太陽の塔　骨組み梁間隔(高さ)2.5m｜1968｜384×268｜鉛筆、インク、紙｜坪井善勝研究室｜東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
太陽の塔　腕部伏図軸組図 断面リスト｜1969｜532×770｜鉛筆、インク、紙｜坪井善勝研究室｜東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
日本万国博覧会・基幹施設マスタープラン｜210×290｜雑誌|『新建築』1966年7月号、1967年4月号｜新建築社
ル・コルビュジエから丹下に宛てた書簡｜1959｜270×210｜書簡｜ル・コルビュジエ｜個人蔵
「MICHELANGELO頌—Le Corbusier論への序説として—」｜1939｜180×260｜雑誌｜『現代建築』1939年12月号所収｜日本工作文化聯盟
建築から都市へ拡張する丹下モデュロール（神谷宏治「一宮団地計画」）｜1961｜255×335｜雑誌｜『建築文化』1961年6月号所収｜彰国社
丹下健三手帳に記された モデュロールの検討｜1952｜145×95｜手帳｜丹下健三｜個人蔵
広島平和記念資料館のモデュロール(大谷幸夫「課題の発展に対応したモデュロール」)｜1955｜240×260｜雑誌｜『国際建築』1955年11月所収｜國際建築協會事務所
丹下からグロピウスに宛てた書簡｜1955｜274×189｜書簡｜個人蔵
グロピウスから丹下に宛てた書簡｜1955｜280×215｜書簡｜個人蔵
丹下からバイヤーに宛てた書簡｜1956｜275×208｜書簡（複製）｜個人蔵
倉敷と広島を訪れるグロピウス夫妻と丹下夫妻｜1954｜写真｜個人蔵
成城の自邸を訪れるグロピウス夫妻　外観｜1954｜写真｜個人蔵
「グロピウスとバウハウス」展　リーフレット｜1954｜258×365｜印刷物｜個人蔵
グロピウス箱根座談会のための事前協議資料（丹下健三記）｜1954｜358×252｜書類｜丹下健三｜個人蔵
グロピウスの講演会のためのメモ｜1954｜便箋6枚｜書類｜丹下健三｜個人蔵
東京都庁舎計画・有楽町｜1952｜180×240｜雑誌｜『国際建築』1952年12月号所収｜國際建築協會事務所
東京都庁舎計画｜1952｜210×290｜雑誌｜『新建築』1952年12月号｜新建築社
都庁の “部” 間交流を円の大きさで表したもの（「関係・分布・流れ」）｜1967｜255×355｜雑誌｜『建築文化』1967年4月号所収｜彰国社
内観｜写真｜川崎市岡本太郎美術館蔵
空中写真｜写真｜個人蔵
旧東京都庁舎模型｜写真｜個人蔵
香川県庁舎を眺める丹下氏写真｜写真｜個人蔵
香川県庁舎低層部・高層部計算書｜1958｜275×380｜鉛筆、インク、紙｜坪井善勝研究室｜東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
墨会館　ピロティ｜写真｜個人蔵
墨本社記念館新築工事構造計算書　一般事項｜1957｜268×380｜鉛筆、インク、紙｜坪井善勝研究室｜東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
墨記念館新築工事構造計算書　荷重項｜1956｜268×380｜鉛筆、インク、紙｜坪井善勝研究室｜東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
旧草月会館　内観｜写真｜個人蔵
旧草月会館　外観｜写真｜個人蔵
草月会館構造計算書　構造略図｜1955｜280×380｜鉛筆、インク、紙｜坪井善勝研究室｜東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
草月会館構造計算書　地震力の算定｜1955｜280×380｜鉛筆、インク、紙｜坪井善勝研究室｜東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
今治市公会堂構造計算書｜1957｜270×388｜鉛筆、インク、紙｜坪井善勝研究室｜東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
今治市庁舎　外観｜写真｜個人蔵
「広島の平和記念聖堂設計競技発表」｜1948｜新聞｜『カトリック新聞』1948年7月11日号
『平和記念広島カトリック聖堂建築競技設計図集』｜1949｜180×260｜書籍｜千葉大学 豊川斎赫研究室蔵
丹下案外観パース｜1949｜書籍｜『平和記念　廣島カトリック聖堂建築競技設計図集』1949年｜洪洋社
丹下健三手帳に記された愛媛県民館の検討｜1952｜145×95｜手帳｜丹下健三｜個人蔵
愛媛県民館　外観（丹下の赤いトリミング指示線入り）｜写真｜丹下健三｜個人蔵
愛媛県民館　外観｜写真｜個人蔵
静岡市体育館構造計算書｜1957｜268×386｜鉛筆、インク、紙｜坪井善勝研究室｜東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
香川県立体育館　北・西立面図｜1/100｜767×1028｜図面（複製）｜丹下健三＋都市・建築設計研究所｜ハーバード大学大学院デザイン学部
二階床版配筋図｜1/100｜767×1028｜図面（複製）｜丹下健三＋都市・建築設計研究所｜ハーバード大学大学院デザイン学部
外観｜写真｜ワールド・モニュメント財団蔵
東京カテドラル聖マリア大聖堂　設計競技案スケッチ｜1962｜210×290｜雑誌｜『新建築』1962年7月号所収｜新建築社
設計競技案模型｜写真｜撮影：阿久井喜孝｜個人蔵
クウェートスポーツセンター計画　一階平面図｜1969｜図面（複製）｜丹下都市建築設計｜文化庁国立近現代建築資料館蔵
シャボンを用いた吊り屋根検討｜写真｜『クウェートスポーツセンター報告書』1969 所収
山梨文化会館構造計算図書｜275×407｜鉛筆、インク、紙｜横山不学｜横山建築構造設計事務所蔵
「山梨文化会館ここに誕生」｜1966｜410×546｜新聞｜『山梨日日新聞』」1966年11月21日号
旧電通本社ビル　アクリライト板を用いた光弾性実験｜120×80｜写真｜坪井善勝研究室｜東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
供試体アクリのヤング係数の測定｜265×188｜鉛筆、インク、紙｜坪井善勝研究室｜東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
電通ビル1スパン2層の大架構構造物の実験（アクリライト試験体　水平試験）その2｜265×188｜鉛筆、インク、紙｜坪井善勝研究室｜東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
電通本社実験用立面図｜550×415｜鉛筆、インク、紙｜坪井善勝研究室｜東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
アクリライト板を用いた光弾性実験｜120×80｜写真｜坪井善勝研究室｜東京大学生産技術研究所 川口健一研究室蔵
都市の未来像　環境へのシステム的アプローチ｜1971｜280×290｜書籍｜『21世紀の日本：その国土と国民生活の未来像』1971年所収｜新建築社
『日本列島の将来像：21 世紀への建設』｜1966｜105×175｜書籍｜講談社現代新書｜個人蔵
『図集・日本列島の地域構造』｜1967｜290×310×80｜書籍｜日本地域開発センター｜武蔵野美術大学図書館蔵

［報告］

建築アーカイブズのあり方
―令和 3 年度アーカイブズ・カレッジ（史料管理学研修会）短期コースに参加して―

飛田ちづる*

Role of architectural archives:
From the experience of short course in “Archives College” by National Institute of Japanese Literature

TOBITA Chizuru

This report is based on a short course in the Archives College held by the Institute of Japanese Literature in 2021, and considered the state of architectural archives. Many of the architectural materials for which the author was in charge belonged to architect offices which were no longer operated, and they have been gotten storage after former employers of the institute organized them. From these experiences, I pointed out that architectural archives have each characteristics of corporate archives, science archives, and private archives. It is hoped that organize the organizing materials and released policy with referring the lectures, we have to have common understanding within the archives, and implement the policies.

キーワード：建築アーカイブズ、企業アーカイブズ、民間アーカイブズ、資料公開、資料保存

1. 背景と目的

本報告は、国文学研究所主催のアーカイブズ・カレッジ（史料管理学研修会）短期コースを受講し、その内容を踏まえ、現場から建築アーカイブズのあり方の一助とすることを目的とする。

国立近現代建築資料館（以下、資料館）は、開館以来、近現代建築の資料収集と整理、保存と公開に努めてきた。一方で、既存のアーカイブズで扱う歴史文書、公文書とは異なる建築に関する資料を扱うため、特有の課題もあると思われる。

以上から、本報告では、国内で先行する文書記録管理の知識を、建築資料に生かし、かつ建築資料特有の事情、および日本の事情を踏まえた収集と整理、保存管理、公開を行うため、資料館の事例を担当資料の事例を踏まえながら、課題を整理し、国立近現代建築資料館の運営方針の一助とすることを目的とする。

2. 手法

資料館では資料の調査から公開まで、図1の流れで行っている。今回、講習で得た知見を振り返りながら整理し、課題を洗い出す。なお、前出の手法は筆者の在籍した令和4（2022）年3月末までのものであり、その後、変更もあり得ることを申し添える。

事例として引用する資料は、筆者の担当していた次の6つの資料とする。フォンド番号順に村田豊建築設計資料[1]、吉阪隆正＋U研究室資料[2]、大高正人建築設計資料[3]、渡辺仁資料[4]、平田重雄資料[5]、岸田日出刀資料[6]である。

3. 建築資料とは

本報告では、建築資料の定義について対象としていないが、建築資料を題材として扱うに当たり、本論での定義を行うべきと考え、一案を述べる。

建築資料とは、本来、建築を調査、研究できるもの全てが建築資料と定義されるといえる。つまり、これまで建築の研究のために扱われている古文書、図面、写真、古地図、現存する建築、地図、雑誌や新聞記事、議会資料、社史、関係者への聞き取りといった類に限らず、今後、新たな種類の資料、もしくは手法で建築の研究が行われれば、それも建築資料である。

以上を踏まえ、本報告では、令和4（2022）年3月時点で資料館に収蔵されていた資料の内容を紹介する。

なお、当然ながら、今後の収蔵対象として、ここに記載されていない資料の収蔵も排除できず、記載されていなくとも建築等の研究に資するものはあり得ることも申し添える。

*元文化庁国立近現代建築資料館研究補佐員、博士（世界遺産学）

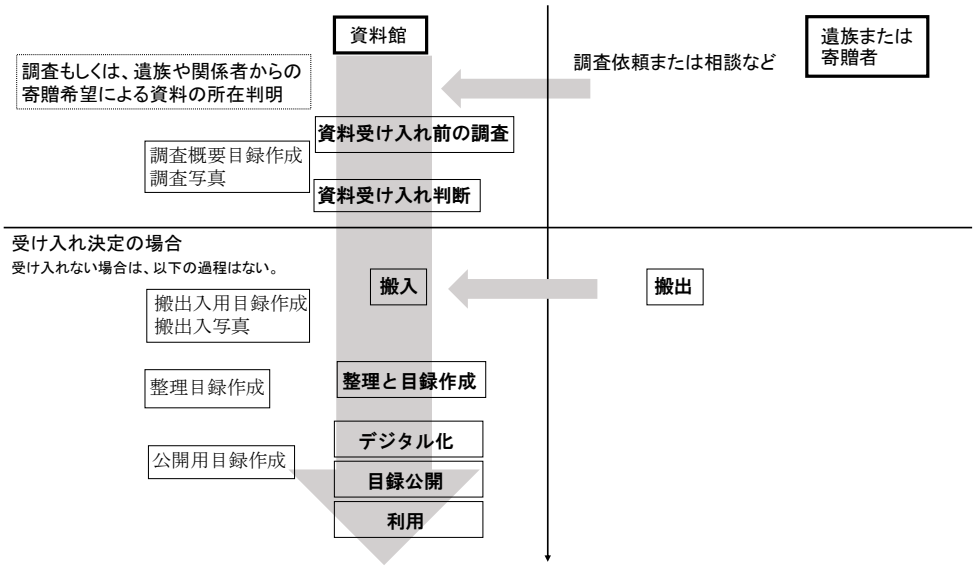


図1　国立近現代建築資料館における資料の調査から公開までの流れ

4. アーカイブズ・カレッジ短期コースの講義と資料館の手法の比較

この章では図1の資料館の業務を踏まえながらアーカイブズ・カレッジの講義を参照しつつ建築資料への適用を検討する。

4.1. 収集前の資料への理解

4.1.1. 企業アーカイブズ

講義によると、企業アーカイブズとは、すべての組織に当てはまるものであり、社史編纂室が担う役割の一つでもある。企業の移転、縮小、統合等の変化の際に大きく関与する。また、企業のブランド確立の際に、これまでの業務の整理、道のりを見出す際にも裨益する。

資料館に当てはめる場合、収蔵資料の前段階の状態の参考となりえる。資料館に収蔵される資料は、その多くが特定の建築設計事務所で作成されたものである。業務に差し支えのないよう整理されているものがある一方で、未整理のままのものも存在する可能性はある。また、閉鎖された事務所では不要となった業務資料の保存管理、あるいは廃棄が課題となる。

資料館に入ってくる資料は元々企業アーカイブズと解釈できるため、この理解は資料整理の役に立つ。しかし、企業アーカイブズの目的と、資料館の収集アーカイブズの目的は異なるため、整理方針は異なる。

企業アーカイブズは、企業のブランディング、社史編纂、広報など必要とする場面が想定できる。業界史に貢献するのは結果論と思われる。また、不要なものは廃棄される。従業員が要不要を判断して廃棄する。ただし、必要なものを廃棄しないようにする仕組みを浸透させる必要がある。業界により必要なものは異なるため、整理には業界に詳しい人の知識が必要である。

資料館のような収集アーカイブズは、すべてを受け取る。つまり、取捨選択をしないと解釈できる。企業アーカイブズから寄贈された資料であるから、資料館の判断で取捨選択をできる、という解釈ではない。また、企業アーカイブズに勤務経験のある人材が、収集アーカイブズに異動した場合、取捨選択の考え方が異なる点にも注意する。

4.1.2. 理系のアーカイブズ

本講義では、保存すると考えていないものの保存の難しさが資料館と特に関係すると思われる。芸術作品のように、他人の手に渡り所有され続けることを想定した材質ではなく、仕事を遂行した後、廃棄できるものを偶然保存する。この場合、材質が非常に劣化しやすい、あるいは、業務時の扱いが粗雑である。もしくは両方の条件を備えている。また、その内容を、公開する前提で作成していないといった課題が挙げられ、これらは全て資料館の収蔵資料に当てはまる。

変更不可能な材質と、利用時の扱いについては、劣化

の進度を遅くする環境や保管、デジタル化を行い現物に触れる機会を減らすといった博物館や美術館でもとられている手法を用いている。

資料の内容に留意する点と対応方法は次のとおりである。例えば、整理時に個人情報の有無に留意し、公開の際に被覆するといった先行アーカイブズと同様の手法をとっている。こうした対応は利用において担当者と利用者に負荷をかけるものであるが、利用の促進と保存管理の双方の観点からは必要だと思われる。

4.2. 資料整理方法

4.2.1. 現代のアーカイブズとアーキビストの役割

アーカイブズの基本的な理念やありかたについて、建築資料に限らず知るべきものであった。

資料館において、資料を整理するに当たり、各資料担当者の意向が強く反映され、担当者が変わると整理方法も変わっている可能性は否めない。試行錯誤中とも言えるが、館内で統一した方針がないことや、新規着任者に一斉に教えられる機会も、時期により様々であると感じる。整理方法は、資料の特徴で異なるとしても、それが全体で共有されていないといった課題も挙げられる。

建築資料は、例えば、一本の筒の中にあるプロジェクトの図面が複数枚収められている。便宜的にその筒をファイルとすると、アイテムである図面に、一枚ずつ番号が付けられている場合がある。意匠図面の1番から10番、設備図面の1番から5番、構造図面の1番から10番といった具合である。それらが、使っているうちに連番ではなく混在している例もままある。それを並べ替えず、寄贈された状態で整理する、ということと捉えられる。建築の知識があれば、もしくはなくても、資料の内容から、並べ替える担当者もいる。書籍の全集のように並べ替えることで、利用者の利便性を図ることがあるが、収集資料の場合は、寄贈時のまま目録を作成していくことが望ましいとも捉えられた。また、空白の書類もそのまま資料として保管する。捨てない、抜かないといった認識を共有することも重要である。

可能であれば、一ファイルの中身は同じ場所に保管したい。ただし、建築資料は図面と書類、図面でもA0大のトレーシングペーパーからB5以下の和紙と版型も材質も多様である場合がある。筆者の在籍していた時期は、大きさの違う資料を異なる場所に保管していたため、管理目録の作成が必要であり、担当者の記憶に頼る部分も大きかった。

館内全体で統一し、誰でも保管場所がわかることが重要である。一方で、資料の状態をよく理解している担当者以外は触れないという運営方針も検討できる。

4.2.2. 民間アーカイブズ・コントロール論

民間アーカイブズの考え方、現状と同時に資料の調査手法についても講義され、建築アーカイブズも同様に資料を扱うべきと学ぶところの多い講義だった。現地保存の振興や関係者による保存の振興を主に話されていたが、建築アーカイブズも、今後、関係者による保存を進めていく時期に入るのではないだろうか。

また、資料整理の方法も、現在資料館で行われている手法をなぞりながら、確認できるものであった。

国の機関として、各国の事例紹介も参考となる。英国、イタリアの事例で、民間アーカイブズとの連携の方法、多様なアーキビストの存在なども、今後、資料館の運営方針の参考となるだろう。アーキビストが独立した職能として一般の企業や組織に存在しにくい、もしくは、他の業務、学芸員や史料編纂室の室員などが兼務している日本では、専門的な職能ではなく、担当者が身につけられる知識として普及させていくこともひとつの手段として考えられる。また、現状を補完する形で、他の業務と兼任することを前提とした、基本的な素養を普及させる、といったことも考えられる。

他の分野のアーカイブズにも共通の課題だと思うが、アーカイブズの知識だけではなく、建築の知識がないと資料を整理することが難しい場合もある。無論、そうではない場合や、予め作業時の留意点として伝えることで、資料の整理は可能となることも多い。例えば、建築資料の特徴として、単一の作成者ではなく、大勢の人間が関わり、かつ組織自体も変遷しながら、一人の建築家の活動を追える資料群、あるいは、複数の建築家や事業者の関わる大規模プロジェクト、建築だけではなく都市計画も手がけた事務所、構造設計を担当した人物の資料、或いは、建築論を構築した人物の資料など、多種多様である点が挙げられる。また、特定の建物の図面や設計時の資料といった、ある建物だけの設計、施工に関わる資料も十分考えられる。設計事務所の資料以外は、こうした収蔵資料の一部、例えば収蔵施設自体の建築資料、あるいは地域の著名な建物の資料である、といった場合が多いかもしれない。

そうした際に、民間アーカイブズの考え方は非常に参考となり、建築資料を保存する組織として、現場保存の方法も含め、積極的に広めていく必要があると思われる。

4.3. 災害等の対策を含めた保存管理

資料館では災害対策は、展覧会開催時のマニュアルに記載されているのみで、具体的な対応や手法、判断基準は明確ではない。幸いにも筆者の在任中は感染症を除き災害は発生しなかったため、実際に判断が求められることはなかった。また、資料館の所在する地域の災害対策の地図を見ると、浸水被害の想定される地域には含まれていない。ただ、あくまでも予想であり、地震に伴い発生の予想される火災、防犯システムの発生可否は未知である。さらに、公的施設として避難所になる可能性も排除できず、その際の資料館業務との兼ね合いなども検討の必要がある。なお、これらはあくまで筆者の個人的な想定であり、実際は本庁や他組織との調整の上で行われるものである。

4.4. データベース構築

4.4.1. データベース構築と保存管理データベース

収蔵資料利用のデータベース構築は実施されているが、人員の都合から遅延している点が課題である。また、データベースについては別の機会に既に課題とともに紹介済みであるため、本稿では簡単に述べる。

目録作成とデータベース構築の進捗管理は、同時に行わなければ進められない。また、目録作成、及びデータベース構築の担当者が、その意義を理解しなければ進まない面もある。

公開用と保存管理用のデータベースの相違点、管理方法なども存在すると思うが、今回は省略する。

4.5. 保存管理

資料館の入居する施設は、収蔵施設として作られていない。旧岩崎邸の一部に法務省の研修所が作られ、その後、資料館となった。従って、館内の至る所に階段があり資料の移動や運搬は容易ではない。他所の倉庫も保存場所として大差はない。

講義内で特に印象的だったことは、収蔵庫は作業場所ではないという言葉である。講師の指摘するように、収蔵している場所でしばしば初期に収蔵された資料の再整理や保管容器の入れ替え、容器自体の整理などが行われる。作業のできる場所と収蔵庫が離れており、作業場所まで資料を移動するよりも、その場で作業をしたほうが早くて楽であるためという背景もある。

しかし、保存管理の視点からは収蔵庫に滞在は短時間に抑えることが望ましく、収蔵施設に勤務するのであれば、その点も留意すべきであると改めて感じた。なお、資料館では作業場所も収蔵資料の量に比すと狭い。作業者を増やしても、同時並行で可能な作業量に限りがある。また、資料閲覧や貸し出し、展覧会の開催も並行して行われ、かつ通常作業に使用している場所で行われることから、作業量は自然と減る。資料館として整理を優先する資料を決めることで、多少解消されると思うが、難しいようだ。理想と現実の乖離はあるものの、収蔵施設としてより適切な方向へ変更していく姿勢が求められるといえる。

また、他国の事例の紹介では、イタリアの収蔵施設の職員と講師の共同作業が見られた。今回の講義のように、他の類似組織の事例を知ることで、自分たちの業務を相対的に捉え、改善点等も発見できる。建築資料を収集する施設は多くはないものの、建築資料も収蔵する施設まで範囲を広げれば相当数が存在する。それらの施設との共同事業、あるいは海外の建築資料収集施設との共同事業を実施することで、資料館や国内の施設の一層の充実を図ることになる。

4.6. 利用公開

資料館の運営や、業務に携わるにおいて決定すべき事項の示唆を多く含む講義だった。

講義内では、旧東ドイツの事例紹介があり、資料収集施設の資料公開の判断として興味深く、かつ国情の相違を考えさせる事例だった。

また、特に共感した点は、アーカイブズの役割は資料の収集と閲覧、利用であり、展示に重きを置いた施設が多いが、アーカイブズの役割を果たす観点から、展示に重きを置かないことが適当であるという説明が印象的だった。

資料館も、これまでは収集した資料と資料館自体の周知のための展示に重きを置いていたと見られる。今後も、情報発信は必要である。一方で収集資料の整理と公開、建築資料の保存の振興は、資料館で収蔵するのみならず、各施設や組織で保存することも前提とした活動に重心を移していく必要があるといえる。

4.7. 全体を通じて―社会への還元―

事例紹介は何件も講義の中に含まれており、歴史資料は身近なものであると感じている関係者の考えを具現した事例紹介も多かった。特に、地域住民が資料整理に加わることで資料への理解、保存意識の醸成と促進が見られる話などは魅力的である。

しかし、資料館で収蔵する資料は、郷土資料とは異なるため、また、資料作成者と関係者が基本的に同一であるため、整理の客観性を保つためにも、整理者の判断が

難しい場合に、助言を行う立ち位置が望ましいといえる。

5. まとめ

資料館における建築資料の整理や保存管理等の考え方を、アーカイブズ・カレッジ短期コースの講義を引用しつつ検討してきた。

建築資料は書類や図面以外に写真や模型、地図、大型の地図や図面を含む多様な状態であり、資料の状態も含めてその都度、保存管理やデジタル化について検討する必要がある。しかし、建築資料の収集と調査、整理、保存管理、そして利用と公開について共通となる手法や考え方を見出せれば、今後の建築資料の継承にわずかでも裨益すると思われる。

まず、収蔵前の資料は、企業アーカイブズのように予め一定の整理が行われているものが多い。それは寄贈を前提としていたか否かではなく、企業の資料として業務遂行のために取捨選択されている。もしくは、事務所を閉めた後、関係者により選別と保管が行われ、収蔵されたためである。これは、関係者のもつ収集保管場所や時間等との兼ね合いである。

その認識の下、資料館内で共通の整理手法、保存管理手法を作成し、共有および実行していくことが求められる。また、整理の進捗管理も同様である。

なお、本稿における資料館の業務に対する記述は、全て筆者の考えであり、組織全体の考えを示すものではない。

参考

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国文学研究資料館主催令和3年度アーカイブズ・カレッジ（史料管理学研修会）短期コース

https://www.nijl.ac.jp/event/seminar/2021/07/post-28.html

https://www.nijl.ac.jp/event/img/2021a_youkou_new.pdf

謝辞

本報告は、令和3（2021）年11月に島根県松江市で開催された国文学研究資料館主催のアーカイブズ・カレッジ（史料管理学研修会）短期コースを受講した筆者の解釈に基づき作成したものであり、講師や同研究所の意図と異なる点は筆者の責任である。また、貴重な機会をいただいた国文学研究資料館、開催地の松江市、および同時期に受講した関係の皆様へお礼としたい。

注

1 村田豊建築設計資料は、令和元（2019）年に贈与契約を締結し、同年から整理作業を始め令和4（2022）年3月上旬に、大方の整理作業を終えた。全体で66ファイル、アイテム数は8000を超える。相対的ではあるが、他の資料と比較して、中規模と位置づけられる。

2 吉阪隆正＋U研究室建築設計資料は平成27（2015）年5月に贈与契約を締結し、令和2（2020）年度にいち早く収蔵資料検索データーベース上で画像を含めた公開を開始した。ファイル数113、アイテム数約8000の中規模と位置づけられる。平成27年に「みなでつくる方法」と題して、資料館主催の展示を行っている。

3 大高正人建築設計資料は平成28（2016）年10月に贈与契約を締結し、令和2年度にデータベース上で公開を開始した。平成28年に「建築と社会を結ぶ」と題して資料館主催の展示を行っている。

4 渡辺仁資料は平成29（2017）年5月に贈与契約を締結し、令和2年度にデータベース上で公開を開始した。平成29年度収蔵品展に出陳している。ファイル数61、アイテム数約600の小規模資料群である。

5 平田重雄資料は、平成29年5月に贈与契約を締結。ファイル数22、アイテム数512の小規模資料である。

6 岸田日出刀資料は、平成29年12月に贈与契約を締結。サブフォンド数2、アイテム数164の小規模資料である。

（2022年5月12日原稿受理）

令和３年度

国立近現代建築資料館活動報告

令和３年度 国立近現代建築資料館 活動報告

Annual Activity Report of NAMA, 2021（Reiwa 3）fiscal year

文化庁国立近現代建築資料館

Ⅰ．資料の調査・保管等

（カッコ番号は各資料の資料群番号）

1. 各資料の作業

各資料について、次のとおり調査から保管までの業務（資料調査、資料受入、契約解約、返却、資料整理・研究、目録作成、デジタル撮影、燻蒸、修理、資料利用等）を行った。

(1) 坂倉準三建築設計資料

■ 概要

資料整理については、昨年度からの継続作業として、これまで作成した目録データの公開に向けて順次整備、書式の変更等作業を行った。また、他館での展示のための貸出しに伴い、一部資料の修理を行った。

■ 資料整理・目録作成

寄贈資料の内容を反映した階層構造に従い、公開用目録の作成手順を更新し、東京事務所図面資料の目録整備を進めた。

■ 資料の修理

高島屋資料館 TOKYO 及び岡本太郎美術館への資料貸出しに伴い、高島屋和歌山支店の図面資料２点（15-1015-21, 22）の修理を行った。また、寄贈資料に含まれる国立西洋美術館ポートフォリオ及び図面の調査を行った。

(4) 駒田知彦旧蔵坂倉準三関連資料

■ 資料の概要

坂倉事務所の元所員であった駒田氏所蔵の資料については、(1) 坂倉準三建築設計資料から分割し、神奈川県立近代美術館関連資料とともに、ファイル目録作成を進めた。

(7) 村田豊建築設計資料

■ 資料整理・目録作成

図面目録は、アイテムレベルの目録を整理し、収蔵資料検索データベースへのデータ投入を行った。併せて図面以外の資料は、整理を終え、ファイルレベルの目録を作成し、上記の図面目録の後ろにデータ投入できるよう準備を行った。また、資料整理を迅速に進めるため、図面以外の資料のうち、一ファイルを外部委託した。

■ 資料紹介

収蔵の経緯及び令和２年度までの整理結果については、飛田ちづる「村田豊建築設計資料整理報告」（『国立近現代建築資料館紀要』第１号）に概要を報告した。

■ 保存管理

図面以外の資料の保管箱に容器番号シールを貼り付け、目録にも容器番号を入力した。

■ デジタル化

ファイル番号34から48までの基本画像（400dpi）と閲覧用画像（200dpi）を作成した。

■ 参考情報

寄贈者によると、フランスのポンピドゥー・センターに寄贈された「富士グループパビリオン」が、同センター及び建築文化財博物館の “Aerodream” 展に出陳されたとの情報があり、同展サイト上にて、同パビリオンの写真が主たる画像として掲載されていることを確認した。

(8) 吉阪隆正＋Ｕ研究室建築設計資料

■ 目録作成

追加で目録作成の必要な資料があることが判明した。

■ 貸出

東京都現代美術館で開催の「吉阪隆正展　ひげから地球へ、パノラみる」（R4.3.19 ～ 6.19）に当館収蔵資料78点を貸し出した（別にデータのみの貸出37点）。貸出資料が多数にのぼるため、当館は「特別協力」として広報資料等に特記されている。

■ 修理

上記展覧会への貸出準備として、貸出予定の資料のうち17点を修理した。

■ 保存管理

Ａ２判以下の図面については、収蔵場所の都合から平箱へ入れ替え、管理番号シールを貼り付けた。同時に、収蔵場所も移動し、管理場所表を作成した。

(10) 大高正人建築設計資料

■ 目録作成

図面筒1番から39番まで、順次フラットニング、採番、目録作成で実施した。これとは別に「自動車労連」から同建築の一連の図面の画像提供依頼あり、これらについてもフラットニング、採番、目録を作成した。

■ デジタル化

自動車労連会館関連図面のデジタル化を実施した。

■ 保存管理

保存容器へ管理番号シールを貼り付けた。同時に管理場所表を作成した。また、アパチュアカードには、可能な限り定期的に、ガス吸着シートの交換を実施した。さらに図面については、大きさに合わせて収蔵場所を移動した。

(13) 渡辺仁資料

■ 保存管理

資料の形態にあわせて入れ替えた。同時に、フォンド番号未記載の資料には、フォンド番号を記載した。

■ 目録

既存目録を「最終目録」に書き換えた。

(15) 菊竹清訓建築設計資料

■ 概要

寄贈された1960年代及び慰霊碑関連の図面資料について、資料整理を継続して進めるとともに、前年度に借用した1970年代前半の図面資料及び慰霊碑関連の文書等資料について、賃借契約を締結し、寄贈手続きに向けた資料の確認作業を継続した。

■ 委託事業等

当該資料の整理をより効率的かつ適切に行うため、資料整理にあたっては、1970年代図面資料については、有限会社ナスカへ委託し、慰霊碑関連資料については、令和2年度に引き続き、昭和女子大戸田穣氏へ資料整理協力を依頼した。

さらに、今後の菊竹清訓資料の収集計画策定のため、現状調査業務を東京理科大に委託した。委託の概要は、資料の総体を把握し、具体的な収集計画を検討するため、これまでの展覧会に伴う資料調査及び資料の現状をまとめ、課題を整理するものである。

■ 資料整理

寄贈済み資料については、閲覧等利用の申請があったものから目録を作成し、デジタル化作業を実施した。借用資料については、令和2年度に引き続き、フラットニング及び資料番号の付与を中心に整理作業を進めた。なお、慰霊碑関連資料についても、図面資料を中心にフラットニング、資料番号付与、目録作成作業を進めた。

■ 菊竹清訓建築資料のアーカイブズ構築のための
アドバイザリー・コミッティー

3月7日にアドバイザリー・コミッティーを2年ぶりに対面（一部 Zoom）で開催した。菊竹資料の総量やこれまでの資料整理の状況、今年度の資料整理内容と資料の活用状況の報告に加えて、資料閲覧のために当館が作成したデータベースを紹介し、今後の菊竹資料の継承に向けた意見交換を行った。

■ デジタル化

寄贈された資料のうち、利用申請や収蔵品展等に使用予定の井上邸、こどもの国林間学校等、整理された資料の一部からデジタル化を先行して行った。

(16) 川添登資料

■ 資料確認・整理

令和2年度から継続して、贈与契約に向けて段ボール箱に収納された資料の整理、目録作成等を進めた。

(19) 平田重雄資料

■ 保存管理

書籍の一部を、図書整理にあわせ、図書としての登録を実施した。

(20) 岸田日出刀資料

■ 資料整理

大正時代の洋行、及び広東、台湾視察の日記帳について翻刻の下訳を行った。

■ 保存、管理

資料の形態、大きさを考慮し、容器を入れ替え、容器に管理番号シールを貼り付けた。

■ 資料紹介

昭和35（1960）年東京オリンピック施設委員長としての視察旅行時の日記帳の翻刻を実施し、内容の一部を、飛田ちづる「岸田日出刀の1964年東京オリンピック大会施設委員長としての視察時の日記帳に関する概要報告」（『国立近現代建築資料館紀要』第1号）で紹介した。

(23) 高橋靚一・第一工房資料

■ 資料調査

第2期の贈与契約に向け、アイテム番号の付与及びファイル目録作成を進めた。

■ 資料整理・目録作成

第1期贈与契約分資料について、アイテム目録の作成、デジタル化を進めた。

■ 保存・保管

資料の形態、大きさを考慮し、包材及び容器に入れ替えた。

(24) 前川國男建築設計資料

■ 資料整理

寄贈資料について、前年度からの目録作成作業を継続して進めた。

(25) 原広司＋アトリエ・ファイ建築設計資料

■ 資料調査・目録作成

目録作成を3,500件程度、デジタル化を1,800件程度進めた。令和4年秋に開催予定の原広司展に出陳する資料を優先的に作業対象とした。

■ 第二次寄贈に向けた手続き

令和4年3月1日付けの借用依頼に基づき、3月3日に資料館に204件の資料を搬入した。資料内容はスケッチ・図面等。令和4年度以降に第2回贈与契約に向けて資料調査及び員数確認を行う予定である。

(26) ブルーノ・タウト関連資料

■ 資料調査・目録作成資料

それぞれにアイテム番号を付与し、一部について、アイテム目録作成を進めた。

■ 保存・保管

資料の形態、大きさを考慮し、包材及び容器に入れ替えた。

(27) ヴァスムート社所有吉田著作関連資料

■ 資料調査・目録作成

資料整理及び目録作成をほぼ終了し、令和4年度にとりまとめ作業を進める。また、一部資料のデジタル化を進めた。

■ 保存・保管

資料の形態、大きさを考慮し、包材及び容器に入れ替えた。

(29) 篠井家旧蔵吉田鉄郎城端郵便局資料

■ 資料の概要調査

資料の内容及び数量の調査・確認をし、返却資料を含めデジタル化を進めた。

■ 資料受入れに向けた手続き

令和4年2月7日開催の第17回収集小委員会で、資料の詳細を説明し、収集相当の判断を得た。これを受けて令和4年3月23日開催の運営員会に報告し、審議の結果、資料受入れについて承認された。

2. 新規受入資料の概要

(23) 高橋靭一・第一工房資料

高橋靭一は、1924年中国青島市に生まれ、1949年東京大学第二工学部建築学科卒業、逓信省営繕部設計課勤務、1956年 武蔵工業大学建築学科助教授、1960年第一工房創立、1967年 大阪芸術大学主任教授就任（1995年退職）し、2016年 死去した。二度にわたる日本建築学会受賞など多くの受賞歴がある建築家である。本資料群は、第一工房において作成された建築設計図書、写真、スケッチ等の資料からなる。

資料は全て第一工房を出所とするもので、個人著作並びに法人著作の著作権者は高橋靭一氏の子息であり、株式会社第一工房代表取締役の高橋真氏に属する。

第一工房の発足当初から、事務所解散直前までの期間の資料が含まれる。代表作である大阪芸術大学のコンペ及び実施図面をはじめ、DOCOMOMO に選定された佐賀県立博物館などの60、70年代の作品から後期の作品まで、一連の建築作品の設計図書が含まれる。

本年度は、第1期として、佐賀県立博物館、大阪芸術大学塚本記念館を含むコア作品、141ファイル9,101点の贈与契約を行った。

Ⅱ. 展示・教育普及

1. 展覧会

令和3年度は、新型コロナウイルス感染拡大による影響から1年間延期となっていた丹下健三展「丹下健三 1938－1970　戦前からオリンピック・万博まで」を開催した。また、資料館収蔵資料を活用した収蔵品展として「令和3年度収蔵品展「住まい」の構想　収蔵資料が物語る名作住宅（1940－1975）」を開催した。並行して、令和4年度の展覧会2件の企画立案を行い、運営委員会及び企画小委員会の了承を得た。

(1)「丹下健三　1938–1970　戦前からオリンピック・万博まで」

■ 開催概要

タイトル

丹下健三　1938－1970　戦前からオリンピック・万

博まで
TANGE KENZO 1938–1970 From Pre-war period to Olympic Games and World Expo

趣旨

文化庁国立近現代建築資料館では、2014年～2016年度の3年間にわたり建築家・丹下健三（1913－2005）に関する建築資料の所在調査を実施してきました。東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会、建築・デザイン分野における大規模催事（ドコモモ世界大会、日本建築学会大会など）の開催を控え、これまでの建築家・丹下健三に関する建築資料調査の成果を活用した展覧会を開催し、我が国の近現代建築とその関連資料に対する理解増進に資することを目的としています。

この展覧会は日本の戦後復興に貢献した丹下を多角的に総括する東京で初めての回顧展となり、高知県立美術館協力のもとに石元泰博撮影写真、本邦初公開となるスケッチや多数資料を揃え、丹下の建築、都市、国土を構想する力の根源を探る展示内容となっています。

開催期間　令和3年7月21日（水）～10月10日（日）
会場　文化庁 国立近現代建築資料館
主催　文化庁
協力　株式会社丹下都市建築設計、内田道子、
公益財団法人東京都公園協会、
独立行政法人日本芸術文化振興財団、
ワールド・モニュメント財団、
アメリカン・エキスプレス、
一般社団法人 DOCOMOMO Japan、
高知県立美術館
ゲストキュレーター　豊川斎赫（千葉大学准教授）
制作協力　国立大学法人千葉大学
勝原基貴（千葉大学特任研究員）
企画　文化庁 国立近現代建築資料館
館内担当者　加藤道夫（当館主任建築資料調査官・東京大学名誉教授）
木下紗耶子（当館研究補佐員）
小池周子（当館研究補佐員）
アートディレクション・デザイン　寺山祐策事務所
特設ウェブサイト（デザイン）　大田暁雄
特設ウェブサイト（翻訳）　マチダ・ゲン、株式会社フレーズクレーズ
会場設営　株式会社第一広房 TOKYO
展示輸送　TERRADA ART ASSIST 株式会社
映像編集　岡篤郎
資料修理　有限会社東京修理保存センター
美術照明　竹下誠司（合同会社サムサラ）
翻訳　株式会社フレーズクレーズ
音声ガイド　株式会社ケイカ
模型制作　諏佐遥也（ZOUZUO MODEL）

■ 会場構成

［展覧会構成］
第一章：戦争と平和
第二章：近代と伝統
第三章：戦後民主主義と庁舎建築
第四章：大空間への挑戦
第五章：高度経済成長と情報化社会への応答
第六章：5つのキーワードの統合

■ 展覧会特設ウェブサイト

展覧会基本情報および概要を紹介。会期中に、展覧会紹介映像、シンポジウム・ギャラリートーク映像を順次公開。

■ グラフィックサイン・フライヤー・図録

体裁・部数　ポスター：B2判　片面カラー　600部
チラシ：A3判　両面カラー、二つ折り加工　30,000部
図録：B5横　82頁、初版　3,000部
第二版　1,500部
デザイン　寺山祐策事務所

■ シンポジウム

開催日　令和3年9月9日（木）
会場　国立近現代建築資料館
公開　展覧会特設ウェブサイトで動画公開
プログラム

キーノートスピーチ
「丹下健三とル・コルビュジエの間で」
加藤道夫（国立近現代建築資料館主任建築資料調査官／東京大学名誉教授）

講演
「時間のなかの丹下健三：20世紀と21世紀の間で」
加藤耕一（東京大学大学院教授）
「丹下健三をいかに未来につなぐのか
DOCOMOMOの活動を通して　共感力と想像力を喚起すること」
渡邉研司（DOCOMOMO Japan 代表理事／東海大学教授）

ギャラリートーク
・広島平和記念公園及び資料館
・丹下研究室の作業風景
・卒業設計「芸術の館」
・香川県庁舎
・東京カテドラル聖マリア大聖堂
・山梨文化会館
・国立代々木競技場の周辺環境とその歴史的文脈
・総括

翻訳
長谷川香（東京芸術大学講師）
ヴォイシュツケ, ロバート（国立西洋美術館リサーチフェロー）

■ 音声ガイド
概要　全16のプログラム（計25分程度）を各自のスマートフォンで視聴することができる。会場でQRコードを掲示した。（https://tange-kenzo.keica.link ※現在は公開を終了）
プログラム
00 イントロダクション　01 慰霊祭に集う人々　02 広島計画　03 生い立ち、丹下研究室　04 戦没学徒記念若人の広場　05 芸術の館　06 成城の自邸　07 桂　08 旧東京都庁舎　09 香川県庁舎　10 愛媛県民館　11 東京カテドラル聖マリア大聖堂　12 山梨文化会館　13 日本列島の地域構造・図集　14 国立代々木競技場　15 代々木周辺地域模型

■ メディア掲載（抜粋）
WEB
・Casa BRUTUS オンライン：青野尚子「日本建築の巨人、丹下健三の足跡を追う展覧会。」（https://casabrutus.com/architecture/193703）
・artscape Japan James Lambiasi. “Kenzo Tange: Architect of a New Modern Era in Japan”（https://artscape.jp/artscape/eng/focus/2110_02.html）
新聞
・大西若人「都市とともに 今も生きる丹下建築」『朝日新聞』2021年9月21日（夕刊）、3頁
・森田睦「記者ノート　丹下健三 1938－1970 戦前からオリンピック・万博まで　文化的価値の検証を重ねる意義」『読売新聞』、2021年10月5日、29頁
・渡辺真希「都内で丹下健三展　前半生 建築の足跡 山梨文化会館も紹介」『山梨日日新聞』、2021年10月7日
雑誌
・勝原基貴「「丹下健三 1938－1970：戦前からオリンピック・万博まで」展」『docomomo 会報』第30号、P15、2021年8月15日号
・保坂健二朗「丹下健三展の楽しみ方」『すばる』集英社、2021年10月号、pp.296–297
テレビ
・NHK 日曜美術館アートシーン、2021年9月19日放映

■ 来場者数（7月21日～10月10日）
来場者総数　14,179人
（合同庁舎正門：5,407人、旧岩崎庭園：8,772人）
一日平均来場者数　172.9人（82日間）

(2)「令和3年度収蔵品展「住まい」の構想　収蔵資料が物語る名作住宅　1940–1975」

■ 開催概要
タイトル
令和3年度収蔵品展「住まい」の構想　収蔵資料が物語る名作住宅1940–1975
Designing Home: Masterpiece Houses from NAMA’s Collection 1940–1975
趣旨
コロナ禍において在宅勤務の推進、家族生活の変化が生じ、「住まい」に対する考え方自体にも変化の兆しが見られ始めています。私達の住まいの考え方は、戦後復興期から1970年代初めの高度成長期までの住宅に関する様々な試みを土台として形成されました。都市への人口集中、持ち家願望、核家族化の進行、モダンでお洒落な生活空間の希求といった大きな社会状況の変化に応えるべく、様々な「住まい」が構想されました。それらを土台として、「住まい」のデザインは1970年代後半以降に多様性を伴って高度な発展を遂げ、今日では、日本の建築文化を支える重要なフィールドとなっています。本展覧会では、この「住まい」の構想の土台に焦点を当てます。当資料館の収蔵資料より、戦中および戦後復興期から1970年代半ばまでの住まいの構想資料を取り上げ、日本の住宅の試行と発展をわかりやすく、かつ、生き生きと蘇らせることを目指します。

主催　文化庁
協力　公益財団法人東京都公園協会

会場　文化庁国立近現代建築資料館
（東京都文京区湯島4-6-15 湯島地方合同庁舎内）
会期　2021年12月14日（火）～2022年3月13日（日）
10：00–16：30　休館日：毎週月曜日
* ただし1月10日（月・祝）は開館
2021年12月27日（月）～2022年1月4日（火）、1月11日（火）
企画　文化庁国立近現代建築資料館
小林克弘／主任建築資料調査官
小池周子／研究補佐員
木下紗耶子／研究補佐員
加藤直子／研究補佐員
飛田ちづる／研究補佐員
寺内朋子／研究補佐員
翻訳　坂本和子（英語）、朴玉順（韓国語）、Eric Yu（中国語）
アートディレクション　加藤弾（Gaim Graphics）、清武優子
会場設営　株式会社 芸宣、トップアート鎌倉、竹下誠司（合同会社サムサラ）

■ 会場構成

1章：木造の伝統とモダニズムの融合

日本の伝統木造の表現に、近現代建築のデザイン要素（骨組み構造、ピロティ、屋上庭園、自由な平面、吹抜け、単純な幾何学形態など）を取り入れるという課題への応答を見る。

前川國男｜自邸（大高正人による図面）：1942、坂倉準三｜龍村邸：1943、丹下健三｜自邸：1953、前川國男｜ NHK 富士見ヶ丘クラブ：1954、岸田日出刀｜衆議院議長公邸：1961、高橋靚一｜高垣邸：1962

2章：量産化と集合化

戦後日本の住宅不足を背景に飛躍的な研鑽が積み重ねられた様々な住まいの形。時代背景が色濃く見える試みの数々。現代における日本の「住宅」の骨格を作り上げた軌跡を探る。

前川國男｜上海華興商業銀行綜合社宅：1939、坂倉準三｜戦争組立住宅：1942、前川國男｜プレモス・シリーズ：1948、大高正人｜坂出市人工土地：1962

3章：都市化と住空間の創造

1964年の東京オリンピック前に大きく変化した日本の都市、そしてライフスタイル。その急激な変化に対応すべく構想された「住まい」の多様な模索を読み解く。

菊竹清訓｜スカイハウス：1958 ～、菊竹清訓｜井上邸：1955、吉阪隆正｜自邸：1955、坂倉準三｜正面のない家（仁木邸）：1962、原広司｜自邸：1974

本展では、一部の展示を一ケ月ごとに替えることで、より多くの貴重資料の特別展示（マンスリー・フィーチャー）を行った。

2021年12月14日（火）～2022年1月16日（日）
坂倉準三関連資料：
戦争組立住宅、ユニットプランの住宅、正面のない家（平野邸）、坂倉 OB 北村脩一氏オーラルヒストリー、初公開写真資料のスライドショー（12分）

2022年1月18日（火）～2月13日（日）
前川國男関連資料：
プレモス、華興商業銀行綜合社宅、華興商業銀行綜合社宅の地鎮祭から竣工までを収めたアルバムの全ページスライドショー（7分）

2022年2月15日（火）～3月13日（日）
菊竹清訓関連資料：
スカイハウス、井上邸、方形プランの家、菊竹清訓インタビュー（13分）

マンスリーでは、特集に応じ、展示物のほかスライドショー、動画も変えて展示を行っている。通し展示及びマンスリー展示では、キャプションの色を変え、訪問者への理解訴求を目指した。

■ グラフィックデザイン、フライヤー、図録

体裁・部数　ポスター：B2判　片面カラー　300部
フライヤー：A4判　両面カラー 10,000部
図録：B5横・82ページ　3,000部
デザイン　加藤弾（Gaim Graphics）、
コーディネーション　清武優子

■ メディア掲載

新聞
・毎日新聞　2021年12月27日夕刊
・読売新聞　2022年1月14日朝刊

雑誌
・住む　2022年冬号：P146
・住宅建築　2022年2月号：P136
・ディテール　2022年1月号：PR3
・宝島社 In Red　2022年2月号：P95

・新建築　住宅特集　2022年2月号：P156
・新建築　2022年2月号：P21
・Hanako　2022年3月号：P121
・月刊「東京人」編集室　2022年3月号：P141
・建築画報　2022年2月号
・日経アーキテクチャー　2022年2月10日号：P90

WEB

・Tokyo Art Beat
・JDN
・KENCHIKU
・新建築 online

■ 来場者数

来場者総数　3,700人
（合同庁舎正門：2,384人、旧岩崎庭園：1,316人）
一日平均来場者数　52.1人（71日間）
* 岩崎庭園は2022年1月11日より感染拡大防止対策のため休園

(3) 展覧会準備

令和4年度に向けて、下記の2件の展覧会の企画立案を進めた。以下、現時点での企画書概要を掲載する。

① 令和4年度収蔵品展
「こどもの国」のデザイン ―自然・未来・メタボリズム建築―［併設］新規収蔵資料紹介

併設：新規収蔵資料紹介
・岸田日出刀建築資料
・駒田知彦旧蔵坂倉準三関連資料
・村田豊建築設計資料
・木村俊彦構造設計資料
・角田栄資料
・ヴァスムート社旧蔵吉田鉄郎著作資料
・篠井家旧蔵吉田鉄郎城端郵便局資料

② 原広司　有孔体の世界
― モデルから建築へ、そして都市・宇宙へ ―（仮）

2. 資料提供

(1) 現物（貸出先：貸出資料　用途）

・鎌倉文華館：坂倉準三（鎌倉近代美術館）14点
展覧会「ひらかれたミュージアム」
・高島屋資料館：坂倉準三（新宿西口広場・小田急他）196点
展覧会「建築家・坂倉準三と高島屋の戦後復興―「輝く都市」をめざして―」
・岡本太郎美術館：坂倉準三（岡本太郎邸　立面図他）51点
展覧会「戦後デザイン運動の原点――デザインコミッティーの人々とその軌跡」
・東京都現代美術館：吉阪隆正（吉阪自邸　立面図他）78点
展覧会「吉阪隆正展　ひげから地球へ，パノラみる」

(2) 画像（貸出先：貸出資料　用途）

・個人：丹下マイクロ資料（静岡新聞東京支社）出版物への掲載（書名：UN/SUSTAINED）6点
・団体：大高（映像資料・図面：三春町民体育館）記念連続 web シンポジウムにて映像の放映1点
・企業：大高（プロフィール写真）株式会社広域高速ネット二九六「千葉県の優れた建築物を紹介する4K番組企画」にて放映3点
・個人：坂倉（神奈川県立近代美術館）多言語にわたる出版物への掲載1点
・個人：公立大学法人静岡文化芸術大学デザイン学部デザイン学科建築設計演習Ⅰ（デザイン専門科目）の授業資料として9分放映1点
・団体：大高（多摩ニュータウン自然地形案建物配置計画図）2点
・個人：村田豊（長生きする家）学術研究論文への掲載3点
・企業：吉阪資料（日本館図面）日本語版・英語版『ヴェネチア・ビエンナーレと日本の美術家』（仮称）（編集：独立行政法人国際交流基金，出版：平凡社）への図版掲載のため2点
・企業：前川國男設計（プレモス7）『クリティカル・ワード現代建築』掲載1点
・個人：大高正人（自動車労連会館に係る図面資料）全日本海員組合本部会館に関する調査研究　6点
・団体：坂倉準三（近鉄奈良ターミナルビル）教育講座「奈良公園周辺近代・近現代建築巡り」において，受講者への配布資料に掲載2点
・企業：大高正人（都心臨海部再開発計画78 ～ 90）広報誌『BM』vol.64 中面記事に掲載2点
・企業：坂倉準三（新宿西口駅本屋ビル・新宿西口広場および地下駐車場）　NHK 放送番組名『すこぶるアガるビル』番組放映のため3点
・団体：大高正人（南多摩ニュータウン自然地形案）パルテノン多摩ミュージアムのリニューアルにあたり、常設パネル内に掲載2点

(3) 資料閲覧及び複写の提供

資料閲覧及び複写の提供実績の概要は、以下のとおりである。

ア．閲覧実施件数及び閲覧点数の実績

実施件数：17件

閲覧に供した資料点数：7,936点

資料群別の実施件数

・坂倉準三建築設計資料：7件
・前川國男建築設計資料：1件
・吉阪隆正建築設計資料：2件
・菊竹清訓建築設計資料：2件
・吉田鉄郎建築設計資料：1件
・大高正人建築設計資料：3件
・村田豊建築設計資料：1件

イ．複写の提供実績

提供件数：2件

提供点数：119点

3. 第3回近現代建築アーカイブズ講習会【中止】

近現代の建築資料を所蔵する組織の学芸担当者等を対象とし、近現代建築資料における収集、整理、保存及び利用等に関する必要な専門的知識と技能の習得を目的として令和元年、2年と開催してきたが、令和3年度は新型コロナウィイルス感染症流行状況の予測が困難であったため、開催を中止した。

4. 近現代建築アーカイブズ研修オンライン教材制作

講習会中止の代替手段として、インターネットで公開する講義形式の研修教材番組2本を制作した。

(1)「アーカイブズの基礎」
（講師：保坂裕興学習院大学大学院教授）

(2)「近現代建築資料保存の意義と実践」
（講師：田中正之国立西洋美術館長）

令和4年度にインターネット上で公開し、基礎的な教材として活用する予定である。

5.『国立近現代建築資料館紀要』第1号刊行

当館の収蔵資料に関する情報と、館職員や協力者の調査研究成果の公開について、令和2年度から公開方法を検討してきたが、研究論文や資料紹介等を掲載する『国立近現代建築資料館紀要』として令和3年9月にオンラインと印刷（A4判、64ページ）の両方で刊行した（年1回刊行予定）。逐次刊行物としてISSNを取得した（ISSN 2436-6757〔オンライン〕ISSN 2436-6765〔印刷〕）。内容は以下のとおりである。

・論文

国立西洋美術館のポートフォリオについての比較研究　加藤道夫、加藤直子、寺内朋子

日本の近代建築を支えた構造家たち　竹内徹、浜田英明

・資料紹介

国立近現代建築資料館が所蔵するル・コルビュジエ設計の国立西洋美術館の図面群について　加藤道夫、加藤直子、寺内朋子

村田豊建築設計資料整理報告　飛田ちづる

岸田日出刀の1964年東京オリンピック大会施設委員長としての視察時の日記帳に関する概要報告　飛田ちづる

・プロジェクト

収蔵品展の意図とプロセス　令和2年度収蔵品展『ミュージアム1940年代−1980年代：始原からの軌跡』より　遠藤康一、木下紗耶子、川向正人

・年次報告

令和2年度国立近現代建築資料館活動報告

6. 収蔵資料検索システムの公開・運用

令和3年6月に収蔵資料検索システム（https://db.nama.bunka.go.jp）を公開した。収蔵する資料群の概要公開（16資料群）、ファイル（図面筒、図面フォルダ等）レベルまでの目録公開（5資料群）、アイテム（個別の図面や資料）レベルまでの目録公開（6資料群）、サムネイル画像の公開（一部：3資料群）を行っている。システムの管理は（株）VVVに委託した。

7. 資料のデジタル化

令和2年度から、一貫した仕様でのデジタル化作業をとりまとめて実施している。令和3年度は以下の資料4,262点について、スキャナによる高精細デジタル化を行った。

07_村田豊資料547点
10_大高正人資料1,346点
15_菊竹清訓資料832点
20_岸田日出刀資料82点
23_高橋兢一・第一工房資料464点
24_前川國男資料179点
25_原広司資料812点

Ⅲ．情報収集

1．オーラルヒストリー

令和3年度の作成実績なし。

Ⅳ．調査研究等

我が国の近現代建築に関わる存命建築家の構造資料の電子化継承に関する調査

1．実施概要

1990年代以降は建築資料の電子化が進み、このような電子化された建築資料をいかにアーカイブとして構築するか、そして適切に保管、活用していくかといった方策を見いだすことが今後の課題として認識されている。

本調査は他の建築資料よりもその資料的特性等から、先行して電子化が進んだ構造資料を対象として、これまで資料館が行ってきた3か年の構造家の概要資料調査の成果をふまえつつ、複数の存命建築家の資料について調査し、アーカイブ構築のための課題を整理し、ネットワーク化を含む構造資料の電子化継承にかかわるさまざまな可能性について検討することを目的とした。本年度は、昨年の成果を受けて次のとおり調査を実施し、その成果を「我が国の近現代建築に関わる存命建築家の構造資料の電子化継承に関する調査」報告書としてとりまとめた。

2．実施の記録

次のとおりワーキンググループによる調査を実施し、その成果を「我が国の近現代建築に関わる存命建築家の構造資料の電子化継承に関する調査」報告書としてとりまとめた。

主査：竹内徹（日本構造家倶楽部）

委員：伊藤潤一郎、佐々木睦朗、金田勝徳、金箱温春、多田脩二、中田捷夫、原田公明、満田衛資、森部康司（日本構造家倶楽部）、小澤雄樹（芝浦工業大学）、川口健一（東京大学）、安藤顕祐（日建設計）、浜田英明、藤本貴子（法政大学）

顧問：難波和彦

協力：加藤道夫、加藤直子（資料館）

第1回：令和3年10月21日（木）10時から12時

場所：オンライン開催

打ち合わせ内容：前年度の活動概要報告、今年度業務の概要説明および実施方法の確認等、資料館から加藤直子補佐が陪席

第2回：令和4年1月21日（金）、10時から12時

場所：オンライン開催

内容：レクチャー（第1回）を実施

講師：記憶の森研究所・齋藤柳子

題目：「建築のレコード・マネジメント―存命構造家の電子資料の継承をめざして―」＋質疑応答、その後に今年度業務の進捗状況の確認、資料館から加藤道夫主任が陪席

レクチャー概要：アーカイブズの定義と有用性、レコード・マネジメントとアーカイブズの違い、建築におけるレコード・マネジメント、デジタル時代のレコード・マネジメント等について解説。建築分野におけるレコード・マネジメントの具体的な方策として、フォルダ名・ファイル名の標準化（日付 / 固有名詞 / 内容形態）、業務フローに基づいたシリーズ別フォルダにデータを格納することなどが挙げられた。

第3回：令和4年3月4日（金）、13時から15時

場所：オンライン開催

内容：レクチャー（第2回）を実施

講師：日建設計・千葉太郎氏

題目：プロジェクト情報のデータ保管と情報共有＋質疑応答、資料館から加藤道夫主任、加藤直子補佐が陪席

レクチャー概要：日建設計設計部門統括室が保管対象とする書類の内容、社内システムの概要、設計図書の収集・保存・公開の流れ、保管している設計図書そのフォルダ構成についての解説がされた。システムの概要、設計図書の収集・保存・公開の流れ、保管している設計図書そのフォルダ構成についての解説がされた。

第4回：令和4年3月9日（水）13時から15時

場所：オンライン開催

内容：レクチャー（第3回）を実施

講師：弁護士・桑野雄一郎氏

題目：資料継承に関わる著作権について＋質疑応答、資料館から加藤道夫主任が陪席

レクチャー概要：著作権の概要、著作者との著作権者が異なる場合（法人著作、映画の著作物）、構造家の資料に関して考えられる著作権、資料継承に

伴って考えられる利用方法と該当する著作権について、資料継承に関する毛役について、解説いただいた。継承資料を扱う際には、著作物に該当するという前提で取り組むことがよいこと、著作権には独立した複数の権利が含まれるため、利用を想定して該当する権利を考える必要があることなどが注意点として挙げられた。

第5回：令和4年3月16日（水）17時から19時
場所：オンライン開催
打ち合わせ内容：最終報告書（案）の提示と確認

3. 調査結果概要

本年度の調査の結果、下記の点が明らかになった。

1) 構造家本人が逝去した場合はもちろん、存命の場合でも長年に渡り蓄積されたプロジェクトデータを後から体系的に整理するのは容易ではない。普段からデジタルデータを体系的にファイリングし、プロジェクト終了後はそのままアーカイブ化できるようなシステム構築が求められる。

2) 大手組織設計事務所では、デジタル化した構造資料 (映像、図面、CAD データ、構造計算書等) をプロジェクト段階より分類して共有データとして管理し、担当者に依らずアクセスできるように保存している場合が多い。特に映像データなどは保存時に版権関係を整理し、組織名で自由に利用できる状態として保存することが重要となる。

3) 知的財産としての著作物には所有権と著作権があり、著作権はさらに複製権、上演権、頒布権などに分離しており、著作物として成立するものは何らかの作家性のあるもの（誰がやっても同じ結果になるアウトプットは対象とならない）に限定される場合が多い。普段から知的財産となる可能性があるものは分離して整理・管理しておくことが望ましい。

V. 委員会

1. 運営委員会

令和3年度委員

（◎は委員長、○は委員長代理、五十音順　敬称略）
加藤雅久（居住技術研究所主宰）、◎川向正人（東京理科大学名誉教授）、国広ジョージ（国士舘大学教授）、隈研吾（東京大学特別教授・名誉教授）、○山名善之（東京理科大学教授）、六鹿正治（日本建築家協会会長）、渡部葉子（慶應義塾大学アート・センター教授）

開催状況

第18回：令和3年7月9日　※ Web 会議
〔主な議題〕
・資料の受入について
・展覧会の開催について
① 令和3年度収蔵品展
② 令和4年度及び5年度の展覧会企画

第19回：4年3月23日　※ Web 会議
〔主な議題〕
・資料の受入について
・展覧会の開催について
① 令和4年度収蔵品展（案）
② 令和4年度原広司展（案）
・今後の事業計画について

2. 小委員会

(1) 収集小委員会

令和3年度委員（◎は委員長、五十音順　敬称略）
加藤諭（東北大学准教授）、◎加藤雅久（居住技術研究所主宰）、角田真弓（東京大学技術専門職員 ）、藤木竜也（千葉工業大学准教授）、山崎幹泰（金沢工業大学教授）

開催状況

第16回：令和3年5月28日　※ Web 会議
〔主な議題〕
・資料の受入れについて

第17回：令和4年2月7日　※ Web 会議
〔主な議題〕
・資料の受入れについて
①吉田鉄郎城端郵便局資料

(2) 企画小委員会

令和3年度委員（◎は委員長、五十音順　敬称略）
太田泰人（美術史家）、大村理恵子（パナソニック汐留美術館学芸員）、◎国広ジョージ（国士舘大学教授）、鈴木明（武蔵野美術大学教授）、前田尚武（京都市京セラ美術館企画推進ディレクター）

開催状況

第15回：令和3年5月31日
〔主な議題〕
・令和3年度収蔵品展企画案について

第16回：令和4年2月18日
〔主な議題〕
・令和4年度収蔵品展企画案について
・令和4年度原広司展企画案について

(3) 情報小委員会

令和3年度委員（◎は委員長、五十音順　敬称略）
後藤真（国立歴史民俗博物館准教授）、齋藤歩（京都大学総合博物館特定助教）、永崎研宣（人文情報学研究所主席研究員）、森本祥子（東京大学文書館准教授）、◎渡部葉子（慶應義塾大学アート・センター教授）

開催状況
第12回：令和4年2月28日
〔主な議題〕
・法律課題ワーキンググループ報告について

＊法律課題検討ワーキンググループの活動
資料公開に当たっての公開制限の原則について当館の方針を定めるため、平成30年度以降、情報小委員会に法律課題検討ワーキンググループを設けて検討を行ってきたが、令和3年度に開催した3回の会合を経て報告「国立近現代建築資料館における建築資料公開に関する方針と基準」を小委員会に報告し、活動を終了した。資料館では本報告の内容を基礎に、公開の運用を行うこととしている。

＊ワーキンググループ構成員
【有識者】齋藤歩（京都大学総合博物館 特定助教）、戸田穣（昭和女子大学 准教授）、本間友（慶應義塾大学ミュージアム・コモンズ 専任講師）、三宅拓也（京都工芸繊維大学 助教）、山﨑鯛介（東京工業大学 准教授）
【資料館】田良島哲、飛田ちづる、谷口友里（令和3年9月まで）

＊会合の開催状況（回数は前年度からの通算）
第5回　令和3年6月21日　オンライン開催
第6回　令和3年11月1日　オンライン開催
第7回　令和3年12月21日　オンライン開催

Ⅵ．運営

1．施設の充実

特段の記載事項なし。

2．広報・広聴

(1) 資料館ウェブサイト

館の概要、収蔵資料、閲覧資料、閲覧等利用の案内、展覧会の開催、開館・閉館の予定等を告知するとともに、刊行物のデジタルファイル等を掲載した。なお、本年度は、感染症の流行で急な予定変更が多く生じたため、迅速にウェブサイトの告知をすることとした。

また、収蔵資料検索データベースを6月にWEB上に公開し、収蔵する16資料群の概要や、資料ごとに異なるが、ファイルレベル又はアイテムレベルでの目録公開及びサムネイル画像の公開を行った。

(2) 文京ミューズフェスタ2021（不参加）

文京ミューズマップ等により情報発信した。

(3) 上野文化の杜

上野文化の杜のポータルサイトで施設概要や展覧会の情報を発信した。

(4) アンケート調査

「丹下健三1938－1970　戦前からオリンピック・万博まで」、「令和3年度収蔵品展「住まい」の構想　収蔵資料が物語る名作住宅（1940－1975）」の来館者に対して、展覧会の評価等に関するアンケート調査（任意）を実施した。

Ⅶ．予算

令和3年度予算額　109,126千円

Ⅷ．組織

令和3年度職員名簿

館長	平山　直子（文化庁企画調整課長）
館長補佐	中島　充伸（文化庁企画調整課課長補佐）
副館長	浅田　泰司（R3.6.30まで）
副館長	竹田　透（R3.7.1から）

【研究系】

主任建築資料調査官（収集担当）	加藤　道夫
主任建築資料調査官（企画担当）	小林　克弘
主任建築資料調査官（情報担当）	田良島　哲
研究補佐員	寺内　朋子
研究補佐員	加藤　直子
研究補佐員	木下　紗耶子

研究補佐員　小池　周子
研究補佐員　飛田　ちづる
事務補佐員　谷口　友理（R3.9.30まで）
事務補佐員　室田　恵美（R4.1.1から）

【事務系】
事務室長　浅田　泰司　（R3.6.30まで）
※副館長兼務
事務室長　竹田　透　（R3.7.1から）
※副館長兼務
専門職　山口　俊浩　※建築資料調査官兼務
事務補佐員　酒口　ひろみ（R3.6.1から）

Ⅸ．年譜

令和3（2021）年

4月

平山直子館長（文化庁企画調整課長）就任（1日）

5月

国立近現代建築資料館運営委員会収集小委員会（第16回）（28日）　※ Web 会議

国立近現代建築資料館運営委員会企画小委員会（第15回）（31日）　※ Web 会議

7月

国立近現代建築資料館運営委員会（第18回）（9日）
※ Web 会議

「丹下健三 1938－1970　戦前からオリンピック・万博まで」（21日～ 10月10日）

「高橋靖一・第一工房資料」第1回贈与契約締結（27日）

12月

「令和3年度収蔵品展「住まい」の構想　収蔵資料が物語る名作住宅（1940 － 1975）」（14日～令和4年3月13日）

令和4（2022）年

2月

国立近現代建築資料館運営委員会収集小委員会（第17回）（7日）　※ Web 会議

国立近現代建築資料館運営委員会企画小委員会（第16回）（18日）　※ Web 会議

国立近現代建築資料館運営委員会情報小委員会（第12回）（28日）　※ Web 会議

3月

国立近現代建築資料館運営委員会（第19回）（23日）
※ Web 会議

国立近現代建築資料館紀要　第 2 号

2022（令和4）年9月30日　発行

編集・発行：文化庁国立近現代建築資料館
〒113-8553 東京都文京区湯島4-6-15　湯島地方合同庁舎内
電話 03-3812-3401
E-mail: nama@mext.go.jp
https://nama.bunka.go.jp/

制　作：美学出版合同会社
デザイン：石澤康之

非売品

Bulletin of
National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs
vol. 2

Published: September 30, 2022

Edited & Published by:
National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs
4-6-15 Yushima, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-8553, Japan
Phone: +81 (0) 3-3812-3401
E-mail: nama@mext.go.jp
https://nama.bunka.go.jp/

Production by: Bigaku Shuppan LLC
Design by: UZAWA Yasyuki

Not for sale

©2022 Agency for Cultural Affairs

National Archives of Modern Architecture,
Agency for Cultural Affairs